

平安宮大宿直跡・聚楽第跡

2025年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安宮大宿直跡・聚楽第跡

2025年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、須浜池町開発計画に伴う平安宮跡・聚楽第跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

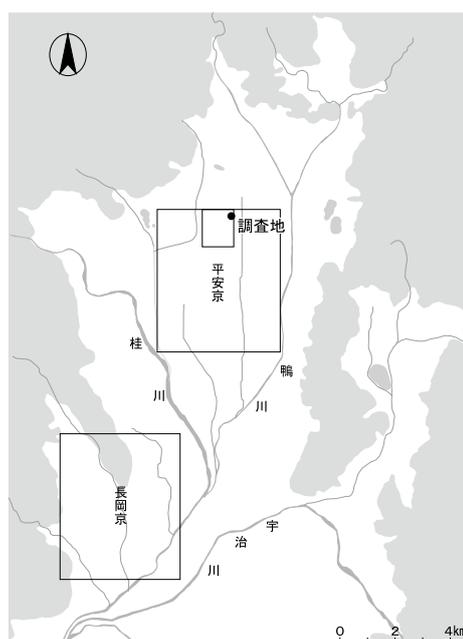
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

令和7年4月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 平安宮跡・聚楽第跡（京都市番号 24 K 037）
- 2 調査所在地 京都市上京区日暮通中立売下る須浜池町224番 他5筆
- 3 委 託 者 阪急阪神不動産株式会社 住宅事業本部長 古谷慎一
丸菱建設株式会社 代表取締役 菱田宏章
- 4 調査期間 2024年7月8日～2024年9月6日
- 5 調査面積 280㎡
- 6 調査担当者 早見由槻・三好孝一・谷野誠也
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「聚楽廻」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。土器類は番号のみとし、瓦類は「瓦」、土製品は「土」、金属製品は「金」、石製品は「石」、貝類は「貝」、脊椎動物遺存体は「骨」を前に付した。
- 13 本書作成 三好孝一・早見由槻・谷野誠也・岡田麻衣子
付章：株式会社 加速器分析研究所
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
- 15 協力者 網 伸也（近畿大学）、井上智博（公益財団法人大阪府文化財センター）、小野映介（駒澤大学）、鋤柄俊夫（同志社大学）、平尾政幸、丸山真史（東海大学）
五十音順、敬称略



（調査地点図）

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	2
2. 位置と環境	4
(1) 歴史的環境と立地	4
(2) 周辺の調査	4
3. 遺 構	7
(1) 基本層序	7
(2) 遺構の概要	7
(3) 平安時代前期の遺構	8
(4) 平安時代中期から後期の遺構	9
(5) 室町時代中期から後期の遺構	10
(6) 江戸時代後期以降の遺構	12
4. 遺 物	15
(1) 遺物の概要	15
(2) 土器類	15
(3) 瓦 類	19
(4) 土製品	20
(5) 金属製品	22
(6) 石製品	22
(7) 動物遺存体	23
5. ま と め	26
付章 放射性炭素年代測定結果 (AMS測定)	29

図 版 目 次

図版1	遺構	調査区平面図 (1 : 150)
図版2	遺構	調査区西部南壁断面図 (1 : 50)
図版3	遺構	調査区東部南壁断面図 (1 : 50)
図版4	遺構	調査区東壁断面図 (1 : 50)

- 図版5 遺構 溝状遺構200実測図(1:50)
- 図版6 遺構 柵1・2実測図(1:50)
- 図版7 遺構 建物1実測図(1:50)
- 図版8 遺構 柵3・4実測図(1:50)
- 図版9 遺構 塀198・199実測図(1:40)
- 図版10 遺構 土坑131・40・10・202実測図(1:30)
- 図版11 遺物 土器実測図1(1:4)
- 図版12 遺物 土器実測図2(1:4)
- 図版13 遺物 土器実測図3(1:4)
- 図版14 遺物 土器実測図5(1:6)
- 図版15 遺物 土製品拓影及び実測図1(1:2)
- 図版16 遺物 金属製品拓影及び実測図(1:2)、石製品拓影及び実測図(1:4)
- 図版17 遺構
- 1 調査区全景(北東から)
 - 2 調査区南半全景(北西から)
- 図版18 遺構
- 1 溝状遺構200完掘状況(北東から)
 - 2 溝状遺構200上層遺物出土状況(北西から)
 - 3 溝状遺構200下層遺物出土状況(北から)
- 図版19 遺構
- 1 埋納遺構45検出状況(東から)
 - 2 埋納遺構45遺物出土状況(東から)
 - 3 柵1・2(北から)
- 図版20 遺構
- 1 塀198〔左〕・塀199〔右〕(北西から)
 - 2 塀198・199(南から)
 - 3 地業100(北から)
- 図版21 遺構
- 1 土坑10遺物出土状況(西から)
 - 2 土坑40半裁状況(南から)
 - 3 土坑50甕出土状況(西から)
 - 4 土坑50甕据付状況(西から)
 - 5 土坑50甕除去後(西から)
 - 6 土坑50底面石検出状況(西から)
- 図版22 遺物 土器類1
- 図版23 遺物 土器類2、瓦類
- 図版24 遺物 土製品、石製品1
- 図版25 遺物 石製品2、金属製品、動物遺存体

挿 図 目 次

図1	調査地位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：1,000）	2
図3	調査前全景（北西から）	3
図4	作業状況（北東から）	3
図5	オルソ測量作業状況（南から）	3
図6	検証委員による指導（南東から）	3
図7	現地説明会風景（南東から）	3
図8	現地説明会風景（北東から）	3
図9	周辺調査位置図（1：2,000）	5
図10	基本層序柱状図（1：40）	7
図11	埋納遺構45実測図（1：10）	8
図12	土坑50実測図（1：40）	13
図13	土器実測図4（1：4）	18
図14	瓦拓影及び実測図（1：4）	19
図15	土製品実測図2（1：3）	21
図16	遺構変遷図（1：300）	27

表 目 次

表1	遺構概要表	7
表2	遺物概要表	15

付 表 目 次

付表1	土器類観察表	31
付表2	瓦類観察表	36
付表3	土製品観察表	37
付表4	銭貨観察表	39

付表5	金属製品観察表	39
付表6	石製品観察表	39
付表7	動物遺存体観察表	40

平安宮大宿直跡・聚楽第跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯（図1）

本調査は、（仮称）須浜池町開発計画に伴うものである。調査地は、上京区日暮通中立売下る須浜池町244番他に位置する。当該地は平安宮の北方官衙地域の大宿直東辺から内教坊西辺にかけての位置に相当し、両者の間には、南北方向の宮内道路が敷設されていたと推定されている。また、安土桃山時代の聚楽第の本丸跡にもあたる。

当地に開発計画が立案されたことを受け、2024年度に京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）が試掘調査を実施し、遺構・遺物の存在が確認された。これにより、文化財保護課から原因者に対し発掘調査が必要との指導が行われた。調査は事業計画

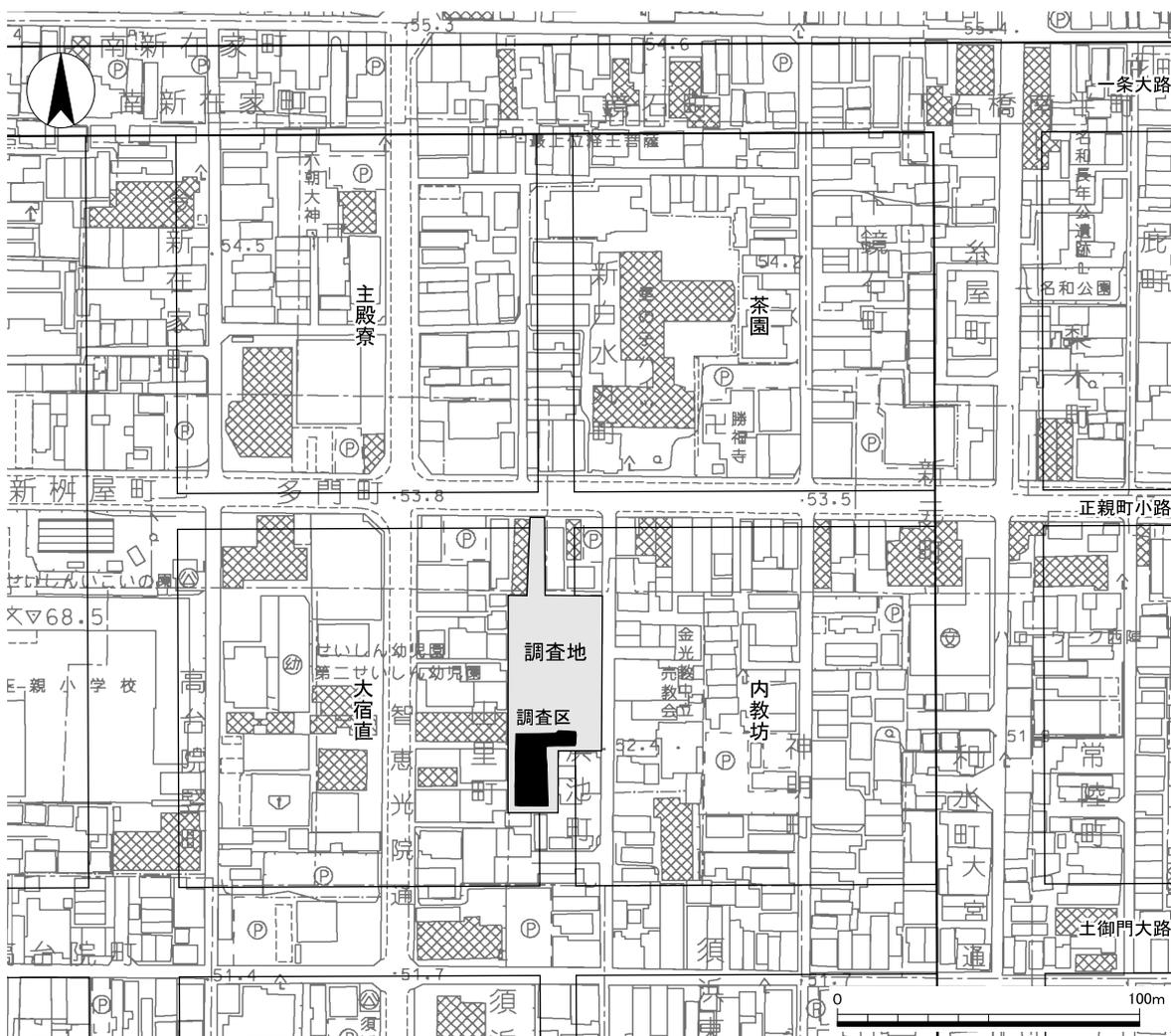


図1 調査地位置図（1：2,500）

者から委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。なお、大宿直跡での面的な発掘調査は今回が初の事例となる。

(2) 調査の経過 (図2～8)

本調査は2024年7月8日に開始し、9月6日に終了した。調査面積は280㎡である。

調査区の設定は、文化財保護課の指導に従い敷地内南半部に設定した。表土掘削には重機を使用し、遺構の検出および掘削は人力で行った。平安時代から江戸時代にかけての溝状遺構、地鎮遺構、柵、柱穴、土坑、地業、塀、土取穴などを検出した。

遺構掘削後は、平面図の作図および写真撮影、測量(写真測量)などの記録作業を行った。

途中、8月22日には調査検証委員会検証審査員の同志社女子大学山田邦和特任教授の検査を受けた。また、同月24日には地元を対象とした現地説明会を開催し、50余名の参加があった。

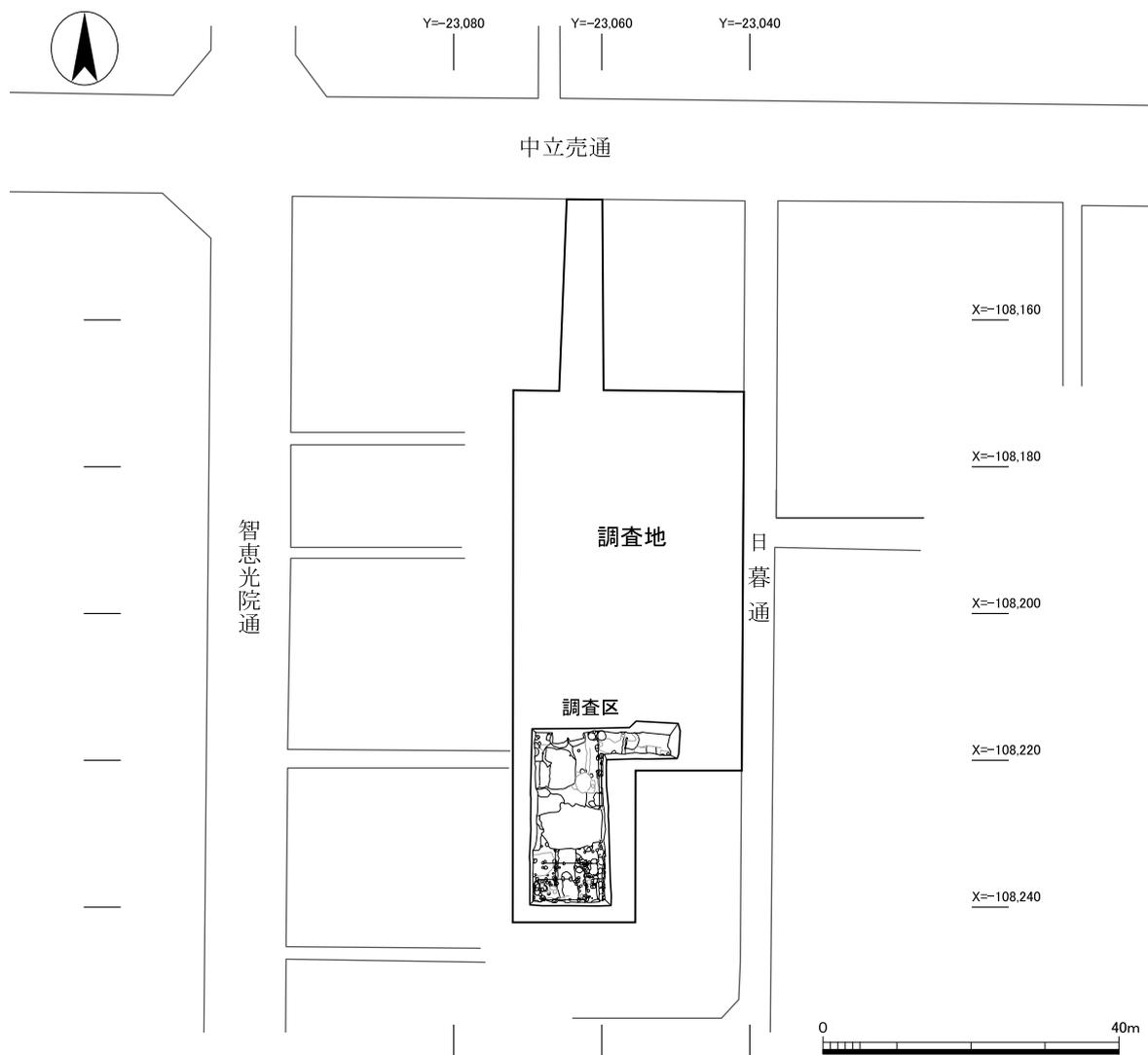


図2 調査区配置図 (1 : 1,000)



図3 調査前全景（北西から）



図4 作業状況（北東から）



図5 オルソ測量作業状況（南から）



図6 検証委員による指導（南東から）



図7 現地説明会風景（南東から）



図8 現地説明会風景（北東から）

2. 位置と環境

(1) 歴史的環境と立地

調査地は、平安宮の北東部に位置し、平安時代には大宿直が置かれていた場所にあたる。また、大宿直の東に位置したと推定されている内教坊との間の南北道路跡にもあたると推測される¹⁾。さらに、安土桃山時代の豊臣秀吉が築城した聚楽第の本丸跡にもあたると推測される。

大宿直は、中務省に所属する大舎人が宮中の警備を行う際の詰所であるが、中世においては、織物業者の集住地域となる。その経過については、高橋康夫氏による研究がある²⁾。高橋氏によると、いつ頃から大宿直に綾織・織手が集住するようになったかは判然としないが、大宿直に人家があったことを記す史料の存在から、平安時代末期に遡る可能性を指摘している。また、『明月記』の記述³⁾から14世紀前半には大宿直に綾織が集団居住していたことは一般に知られた事実であり、各種史料の記述からも室町時代初頭において大宿直が織物業の中心地であったことがわかるとした。さらに、大宿直には織手だけでなく、金融業者でもある酒屋・土倉が住み、繁華な地であったとされた。その後、応仁の乱における一条大宮の戦いによって罹災した大宿直の織手集団が各地に離散し、乱後に帰京した際に大宿直の故地には還らず、住みついたのが西陣であり、まさに大宿直が織物の町として栄えた西陣の源流であったと考えられる。

応仁の乱後の大宿直の地は市街復興から取り残されたとされる⁴⁾が、その後、天正14年(1586)に豊臣秀吉による聚楽第の造営が開始される。聚楽第は北は一条通、南は出水通、東は大宮通、西は浄福寺通に囲まれた地域に造営された。調査地は本丸跡地と推定され、須浜池と呼ばれる池が所在したとされる⁵⁾。現在の町名もそれに由来する。なお、調査地東に隣接する日暮通は豊臣秀吉による京都市街地改造後に開かれた通りである⁶⁾。

(2) 周辺の調査(図9)

大宿直跡と東に隣接する内教坊跡周辺は現在、住宅密集地であり、小規模な立会・試掘調査が多数実施されている(図9)。内教坊跡で実施された試掘4では、平安時代前期の土坑と室町時代の遺構が若干検出されている⁷⁾。しかし、その他の立会・試掘調査は、江戸時代以降の遺構・遺物の検出にとどまるものが多い。安土桃山時代の聚楽第造営に伴う大規模再開発により、それ以前の遺構が削平された可能性が指摘されている⁸⁾。

大宿直跡と内教坊跡ではこれまで面的な発掘調査は行われていないが、その北に位置したとされる茶園跡や主殿寮跡に範囲を広げると、3件の発掘調査事例がある。茶園跡南西部で実施された発掘1では、江戸時代後期の南北道路の路面と西側溝が検出されている⁹⁾。これは、現在は中立売通で止まる日暮通の北延長線上にあり、かつては道路が延びていたことが明らかとなった。主殿寮跡南東部で実施された発掘2では、江戸時代の井戸4基と大規模な攪乱が検出されている¹⁰⁾。主殿寮跡の南部中央で実施された発掘3では、江戸時代の井戸・柱穴・土取穴が検出され、江戸時代の陶磁

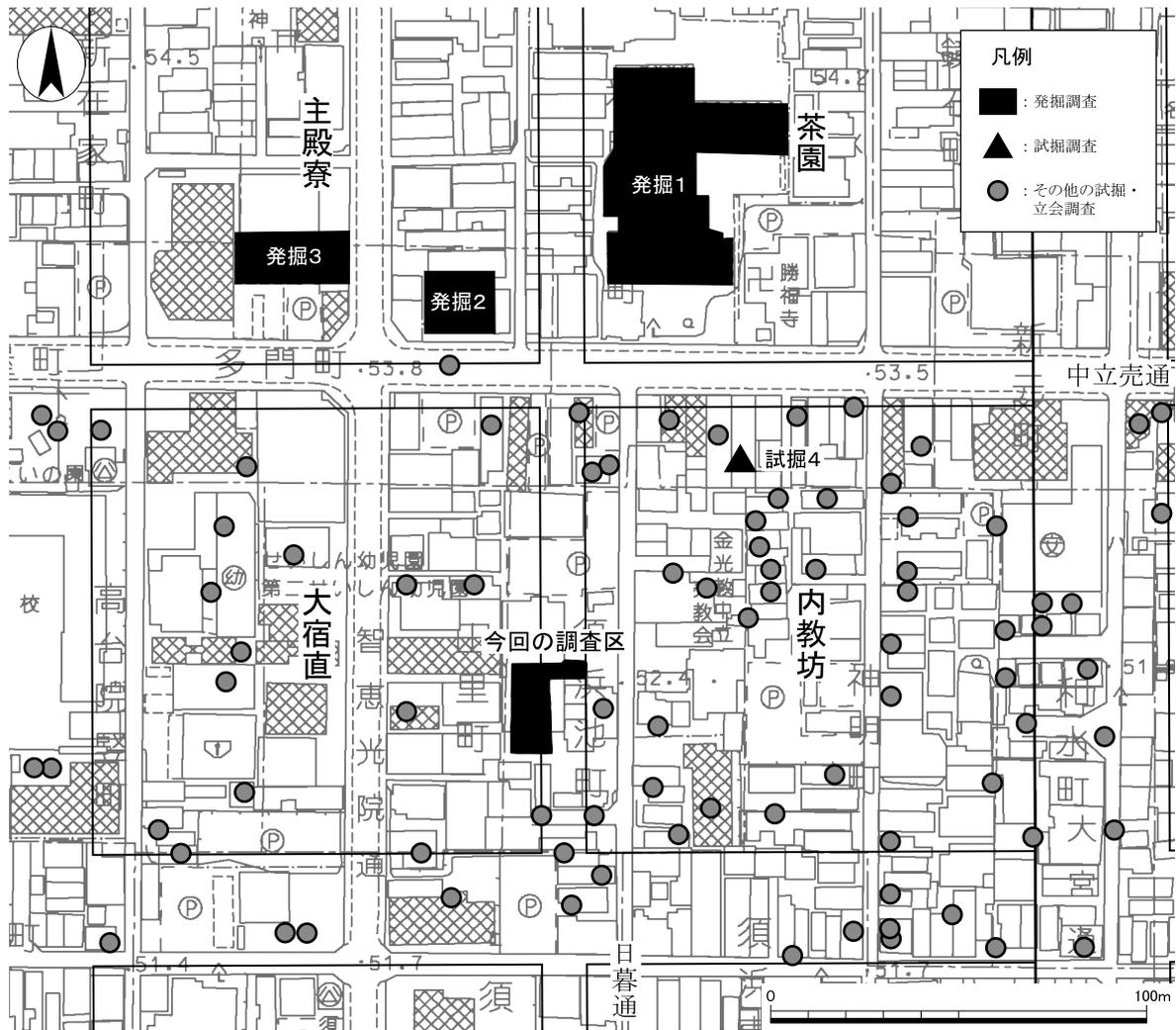


図9 周辺調査位置図 (1 : 2,000)

器類とともに平安時代の土師器が少量出土している¹⁾。

以上の通り、当該地域では3件の発掘調査と多数の立会・試掘調査が行われてきたが、いずれも遺構面の遺存状態が悪く、検出遺構の大半が江戸時代の土取穴や井戸である。遺物も江戸時代より古い時期のものは、ほとんどが細片としての出土である。土取穴は、近隣地域に分布するいわゆる「聚楽土」を採取するためのものと考えられ、これによって遺構が削平された可能性が考えられる。また、既往調査の報告の中でも述べられているように、安土桃山時代の聚楽第造成時または破却時にそれ以前の遺構面が削平されてしまった可能性も考えられ、考古学的には中世以前の様相は不明であった。

註

- 1) 「第1章 I 『平安宮 I』の作成について」『平安宮 I』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 2) 高橋康夫「第四章第二節 西陣の成立」『京都中世都市史研究』思文閣出版 1983年
- 3) 『明月記』安貞元年(1327)正月二十六日条、二十七日条

- 4) 前掲註2に同じ。高橋康夫氏は、大宿直の地が西陣の構えの外に位置した、としている。
- 5) 『京都坊目誌』(･･････････)によると、聚楽第のほぼ中央に位置した須浜池の跡地であり、町名もこれによるとされる。また、『京都府地誌』(･･････････)でも、「大内裏中、内教坊大宿直ノ間ニ涉レリ。古時、上東門内ニシテ、大宿直旧館ノ間ニ当レリ。天正ノ頃オヒ、聚楽館内洲浜池ノ址ナリト云。」としている。
- 6) 秀吉の京都市街改造後に開かれた通りであり、『京都坊目誌』(前掲註5に同じ)によると、元和元年(1615)に開通したとされる。また、この通りには聚楽第の正門である日暮門が存在したとされ、「門の構造裝飾極めて華麗にして、望見するもの日の暮るを知らずと。街名之に起る」と記されている。
- 7) 『京都市内遺跡試掘、立会調査概報 昭和56年度』京都市文化観光局、財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1982年
- 8) 「第3章 IV-6 北方官衙群跡」『平安宮 I』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 9) 「7 平安宮茶園跡」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年
- 10) 『平安宮跡』京都市埋蔵文化財年次報告1973-I 京都市文化観光局文化財保護課 1974年
- 11) 「6 平安宮主殿寮跡」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年

参考文献

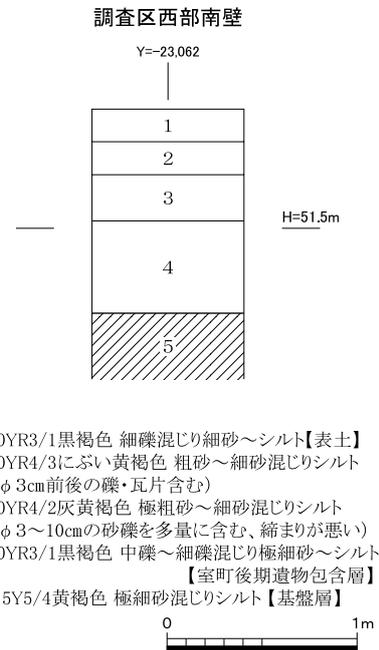
- 「大宿直」「内教坊」『平安時代史事典』角川書店 1994年
- 「上京区 日暮通、中立売通、聚楽第跡、新白水丸町、須浜池町」『京都市の地名 日本歴史地名大系第27巻』平凡社 1979年
- 「上京区概説」「西南地区 聚楽学区、正親学区」『史料 京都の歴史 第7巻 上京区』平凡社 1980年
- 高橋康夫「第四章第二節 西陣の成立」『京都中世都市史研究』思文閣 1983年
- 『平安宮 I』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図10)

基本層序は、第1層は表土で、敷地境界付近のみ残存する。第2層は直径3cm前後の礫の混じったシルトで、近世から近代にかけての遺物を含む。第3層は直径3～10cmの礫を多量に含む。第4層は細礫や中礫を含む極細砂～シルトで、層中に室町時代後期頃までの遺物を含む。第5層は極細砂混じりシルトの基盤層で、いわゆる「聚楽土」と呼称される地層である。遺構は基本的に第5層上面で検出した。

なお、第5層中に古土壌層が形成されていたことから放射性炭素年代測定を行い、約1万年前の縄文時代早期の年代を得た (付章参照)。



- 1 10YR3/1黒褐色 細礫混じり細砂～シルト【表土】
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色 粗砂～細砂混じりシルト (φ3cm前後の礫・瓦片含む)
- 3 10YR4/2灰黄褐色 極粗砂～細砂混じりシルト (φ3～10cmの砂礫を多量に含む、締まりが悪い)
- 4 10YR3/1黒褐色 中礫～細礫混じり極細砂～シルト 【室町後期遺物包含層】
- 5 2.5Y5/4黄褐色 極細砂混じりシルト【基盤層】

図10 基本層序柱状図 (1:40)

(2) 遺構の概要 (表1)

出土した遺構の時期は、平安時代前期、平安時代中期から後期、室町時代中期から後期、江戸時代後期以降に大別される。なお、調査地は聚楽第本丸跡推定地とされるが、当該時期の遺構・遺物は検出できなかった。

平安時代前期の遺構は、溝状遺構・埋納遺構・柵などを検出した。同じく中期から後期の遺構は、少数の柱穴・土坑などを検出した。

室町時代中期から後期の遺構は、建物・柵・塀・地業・柱穴・土坑・土取穴などを検出した。

江戸時代後期以降の遺構は、土坑・井戸・土取穴などを検出した。

以下、時代順に主要な遺構を報告する。

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代前期	溝状遺構200、埋納遺構45、柵 1・2	
平安時代中期～後期	柱穴47・103・126・151、土坑85・131・179	
室町時代中期～後期	建物 1、柵 3・4、塀198・199、地業100、柱穴79・145、土坑10・40・94・130・153・202、土取穴70・80	
江戸時代後期以降	土坑50、井戸160、土取穴 1～5	

(3) 平安時代前期の遺構 (図版 1)

溝状遺構 200 (図版 5・18) 調査区南側のほぼ中央で検出した。南北方向に長軸を持つ。北側は土取穴 1 によって掘り取られ、南側は調査区外へ続く。検出規模は、長さ 7.3 m、幅 2.2~2.8 m、深さ 0.3~0.5 m である。断面形は、偏平な皿状から隅丸の逆台形状をなす。溝底は南半分で一段低くなりそのまま南へと続く。埋土は灰黄色から黒褐色系の極細砂混じりシルトを主とする。最上位には図版 2 の 4 層に示す土壤化層が形成されるため、埋没後しばらくの間は静穏な環境にあったと推測される。南半部東側の東西約 2.0 m、南北約 3.0 m の範囲には、図版 5 南セクション (B-B') の 2 層と 3 層の層境で折り重なるように遺物が出土した (図版 18)。なお、この付近のみ灰や炭の細片が多く含まれる状況であった。遺物はコンテナ約 4 箱分が出土した。大型の破片や、完形に近い状態まで復元できる土器も多く、凝灰岩の破片も少量含まれていた。遺物の時期は、8 世紀末~9 世紀初頭¹⁾である。遺構の性格は、形状は溝だが、水が溜まった痕跡や各堆積層下位に水の流れた状況が認められないこと、図版 5 北セクション (A-A') 西側の 3 層に基盤層が崩壊したブロック土が混じり、これが開削後、時を経ずして堆積したとみなされることから、いわゆる溝ではないと判断した。埋没時期や、出土遺物に凝灰岩の破片が含まれることなどから、宮造営に伴う土取場として開削され、その際に生じた廃棄物を一括投棄した可能性が考えられる²⁾。

埋納遺構 45 (図 11、図版 19) 調査区南西部で検出した。平面形は歪な円形で、大きさは長径約

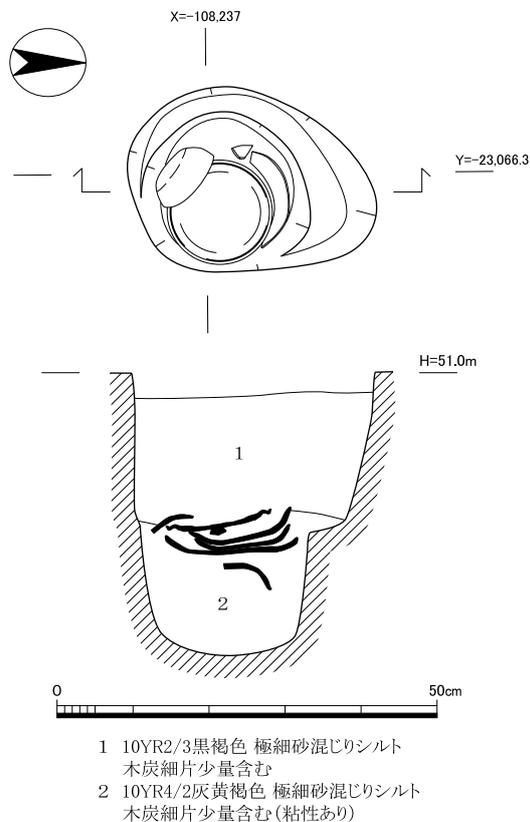


図 11 埋納遺構 45 実測図 (1:10)

0.35 m、短径約 0.25 m、深さ約 0.4 m である。断面形は底部が偏平な「U」字状で、北部は広がり段を形成する。埋土は上下位に大別される。各層中には大きさ 5 cm 程度の木炭が少量含まれていた。埋土中の穴底やや上位から 6 点の土器 (図版 11-1~6) が積み重なった状態で出土した。その順序は下から、土師器碗 (1)、土師器皿 (5)、土師器碗 (2)、土師器碗 (3)、須恵器杯蓋 (6)、土師器碗 (4) の順であった。土師器碗 (1・4) 以外は完形である。一番下の土師器碗 (1) と上から 1・2 段目の土師器碗 (4)・須恵器杯蓋 (6) は倒置した状態であった。正置された土器内堆積土を洗浄したが、内容物などは確認できなかった。これらの土器は、9 世紀初頭に位置づけられ、溝状遺構 200 出土遺物より若干新しい傾向にあると考えられる。ほぼ真北に軸を通して設けられる柵 1 と関連する鎮祭³⁾に伴う埋納遺構の可能性はある。

柵1 (図版6・19) 調査区南西部で検出した。埋納遺構45の北に位置する南北方向の柵で、柱穴3基(柱穴125・39・35)、2間分を検出した。主軸はほぼ正方位である。柱間は、北から2.4、1.6mである。掘形の形状は、隅丸長方形と不正な円形で、大きさは径0.5~0.6m、深さは0.2~0.3mである。柱穴39と柱穴125では径約0.15mの柱痕を確認した。各柱穴から土器類が出土した。細片のため明確な遺構の時期比定は困難であるが、重複関係から溝状遺構200よりは新しく、柵2より古いと考えられる。また、埋納遺構45と一連の遺構とすれば、9世紀初頭頃と推測される。

柵2 (図版6・19) 調査区南西部で検出した。柵1と直交する東西方向の柵で、柱穴5基(柱穴25・27・17・73・115)、4間分を検出した。西については延びる可能性があるが、推定位置が調査区外となるため不明である。柱穴17は柵1の柱穴35を掘り取り、柱穴25・27は溝状遺構200の埋土を掘り込む。主軸は東に対して北に約1度振れる。柱間は東から1.1、1.0、1.2、1.1mである。掘形の形状は南北に長い長楕円形ないしは隅丸方形である。大きさは長径0.5~0.6m、短径0.3~0.4m、深さは0.15~0.2mである。各柱穴から9世紀初頭~後半代の土器類や瓦が出土した。他の遺構との重複関係などからも、9世紀後半代に近い段階の遺構と考えられる。

(4) 平安時代中期から後期の遺構 (図版1)

柱穴47 調査区南西部で検出した。掘形の形状は円形で、径約0.25m、深さは約0.1mである。埋土は炭を含んだ黒褐色系の極細砂混じりシルトである。埋土中から土師器皿(図版13-88・89)が出土した。11世紀中頃から後半のものと考えられる。

柱穴103 調査区南西部で検出した。掘形の形状は円形で、径約0.3m、深さは約0.1mである。埋土は灰黄褐色系の極細砂混じりシルトで、炭や土師器細片を若干含む。埋土中から土師器皿(図版13-87)、玉縁口縁を持つ白磁碗、瓦器碗が出土した。平安時代後期以降のものと考えられる。

柱穴126 調査区南西部で検出した。東部を土取穴1に掘り取られる。掘形の形状は円形で、径約0.5m、深さは約0.1mである。埋土は炭化物を含むにぶい黄褐色系の粘性を帯びたシルトである。埋土中から土師器皿(図版13-86)が出土した。11世紀後半頃のものと考えられる。

柱穴151 調査区南西部で検出した。柵2を構成する柱穴73と重複し、その南辺を掘り取る。掘形の形状は円形で、径約0.3m、深さは約0.2mである。埋土は炭化物の混じった黒褐色系の極細砂混じりのシルトで、穴底には軒平瓦の破片を正置した状態で据え置いていた。この軒平瓦(図14-瓦9)が平安時代中期のものであることから、遺構の時期はそれ以降と考えられる。

土坑85 調査区南東部で検出した。後世の土坑40によって大きく掘り取られるため全容は不明である。遺存する部分での大きさは東西約0.6m、南北約0.85m、深さは約0.1mである。埋土は炭化物を多く含んだ暗褐色系の極細砂混じりシルトである。埋土中から平安時代中期後半頃の土師器皿片が出土した。

土坑131 (図版10) 調査区北西部の西壁際で検出した。西半は調査区外へ続く。検出された範囲内では半円形をなし、東西約0.5m、南北約1.15m、深さは約0.2mである。埋土は黒褐色~にぶい黄褐色系の極細砂混じりシルトが3層をなして堆積する。埋土中から土師器皿(図版13-90・

91) が出土した。12世紀前半頃のものと考えられる。

土坑179 調査区中央の東寄りで検出した。北東部を土坑50によって掘り取られる。平面形は不整形で、検出規模は東西約0.8m、南北約0.75m、深さは約0.1mである。埋土は黒褐色系の極細砂混じりシルトである。埋土中から土師器や瓦片、輸入陶磁器の白磁碗が出土した。平安時代末から鎌倉時代初頭頃のものと考えられる。

(5) 室町時代中期から後期の遺構 (図版1)

建物1 (図版7) 調査区南部で検出した。柱穴が群在し、後世の攪乱も多いが、形状と規模、埋土の類似度、地下式礎石の有無などに依拠し、柱穴7基(柱穴107・19・83・146・43・66・113)による東西棟の掘立柱建物を復元した。検出規模は、東西約5.7m、南北約4.7mで、柱間は不等間である。掘形の形状は歪な円形で、径0.3～0.5m、深さは0.1～0.3mである。柱穴107・83・146・43・113は、穴底ないしは埋土中位に偏平な石を据え置いて地下式礎石としていた。柱穴83・43は、断面で径0.1～0.15mの柱痕跡を確認した。各柱穴から平安時代から室町時代までの土器類が出土した。

柵3 (図版8) 調査区北東部の東壁に沿う位置で検出した。南北方向の柵で、柱穴4基(柱穴158・173・176・177)、3間分を検出した。主軸は北に対して約1度西に振れる。柱間は、北から2.8、2.4、2.0mである。掘形の形状は楕円形ないしは隅丸方形である。大きさは長径0.3～0.7m、短径0.3～0.4m、深さは0.2～0.3mである。柱穴158・177の穴底には上面の平らな円礫を据え置いて地下式礎石としていた。

柵4 (図版8) 調査区北東部の東壁に沿う位置で検出した。柵3の西に並行する南北方向の柵で、柱穴9基(柱穴163・162・182・183・181・180・170・174・178)を検出した。主軸は北に対して約1.5度西に振れる。柱間は不等間である。柱穴182・183、柱穴180・181は重複することから、作り替えが考えられる。掘形の形状は隅丸方形ないしは歪な円形で、径0.15～0.6m、深さは0.05～0.25mである。柱穴162・183は、断面で径0.1～0.15mの柱痕跡を確認した。柱穴183・174の穴底には偏平な石を据え置いて地下式礎石としていた。柱穴183の礎石は2枚重ねであった。柱穴180・181が柵3の柱穴158に、柱穴178が柵3の柱穴177に掘り取られることから、柵4は柵3に先行して設けられたと考えられる。

塀198 (図版9・20) 調査区南東部の東壁際で検出した。南北方向の布掘掘形をもつ塀の基礎と考えられる。北は攪乱を受け、東半と南は調査区外へ続く。検出規模は、長さ約7.0m、幅0.3～0.5m、深さは約0.5～1.0mである。掘形の底は起伏が激しい。埋土中位に径0.15～0.3mの円礫を平坦面を上にして据え置く。地下式礎石と考えられる。柱痕跡は確認できなかった。埋土中から土器・陶磁器類、瓦などが出土した。時期は15世紀後葉から16世紀初頭に位置づけられる。

塀199 (図版9・20) 調査区南東部の東壁際で検出した。塀198と平行する南北方向の布掘掘形をもつ塀の基礎と考えられ、東辺を塀198に掘り取られる。南は調査区外へ続く。検出規模は、長さ約8.2m、幅0.4～0.9m、深さは0.5～0.9mである。掘形の底は起伏が激しい。底には0.4～1.0

mの間隔で径0.2～0.3mの円礫を平坦面を上にして据え置く。地下式礎石と考えられる。礎石は、埋土中に位置するものや、ひとつの掘り込みに複数埋置するもの、上面の高さに差異認められるものがあり、幾度かの改築が行われた可能性が考えられる。柱痕跡は確認できなかった。埋土中から土器・陶磁器類、銭貨などが出土した。時期は15世紀後葉から16世紀初頭に位置づけられる。

地業100（図版20） 調査区北東部で検出した。南北方向の溝状の掘形を持つ。北を江戸時代後期以降の攪乱によって失い、南は調査区外へと続く。検出規模は、長さ約2.2m、幅0.3～0.5m、深さは約0.35mである。断面形は箱形で、埋土は図版3の16・17層に示した。17層には径5～10cm前後の円礫を充填する。築地塀などの掘込地業の可能性が考えられる。埋土からは15世紀後葉の土器類が出土した。

柱穴79 調査区南東部で検出した。掘形の形状は隅丸方形で、一辺約0.3m、深さは約0.1mである。埋土は灰黄褐色系の極細砂混じりシルトに、粘質を帯びたにぶい黄褐色シルトを斑紋状に交えた状態であった。埋土中から古瀬戸折縁深皿の小片（図13-136）が出土した。

柱穴145 調査区南東部で検出した。掘形の形状は歪な円形で、径約0.4m、深さは約0.1mである。穴底に径約0.3mの偏平な石を据え地下式礎石としていた。埋土は粘土質の褐色系シルトである。埋土中から龍泉窯系の青磁の壺頸部片（図13-137）が出土した。

土坑10（図版10・21） 調査区南東部で検出した。東を塀199に掘り取られることから、塀199に先行する遺構と考えられる。平面形は隅丸長方形で、長径約0.65m、短径約0.45m、深さは約0.3mである。土坑の中央にはほぼ完形に復元できる瓦器の羽釜一個体（図13-139）が坑底に接して正位置に据えられていた。

土坑40（図版10・21） 調査区南東部で検出した。北は土坑94、東は塀199に一部を掘り取られる。平面形は不整な楕円形で、長径約1.6m、短径約1.3m、深さは約0.7mである。埋土は4層に分けられ、いずれの層中にも焼土や炭化物を多く含み、伴出した礫にも被熱したものが含まれていた。埋土は柔らかく締まりのない状態で、一気に埋め戻されたような状況であった。各層中から細片化した土師器皿や焼締陶器、施釉陶器、瓦質土器などがコンテナ2箱分出土した。時期は15世紀中葉から後葉に位置づけられる。

土坑94 調査区南東部で検出した。先述した土坑40の一部を掘り取る。平面形は楕円形で、長径約0.85m、短径約0.6m、深さは約0.3mである。埋土は灰黄褐色系の極細砂混じりシルトの単一層で、埋土から土器類の破片などと共に、多数の円孔を穿つ滑石製石鍋の再加工品（図版16-石2）が出土した。時期は15世紀後葉から16世紀初頭に位置づけられる。

土坑130 調査区中央から南東側で検出した。北部を土取穴1によって掘り取られる。平面形は不整な楕円形で、検出規模は、東西約1.2m、南北約0.6m、深さは約0.1mである。埋土は灰黄褐色系の極細砂混じりシルトに粘性を帯びた褐色系のシルトが斑紋状に含まれていた。埋土中から15世紀代の特徴を示す土師器皿類のほか、混入して平安時代後期の輸入陶磁器の白磁片や尾張産の瓦（図版23-瓦11）が出土した。

土坑153 調査区北西端で検出した。東部を土取穴4によって掘り取られる。平面形は隅丸長方形で、長径約0.85m、短径約0.5m、深さは約0.2mである。埋土は炭や焼土を交えた褐色系の粘性を帯びたシルトを含む、にぶい黄褐色細砂混じりシルトである。埋土中から15世紀代と考えられる土師器皿や滑石製石鍋の転用品（図版16－石1）が出土した。

土坑202（図版10） 調査区北東部で検出した。地業100や土取穴70、攪乱によって大きく掘り取られ遺存状況が悪い。平面形は不明で、検出規模は東西約0.5m、南北約1.5m、深さは約0.5mである。最下層には炭や灰を多量に交えた土層が堆積する（8層）。埋土中から備前焼の播鉢（図13－140）、輸入陶磁器、瓦質土器などが出土した。

土取穴70 調査区北東部で検出した。東側と上半は攪乱によって失い、北端は調査区外へ続く。検出時の平面形は歪んだ円形である。検出規模は東西約1.8m、南北約2.3m、深さは約0.4mである。埋土は褐色系の粘質を帯びたシルトや径5cm前後の礫が混じった灰黄褐色極細砂混じりシルトである。埋土中から15世紀代と考えられるの土器類とともに永楽通寶（図版16－金5）が出土した。なお、この遺構から出土した青白磁の水注（図13－138）は鎌倉時代後期から室町時代初期頃のものと考えられ、伝世品もしくは混入品の可能性がある。

土取穴80（図版3） 調査区北東隅で検出した。北側と上半は攪乱によって失い、南は調査区外へ続く。検出時の平面形は溝状で、検出規模は東西約1.5m、南北約1.0mであるが、東部南壁断面（図版3）から検証した規模は、東西約2.3m、深さは約1.0mである。埋土中から15世紀後葉から16世紀初頭の土器類が少量出土した。

（6）江戸時代後期以降の遺構（図版1）

土坑50（図12、図版21） 調査区中央の東壁際で検出した。東は調査区外に続く。平面形は隅丸長方形と考えられる。検出規模は、東西約1.3m、南北約1.8m、深さは約1.0mである。断面形は箱形で、底面中央が一段窪む。中央の窪んだ部分には径0.1～0.2mの円礫数個が埋置されていた。埋土は水平に堆積し、中位には漆喰層（5層）が認められる。断面観察から、4層上面から甕据え付けのための掘形を掘削し、漆喰ブロックを混ぜた土で円盤形の台を構築し（3層）、その上に漆喰を薄く敷いて備前焼の大型甕を正位置に据え、その周囲を2層で充填したと考えられる。さらに大型甕の底部内面に、近現代の播鉢をモルタルで塗り込め二重底としている⁴⁾。甕の上位は攪乱により大破していたが、内部に落ち込んだ破片を接合し、全体を復元することができた（図版14－141）。慶長年間後半の17世紀初頭に製作されたものと考えられる。掘形内からは、近世後半代の陶磁器類のほか、端面に「罽」の押捺のある瓦片（図14－瓦10）などが出土した。

井戸160 調査区北端中央部で検出した。平面形は歪な円形で、径約1.3m、深さは1.2m以上である。埋土中から近現代の土器類、土人形や泥面子などの土製品、寛永通寶（図版16－金7）、動物・魚の骨（図版25－骨1～4）などが出土した。

土取穴1 調査区中央で検出した。平面形は不整な隅丸長方形で、検出規模は、東西約8.5m、南北最大約6.0mで、深さは約1.0mである。穴底はほぼ平坦で、それより下位の基盤層には小礫や粗

砂が混じるため、聚楽土を採取するための土取穴と考えられる。埋土中から江戸時代後期以降の土器・陶磁器類、寛永通寶（図版16－金8）、海水生のアカガイ（図版25－貝3）などが出土した。中でもヨーロッパ製軟質磁器の皿（図13－142）は京都市内では7例程度しか出土例のない稀有な資料である。

なお、この土取穴の壁面下位で層厚約0.1mの古土壌が観察されたため、これの放射性炭素年代測定（AMS測定）を行い、縄文時代早期の年代を得た（付章参照）。

土取穴2 調査区北西部で検出した。平面形は不整形で、東西約4.5m、南北約6.0m、深さは約3.5mである。埋土は、上位が純層に近い灰層、以下が焼土や炭、陶磁器類や瓦片が多数混じった黒褐色系のシルトから細砂である。埋土中から江戸時代後半以降の陶磁器類や土製品、石製品、金属製品のほか、埴塼（図版24－土51～54）が出土した。

土取穴4 調査区北辺の西寄りで検出した。北は調査区外へと続く。不整形な楕円状の掘り込みが重なりながら東西に連なる。検出規模は、東西約4.8m、南北約2.0mで、深さは壁面崩落の危険性が生じたため約1mまでの掘削とした。埋土中から江戸時代後期以降の陶磁器類、棧瓦、土製品、金属製品のほか、埴塼（図版24－土55）、動物骨（図版25－骨5）や貝類（図版25－貝1・2）が出土した。また、ガラス片が含まれることから埋没時期は幕末と考えられる。

註

- 1) 平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年
- 2) 溝状遺構200は、図1に示す大宿直東側に敷設されたと推定される宮内南北道路の西側に沿って設けられた位置関係となる。同様の土取穴として利用したと考えられる遺構には、以下の事例がある。

宮内では、平安宮左兵衛府跡・侍従所跡の調査で検出されたSD4・溝SD59（平尾政幸「X 平安宮左兵衛府跡」『平安京跡発掘調査概報』京都市埋蔵文化財研究所概報集1978－Ⅱ 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1978年、平尾政幸「Ⅲ 平安宮左兵衛府跡・侍従所跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成21年度』京都市文化市民局 2010年）

京内では、平安京右京七条一坊七町跡で検出された内溝（東 洋一「(2) 坊城域の可能性とその景観」『平安京右京七条一坊七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016－2 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016年）

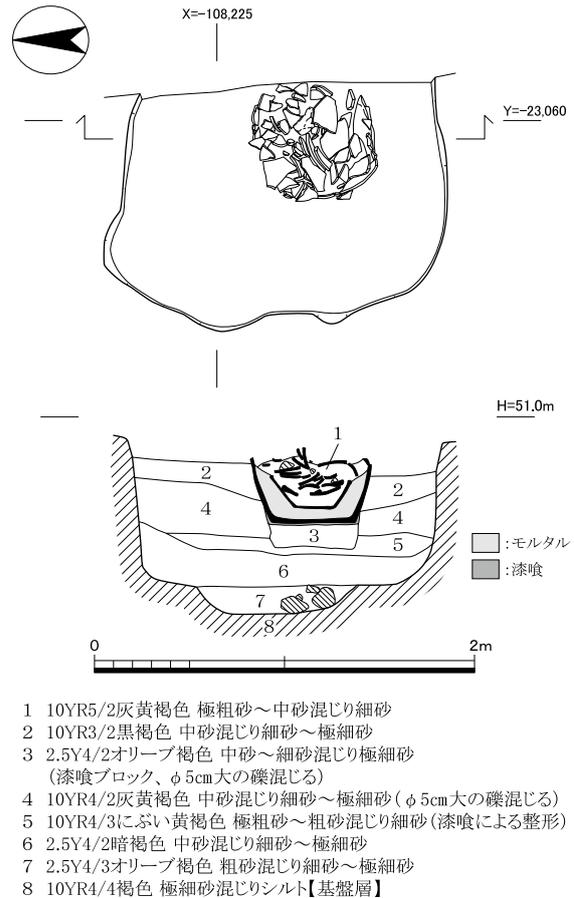


図12 土坑50実測図（1：40）

- 3) 上村和直「3 宅地内埋納遺構について」『平安京左京二条四坊十町』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第19冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2001年、その中でも上村和直氏の分類によるⅠ類に相当すると考えられる（上村和直「都城における埋納遺構－鎮祭遺構を中心にして－」『瓦衣千年－森 郁夫先生還暦記念論文集－』 森 郁夫先生還暦記念論文集刊行会 1999年）。
- 4) 大型の埋甕の底部を播鉢とモルタルで補強する例は、2021年に実施された平安京左京八条四坊八町の土坑61でも確認されている。（岡田麻衣子・小檜山一良『平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2021－11 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2022年）

4. 遺物

(1) 遺物の概要 (表2)

遺物はコンテナで50箱出土した。内容は土器や陶磁器類を主とし、瓦類・土製品・石製品・金属製品・動物遺存体がある。時期は平安時代前期、平安時代中期から後期、室町時代中期から後期、江戸時代後期以降のものが含まれる。内容は各時代別に以下の通りである。

平安時代の遺物は前期の資料が大半を占め、特に溝状遺構200からは平安時代前期の土器類がまとまって出土した。種類は土師器・須恵器・黒色土器・陶質土器のほか、瓦、製塩土器がある。中期から後期の遺物は、柱穴や遺構検出時に出土したもののほか、後世の遺構に混入した状態で出土した緑釉陶器や瓦器椀、輸入陶磁器、瓦がある。

室町時代中期から後期の遺物は、土坑40からまとまって出土したほか、堀198・199などから出土した。種類は土師器・瓦質土器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器、瓦、石製品、金属製品がある。

江戸時代後期以降の遺物は、土取穴や土坑から出土した。種類は土師器・陶磁器・ヨーロッパ製軟質磁器、瓦、土製品、石製品、金属製品、動物遺存体がある。

(2) 土器類 (図13、図版11～14・22・23、付表1)

埋納遺構45出土土器 (図版11・22 1～6) 1～4は土師器椀¹⁾Aである。外面調整はユビオサエの後ナデで共通し、1のように明瞭な凹凸を残す例も含まれる。5は土師器皿Aである。2・

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代前期	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、製塩土器、軒丸瓦、軒平瓦、凝灰岩碎片		土師器53点、須恵器29点、緑釉陶器1点、黒色土器1点、陶質土器1点、製塩土器6点、軒丸瓦1点、軒平瓦2点		
平安時代中期～後期	土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、軒丸瓦、軒平瓦、瓦、銭貨		土師器6点、軒丸瓦4点、軒平瓦1点、平瓦1点、銭貨1点		
室町時代中期～後期	土師器、焼締陶器、施釉陶器、瓦質土器、輸入陶磁器、軒丸瓦、石製品、銭貨、金属製品		土師器29点、焼締陶器4点、施釉陶器4点、瓦質土器8点、輸入陶磁器4点、軒丸瓦1点、石製品2点、銭貨4点、金属製品1点		
江戸時代後期以降	焼締陶器、輸入陶磁器、瓦、土製品、石製品、銭貨、金属製品、動物遺存体		焼締陶器1点、輸入陶磁器1点、刻印瓦1点、土製品49点、石製品2点、銭貨3点、金属製品2点、動物遺存体8点		
合計		64箱	231点 (21箱)	1箱	42箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より14箱多くなっている。

4・5は口縁端部に油煙が付着する。6は須恵器の杯B蓋である。2・3・5・6は完形である。これらは1 B段階に位置づけられるが、調整にユビオサエを多用すること、器高を減ずることなどから、溝状遺構200出土遺物と比較してやや新しい傾向にある。

溝状遺構200出土土器（図版11・12・22 7～84） 総数78点を図化した。種類は土師器、黒色土器、須恵器、陶質土器がある。総体に占める須恵器の割合は概算で5%強、黒色土器は図化した以外に破片が数点ある。

土師器には椀A、杯A、皿A、杯B蓋、杯B、小椀、壺E、甕、高杯がある。椀A（7～17）のうち13・14は内面に成形時のハケを残すことで他と相違し、15は他の個体が外面ヘラケズリ手法を主体とする中、唯一ユビオサエで調整し、胎土と共に相違する。17の内面見込みには五指状の針描が施される。杯A（18～25）は、すべて外面の調整にヘラケズリを施す。皿A（26～37）は法量から26～32の小、33～37の大の二群に分けられる。外面調整は35のみユビオサエで、他はヘラケズリである。35の外側面には墨書により横方向に「二番」と記される。38・39は杯B蓋である。杯B（40～44）は法量から大中小に大別される。小型の40は内面に斜め方向に1帯、その上中下に3帯の下弦の連弧状暗文をヘラミガキにより描出する。このような例は大阪府中・南河内地域で散発的に見受けられる。41・42は形態や調整手法が共通するが、41は精良な胎土を用いて丁寧に仕上げられ、内面見込みには「井」の字状の線刻がみられる。43・44は大型品で、43はほぼ完形である。小椀（45）は法量と外面のユビオサエ手法からミニチュアともみなされるものである。壺E（46～48）は法量に差異は認められるが、器形や外面に施される弧状に反復させながら行われる分割ヘラミガキは共通する。甕（49～52）は法量で大小に区分され、形態に小差は認められるが、口縁端部がやや摘まみ上げられることは共通する。53は杯部の欠損した高杯である。外面は下から上に七方向から削って整え、裾外面に弧状のヘラミガキを数回に分けて施す。

黒色土器には内面を黒化処理したいわゆるA類の杯（54）がある。内外面とも横方向の丁寧なヘラミガキを施した後、内面中位にヘラミガキを螺旋状に重ね、崩れた輪花様の文様を2箇所を描出する。胎土は細粒砂質で、細かな黒雲母を多く含む。

須恵器には杯蓋、杯A・B、皿、瓶子、壺G、壺、平瓶、鉢、甕がある。杯蓋（55～63）は法量で55～57と58～63の大小に区分される。64～68は杯A、69～72は杯Bである。杯Bは法量で69～71と72の大小に区分される。73～75は皿である。76は瓶子、77は完形の壺Gである。78は壺の底部、79は壺の口縁部、80は平瓶である。79・80は降灰釉が観察される。鉢（81・82）は口縁部の形状に小差はあるが、全体的な形状や調整手法は共通する。甕（83）の口縁部は形態や器面の色調から猿投産と判断される。

陶質土器には84の耳壺がある。きわめて緻密に焼き締められた壺で、断面は赤褐色系に焼き上げられ、表面は灰色系の色調を帯びた滑らかな釉が観察される。体部上面には断面梯形をなす一条の凸帯をめぐらせ、それを跨ぐように偏平な縦長の耳を付し、その方向に円孔を通す。形態的には耳壺に分類されるが、須恵器とは異なる諸相を持つため、輸入品の可能性も考えられる。

以上のうち、土師器は1 B段階に分類される。中でも椀Aの13・14のように平安宮大極殿院跡・

聚楽遺跡土取穴27出土土師器の²⁾椀の内面にハケを残す資料が含まれる一方、平安宮左兵衛府・侍従所跡SD04・59出土の椀に確認される外面にまばらなヘラミガキを施す資料³⁾は含まれていない。これらに伴う須恵器や他の土器類との共伴関係、さらに器種構成や出土状況から、平安宮造営初期段階の一括性の高い資料と位置づけられる。

柱穴27出土土器（図版13 85） 85は緑釉陶器の椀である。削り出しの輪高台で、全面に施釉され、内面見込みには重ね焼きの痕跡が観察される。焼成は硬質である。9世紀後半代に洛北で生産されたものと考えられる。柱穴27は柵2を構成する柱穴の一つである。

柱穴126出土土器（図版13 86） 86は土師器皿Aである。4B～4C段階、11世紀後葉頃のものと考えられる。

柱穴103出土土器（図版13 87） 87は土師器皿Nである。4C段階、11世紀後葉頃のものと考えられる。

柱穴47出土土器（図版13 88・89） 88は土師器皿A、89は土師器皿Nである。4B～4C段階、11世紀後葉頃のものと考えられる。

土坑131出土土器（図版13 90・91） 90・91は土師器皿Nである。4C～5A段階、12世紀前葉頃のものと考えられる。

土坑40出土土器（図版13 92～123） 総数32点を図化した。種類は土師器、瓦質土器、焼締陶器、施釉陶器がある。

土師器には皿N（92～97）と皿Sh（98～103）、皿S（104～113）がある。

瓦質土器には鍋（114・115）、羽釜（116）、鉢（117～119）がある。

焼締陶器には備前焼の播鉢（120・121）、信楽焼の播鉢（122）がある。

施釉陶器には古瀬戸直縁大皿（123）がある。

以上のうち土師器皿は9B～9C段階に位置づけられ、15世紀中葉から後葉頃のものと考えられる。

堀198出土土器（図版13・23 124～131） 8点を図化した。土師器、施釉陶器、輸入陶磁器がある。図化不可能だが、共に出土した遺物に瓦質土器、焼締陶器の備前焼がある。

土師器には皿Sh（124）、皿Sb（125・126）、皿S（127・128）がある。

施釉陶器には古瀬戸の合子（129）、水滴（130）がある。129の外面には菊花弁をかたどった印花文が押捺され、その後全体に施釉する。130には形骸化した把手が付され、注口部端の欠損部には黒漆が観察されるため、補修されたと考えられる。

輸入陶磁器には、龍泉窯系青磁の盤（131）がある。内面に片切彫風の刻線を放射状にめぐらせ、口縁上端部には紡錘形の刻目文を配す。

以上のうち土師器皿は9C～10A段階に位置づけられ、15世紀後葉から16世紀初頭頃のものと考えられる。

堀199出土土器（図版13 132・133） 132・133は土師器皿Sである。9C～10A段階、15世紀後葉から16世紀初頭頃のものと考えられる。

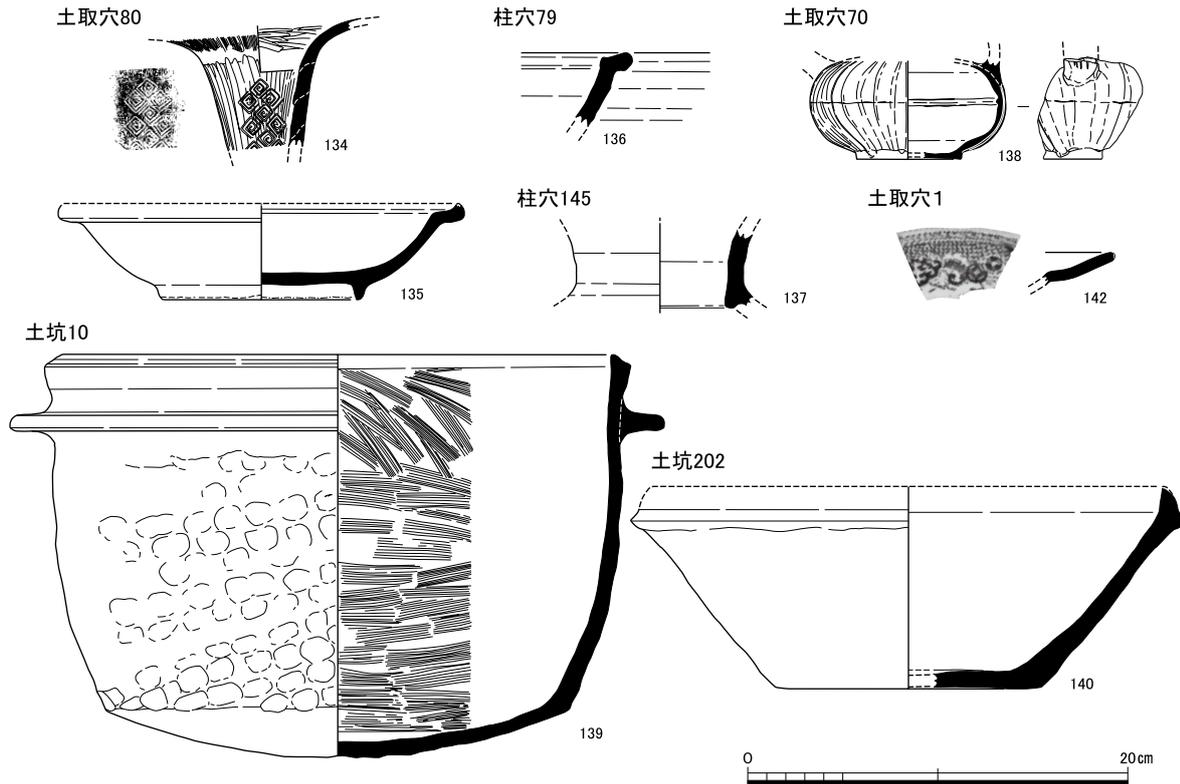


図13 土器実測図4 (1:4)

土取穴80出土土器(図13 134・135) 134は瓦質土器の風炉の脚部である。外面と内面上位に丁寧な縦横のヘラミガキが施され、表面にはキラコが撒かれている。表面には雷文の印刻が斜め方向に4段以上行われている。135は輸入陶磁器の龍泉窯系青磁盤である。内外面とも無文で、内面見込みには灰を被って固まった窯傷が数箇所観察される。

柱穴79出土土器(図13 136) 136は施釉陶器の古瀬戸折縁深皿である。時期は15世紀中頃と考えられる。

柱穴145出土土器(図13 137) 137は輸入陶磁器の青磁の壺頸部である。頸部と体部を接合するための施釉が体部との接点まで入り込んでおり、そのまま剥離したものと考えられる。

土取穴70出土土器(図13 138) 138は輸入陶磁器の青白磁の水注である。縦位の把手が付される。成形は型作りで、半球状の素地を上下に貼り合わせて偏平な球形とする。その痕跡は内面の凸状の素地の隆起として観察される。底部以外の外面に明るい青白色の釉薬を掛ける。室町時代中期頃の遺物と共に出土した。本来は鎌倉時代後期から室町時代初期にかけての資料との共伴例が多く、伝世品もしくは混入品と考えられるが、当地の地域的特質を表す製品として報告する。

土坑10出土土器(図13 139) 139は瓦質土器の羽釜である。口縁上端面が外側に向かって傾斜することなどの器形の特徴や、調整手法から室町時代中頃に位置づけられる。

土坑202出土土器(図13 140) 140は焼締陶器の備前焼播鉢である。口縁部の形態や播目の様相から室町時代中頃に位置づけられる。

土坑50出土土器(図版14・23 141) 141は焼締陶器の備前焼大型甕である。口縁上位までの

容量は約300ℓと推定される。肩部外面には、ヘラ書きで窯印と、その左側に変体仮名で「飛」と「年」、その下に仮名と思しき一文字、一字欠失してさらにその下に仮名と思われる一文字、計五文字が刻まれている。これらの文字を出土品や既知の伝世品⁴⁾から検討したところ、「ひねりつち」と類推するのが妥当との結果を得た。年代は、口縁部形態と口縁外面の凹線が三条であること、胴部の張りが少なく腰部が直線的に成形されること、これと形態が類似する伝世品の中に、慶長十二年(1607)や、十八年(1613)のヘラ書き紀年銘を持つ例⁵⁾が確認されていることから、慶長期後半の17世紀初頭に位置づけられる。

土取穴1出土土器(図13 142) 142はヨーロッパ製軟質磁器の皿である。銅板転写技法によりウィローパターンを表現する。ロゴマークなどが残存せず産地や詳細な年代は不明だが、口縁部が稜花状に仕上げられているため、イギリスのスポード工場で製造された可能性がある。京都市内で皿の出土報告例がこれまでに少なくとも7例確認される⁶⁾。また、同文様を表わした小型ティーカップの出土例が1例ある⁷⁾。

(3) 瓦 類 (図14、図版23、付表2)

軒丸瓦(図14、図版23 瓦1~6) 軒丸瓦は6種6点が出土した。

瓦1は重圏文軒丸瓦で、難波宮所用瓦からの再利用品である。摩滅が激しい。瓦2は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。平安時代中期の栗栖野瓦窯産と考えられる。瓦3は右巻の巴文軒丸瓦である。括りのない巴の頭と尾が一連となることや、珠文の間隔などから平安時代後期の製品と推定され

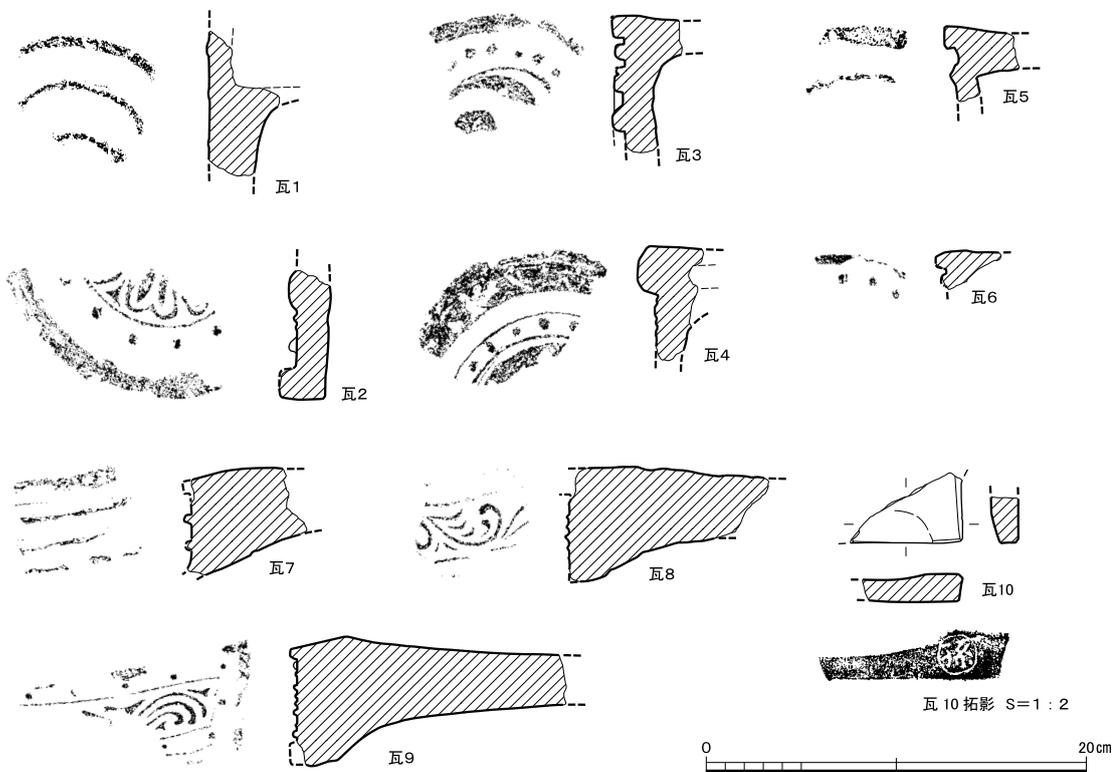


図14 瓦拓影及び実測図(1:4)

る。柵4を構成する柱穴180より出土した。瓦4は右巻の巴文軒丸瓦で、外面に灰釉がかかる。焼成や製作技法から平安時代後期の尾張産の製品と考えられる⁸⁾。瓦5は周縁と圏線が残るのみで詳細は不明である。調査区南東部で検出した柱穴44から出土した。瓦6は周縁の一部と珠文4個を残す小片である。

軒平瓦（図14、図版23 瓦7～9） 軒平瓦は3種3点が出土した。

瓦7は重郭文軒平瓦で、難波宮所用瓦からの再利用品である。瓦8は均整唐草文軒平瓦である。曲線顎で、凸面叩き技法が観察される。文様の特徴などから平城宮6732C型式に分類されたものに相当する。瓦9は曲線顎の均整唐草文軒平瓦である。仁和寺境内の発掘調査出土の90bに分類される資料と同文・あるいは同範¹¹⁾である。河上瓦窯産¹²⁾で、平安時代中期初頭に位置づけられる。柱穴151から出土した。

その他の瓦（図14、図版23 瓦10・11） 瓦10は雁振瓦の破片か。端面に陽刻文字による「㊦」の押捺がある。備前焼の大型甕を据えた土坑50から江戸時代後期の陶磁器類などと共に出土した。瓦11は平瓦である。焼成と施釉の状況から尾張産である。土坑130から出土した。

（4）土製品（図15、図版15・24、附表3）

紅皿模倣品（図版15 土1） 土1は紅皿を模倣したミニチュア玩具と考えられる。土師質の素地に緑色の釉を掛ける。

土鈴（図版15 土2） 土2は土鈴で、手づくねにより成形される。鈕から鈴口まで完存し、内部の土製の丸玉ものこる。江戸時代後期の陶磁器類などを含む土取穴4から出土した。

独楽（図版15 土3） 土3は独楽で、全体にキラ粉が付着する。型嵌成形により上面に花蕊と二重の五弁花を表わす。中心部には心棒を挿すため直径3mm、深さ8mmまで未貫通の円孔を設ける。対応する裏面中央には突出部を設け芯とする。井戸160出土。

灯火具模倣品（図版15 土4） 土4は灯火具を模倣したミニチュア玩具である。煤や油煙の付着が観察されないことから模倣品とみなした。本体は型嵌技法により製作され、上辺に横板を貼り付け、その中央に直径約5mmの円孔を開ける。土取穴4出土。

土人形（図版15 土5～7） 土5～7は土人形である。いずれも土取穴4から出土した。土5は合わせ型成形で、表面の窪部には白色と赤色の顔料が残存する。その容姿から沙門を連想させるが確定できない。土6は合わせ型成形で、表面の窪部に白色と赤色の顔料が残存する。容姿から布袋と考えられる。土7は手づくね成形で、一枚の素地を屈曲させ接合し、そこに頭部や腕を貼り付ける。各所に指紋が残る。右側襟部にわずかに白泥が残存する。容姿から唐子を表現したとも解釈される。

泥面子（図版15 土8～39） 土8～39は泥面子である。機械掘削中と遺構検出中に出土した土9・13・29・39を除き、土取穴4から出土した。面径は2.8cmから4.3cmまでと差異がある。図案は文字と抽象化した絵画で干支を表現するもの、家紋、文字、抽象化した絵画に類別される。

干支を文字で表すものに土8・37の「辰」、土9の「巳」、土39の「酉」、土10の「戌」、土11の

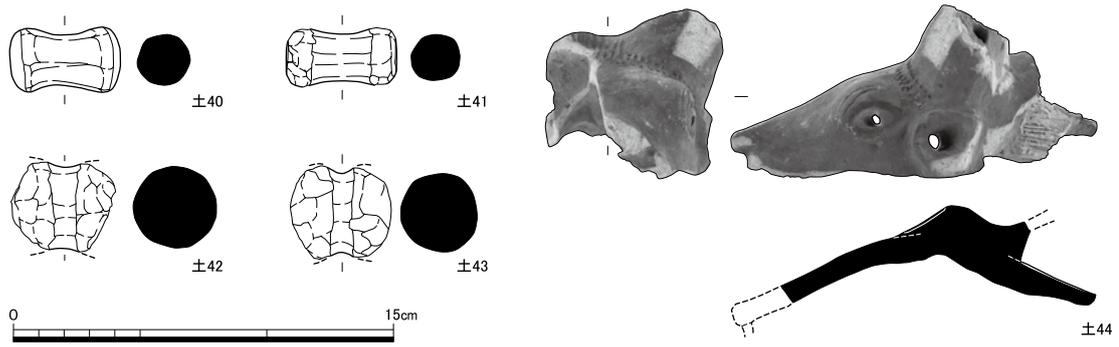


図15 土製品実測図2 (1 : 3)

「亥」があり、絵画でサルを表現する土12・13、ニワトリを表現する土14がある。

家紋には土15の鳶、土16～19の祇園守、土20・21の轡または丸に十字、土22の檜扇、土23の五三の桐、土24の上下対い鶴、土38の丸に輪違い崩しがある。家紋ではないが、土25には亀甲の一種が表現される。文字には漢字、片仮名と平仮名がある。漢字には土26の「川」、土27の「桐」があり、土35も「藏」の可能性がある。片仮名には土28の「ユ」、平仮名には土29の「り」がある。絵画には将棋の駒を表わす土30・31がある。また動物を表現したものに土32・33のウサギの餅つき、土34の三羽の千鳥があり、他に図柄不明の土36がある。

組紐用錘(図15、図版24 土40～43) 土40～43は組紐用錘¹³⁾である。調査区南壁際の江戸時代後期から明治時代の陶磁器類を含む攪乱から出土したが、当地の来歴を示す資料として報告する。大きさから土40・41の小と土42・43の大的二つに分類される。小の土40と土41は、両端に敲打痕が観察され、土41にはそれが顕著である。重量は土40が26 g、土41が32 gである。大の土42と土43は、双方とも両端に敲打による著しい剥離が観察される。重量は土42が47 g、土43が50 gである。

牛形土製品(図15 土44) 土44は瓦質焼成された牛形土製品である。これ以外にも図化するとはできなかったが土師質焼成された脚部の断片などがある。土44は顔面のおおよそ左半分が遺存し、内部は中空である。頭部と頸部との接合部に櫛歯状のカキヤブリを施す。土取穴4出土。

製塩土器(図版24 土45～50) 土45～50は製塩土器である。すべて平安時代前期の溝状遺構200から出土した。いずれも破片となり接合は難しいが、口縁部を残す破片も認められ、上位がやや広がる筒状に復元される。

埴塙(図版24 土51～55) 土51～55は埴塙の破片である。江戸時代後期以降の陶磁器類を含む土取穴2・4から出土した。器壁は土55を除いて3cm弱のものが多い。最大の土55は縦13.0cm、幅8.5cmで、断面には深さ約2cmの足掛かりとなる窪みが設けられる。外面は溶融し、赤褐色から濃緑色を帯びたガラス状をなす。内面は被熱により赤変し、金属滓が付着する破片もある。素地は多孔質で、石英や長石、花崗岩片を多く含む。

(5) 金属製品 (図版16・25、附表4・5)

銭貨(金1～8) 金1～5は渡来銭である。金1は開元通寶(621年初鑄)である。塀199出土。金2は乾元重寶(758年初鑄)である。背面下位に上向きの弧線が鑄出された背下俯月とされる銭種に分類される。塀199出土。金3は篆書体の元豊通寶(初鑄1078年)、金4は行書体の元祐通寶(初鑄1086年)である。これら2点は表面の文字や裏面の縁と郭が不分明であること、厚さ1mm前後と薄いこと、質量が3gに満たないことなどから模鑄銭の可能性はある。金3は塀199、金4は土坑50から出土した。金5は永樂通寶(初鑄1408年)である。土取穴70出土。

金6～8は日本銭である。金6は鍍化により文字が判読できないため銭種は不明だが、面径21mmという大きさ、表面に白色の腐食生成物が認められることから、鉛を多く含む皇朝銭の可能性はある。調査区南西隅で検出した柱穴96から出土した。金7・8は寛永通寶である。字体と規格から金7が新寛永、金8が古寛永に分類される。金7は、「永」字の三画目の最終が跳ね上がる特徴から享保十三から十五年(1728～1730)にかけて、摂津国難波村鑄銭場で製造された享保期難波銭と判別される。金7は井戸160、金8は土取穴1から出土した。

簪(金9・10) 金9・10は簪である。いずれも二股簪で、金9の頂部には耳搔が付される¹⁴⁾。金9の竿部の表面には毛彫で麻の葉模様が表現され、裏面は磨地とされる。上位中央部には柱状の別材を鉸留とし、上端には肉彫で菊花を形作り、基部は一段細めて針金状の別材を廻し遊環とする。下方には近接して方孔が穿たれ、ここにも別材を組み合わせて加飾していたと想定される。金10の竿部の表裏面には蹴彫と珠点を縦位に組み合わせて配し、簡略化した花唐文様を表現する。頭部は扇を三分割したように形作り、その間に直線的な毛彫りを施し葉脈を表現する。その形と表現法からイチョウの葉を図案化したと考えられる。片方には小孔が穿たれ、ここに別材を組み合わせて嵌め込むことによって装飾性を高めていたと想定される。2点ともに土取穴4から出土した。

筭(金11) 金11は装剣金具の筭である。大きく屈曲した状態で出土した。鍍化が著しく、上下端を欠いた現状で長さ16.3cm、幅は胴部1.2cm弱、雉子股部0.9cm、竿部中ほどで0.6mm弱。厚さは胴部で2mm弱、竿部1.5mm強となる。旧状に復した場合、長さは現状より数mm程度長いと思われる。素材は鍍の状態から銅合金製と考えられる。表面は磨地とされ、胴の表面には毛彫により五弁花が左右交互に三回配される。それぞれの花びらの中心には円と直線を組み合わせることで花蕊を表現し、ウメの花を表現したと類推される。それぞれの花の空隙部には細かな魚々子を撒き装飾性を高めている。全体的な形状や大きさ、なだらかな肩、首から耳搔に至る部分の細さなどの諸様相は、南北朝期から室町時代後期の時代相とされる特徴である。塀198の上層から出土した。

(6) 石製品 (図版16・24・25、附表6)

石鍋転用品(図版16・24 石1・2) 石1・2はともに滑石製石鍋の転用品である。石1は2箇所楔型の切り欠きを入れている。石2は周囲を粗く切削することにより破断面を整えている。外面上位に3箇所と内面に多数の円錐形の穴を穿つ。内面に関してはやや浅い円孔の周囲を取り

巻くよう5箇所¹⁵⁾にそれより深く穿たれた円孔が取り巻き、五弁花を連続して繋ぎ合わせて散らした花模様を表現した意匠と考えられる。京都市内や草戸千軒町遺跡から出土する滑石製石鍋転用品にみられる印判様の製品などが想起され、これに類する可能性もある。石1は土坑153、石2は土坑94から出土した。

線刻石(図版16・24 石3) 石3は台形状の板材をなす緑色片岩である。表裏面に文字や梵字、記号とも判断できない線刻がなされている。機械掘削中に出土した。

墓碑(図版16・25 石4) 石4は墓碑である。調査着手前より計画地内に残されていた。石材は閃緑岩と思われる。頭部を欠くが正面を平滑な長方形に整えた板碑状の形態をなし、長さ37cm以上、幅21.5cm、現状での重量は18.4kgである。裏面は粗い打ち欠き、両側面はそれに敲打を加えて整形される。底面は原礫面を残し、横断面形は蒲鋸形をなす。正面には両脇に幅約3cmの縁を設け、その枠内を幅約16.5cmにわたって一段下げて文字を刻む。文字は風化が激しく解読困難な部分も多いが、釈読できる範囲では、上位中央に阿弥陀如来を表す梵字「キリーク」を陰刻する。その下方右側には二文字目が判読不明ながら男性の戒名である「宗□禪定門」、さらに下方には二行にわたって「慶長三年」「四月三日」と刻まれている。これと対称をなす左側には「妙□禪定尼」と彫り込まれ、その下方には先と同様の配置で「慶長三年」「七月一日」と刻まれている。

(7) 動物遺存体(図版25、附表7)

貝類(貝1~3) 貝1はセタシジミ、貝2はイタヤガイ科である。いずれも左殻で土取穴4から出土した。貝3はアカガイである。右殻で土取穴1から出土した。

魚類(骨1・2) 骨1・2はマダイの前頭骨である。井戸160から出土した。骨1は左、骨2は右の部位に相当するが別個体である。正中より二分割された痕跡をとどめているため、カブト割りによる調理法によって裁断されたと考えられる。

鳥類(骨3・4) 骨3はニワトリの左上腕骨と考えられる。骨4はキジ科の資料でニワトリの可能性もある。いずれも井戸160から出土した。

哺乳類(骨5) 骨5はニホンジカの左側の肩甲骨である。肩甲下窩部分は欠損し、関節窩部分のみが遺存する。土取穴4から出土した。

註

- 1) 土師器の型式・年代観については、平尾政幸氏の編年に拠る。(平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年)

750年	840年	930年	1020年	1110年	1170年	1260年	1350年	1410年	1500年	1590年	1680年	1740年	1800年	1860年
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B

- 2) 西森正晃「I 平安宮大極殿院跡・聚楽遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成25年度』京都市文化市民局 2014年 図14

- 3) 平尾政幸「Ⅹ 平安宮左兵衛府跡」『平安京跡発掘調査概報』京都市埋蔵文化財研究所概報集1978 - II 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1978年 図版36
平尾政幸「Ⅲ 平安宮左兵衛府跡・侍従所跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成21年度』京都市文化市民局 2010年 図28
- 4) 「捻土」「比年りつち」とも記され、現在までに8例ほどが報告されている。これら以外にも同文字を記す伝世品が複数確認される。
- ① 森 毅「「船場」道修町の発掘調査」『大阪市文化財情報 葦火5号』財団法人大阪文化財協会 1986年
捻土と記された例2例が報告される。この周辺では埋甕を伴う屋敷地跡を大坂冬の陣・夏の陣に起因する焼土層が覆うとされる。
 - ② 伊藤 純「大坂夏の陣の証人－備前焼の大甕－」『大阪市文化財情報 葦火23号』財団法人大阪市文化財協会 1989年
伊藤氏により「慶長七年（1602）」「慶長拾二年（1607）」の2例が集成されている。
 - ③ 吉岡康暢「刻銘を有する中世陶器」『国立歴史民俗博物館研究報告 第36集 創設十周年記念論文集』国立歴史民俗博物館 1991年
吉岡氏により4例が集成されている。「20元亀2（1571）」、「21元亀4（1573）」、「29天正10（1582）・30天正10（1582）」（2例）
- 5) 重根弘和「第2節 備前」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会 2022年
- 6) 図柄は1780年頃、シノワズリに影響を受けたイギリスのトマス・ミントンによって創案されたと伝わる。京都市内出土例については下記の報告がある。
- ① 岡 泰正「Ⅴ. 平安京左京六条三坊七町出土のヨーロッパ製転写磁器について」『平安京左京六条三坊七町 京都市下京区小田原町・東鋸屋町 京都文化博物館調査研究報告 第11集』京都文化博物館 1995年
 - ② 能芝 勉・丸川義広「2 平安京左京一条四坊・二条四坊（97HL404・406）」『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』京都市文化市民局 1999年
 - ③ 能芝 勉「(6) その他の出土遺物」『平安京右京三条一坊二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-6 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
 - ④ 能芝 勉「4 桃山・江戸時代の土器・陶磁器類」『平安京左京六条三坊五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-8 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2005年
 - ⑤ 能芝 勉「第9章遺物 第1節土器・陶磁器類 (8) H・M・N区」『平安京左京北辺四坊－第2分冊－（公家町形成以降）本文』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年 図版五三二-37、H区掘下げ中にこれに類するヨーロッパ製銅板転写軟質磁器の出土が報告されている。小片ため詳細は不明。
 - ⑥ 伊藤淳史・富井 眞「第3章 京都市白河街区跡・延勝寺跡・岡崎遺跡の発掘調査 I」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2018年度』京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター京大文化遺産調査活用部門 2020年
 - ⑦ 近現代の層より出土。内面に二羽の鳥が向き合う図柄が確認される小片で、裏面にはごく浅い刻印が押されていた。新しい層位より出土したため報告書には未掲載。報告書は『史跡旧二条離宮（二条

- 城)』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2021-12 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所
2022年
- 7) 岡田麻衣子・小檜山一良『平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2021-11 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2022年 図版19の185 第1面検出の室7から小型ティーカップが出土している。
 - 8) 当該期の尾張産瓦は、京都では法金剛院、鳥羽離宮東殿、神泉苑、仁和寺南院、同じく北院からの出土事例が確認されているが、宮内からは稀有な例となる。『特別展 知多の瓦』半田市立博物館 1993年
 - 9) 上原真人「第一章 瓦と瓦窯の変遷 2前期の瓦」『平安京提要』角川書店 1994年
 - 10) 『平城宮出土軒瓦型式一覧』奈良国立文化財研究所 1978年
 - 11) 木村捷三郎「第3章6 瓦」『仁和寺境内発掘調査報告-御室会館建設に伴う調査-』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第9冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1990年 図版二〇・四八-90b
 - 12) 木村捷三郎「京都洛北『河上瓦屋』址発見の宇瓦について」『古代文化』第27巻10号(通巻201) 財団法人古代学協会 1975年
 - 13) 類例として、南 博史「第6章 第6節その他の主要遺物 7. 組紐用錘具」『平安京土御門烏丸内裏遺跡-左京一條三坊九町-』平安京跡研究調査報告第10輯 財団法人古代学協会 1983年の図版第46上、能芝 勉「第9章遺物 第1節土器・陶磁器類 (5) E区・(8) H・M・N区」『平安京左京北辺四坊-第2分冊-(公家町形成以降)本文』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年 図版四二八の1ならびに図版五三二の12、木下保明「第3章 遺物(4)土製品」『寺町旧域・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告2015-16 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016年 図版72の土126などがある。
 - 14) 大阪市内の発掘調査による検出例では、これらのような二股に分かれた形を作出した簪は、18世紀後半から幕末にかけての遺物と共に出土することが多いとされ(小田木富慈美「耳搔簪と耳挖簪」『大阪市文化財情報 葦火184号』公益財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所 2017年)、特に耳搔を付した製品は、江戸時代後半にたびたび出された奢侈品を禁じる令からの言い逃れとして、華美な髪飾りではなく耳搔を兼ねた実用品としての方便とされたという見解もある。
 - 15) 鈴木康之「Ⅳ 石鍋の再加工品」『草戸千軒町遺跡出土の滑石製石鍋』草戸千軒町遺跡調査研究報告 2 広島県立歴史博物館 1998年 Fig.4-2 102など

5. ま と め

以上、今回の調査成果について報告を行った。最後に各時代の主だった内容を記してまとめたい。

平安京成立以前の状況については、いわゆる聚楽土内に形成された古土壌の放射性炭素年代測定（AMS測定）を行い（付章参照）、その形成が縄文時代早期にあるとの結果を得ることができた。この成果は、以前に行われた京都市中京区聚楽廻松下町付近の調査で、聚楽土下層より始良Tn火山灰などの再堆積が確認された事例¹⁾に続き、いわゆる聚楽土が堆積した年代を推し量る一助になるものである。また、今回の分析結果を受け、今後、聚楽土が露呈した場合には、旧石器時代や縄文時代の遺構・遺物の確認や、古環境を把握するための努力が求められる。

平安時代前期では、溝状遺構200と埋納遺構45が注目される。溝状遺構200は平安宮造営当初の壁土などを採取した痕跡、埋納遺構45は大宿直に関連する建物に伴う遺構として鎮祭の一類型を窺えるものであり、共に平安宮造営初期段階の遺構として興味深い。

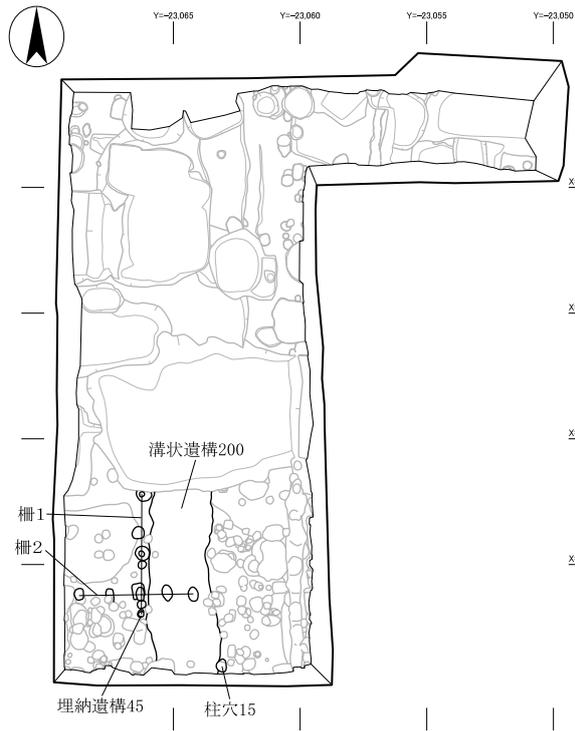
平安時代中期から後期にかけては少数ながら柱穴などの遺構と共に、瓦器椀や輸入陶磁器の白磁椀などの日常雑器的な遺物が出土し、居住空間として利用されたことが窺われる。

続く鎌倉時代から室町時代については、高橋康夫氏の研究²⁾によって、大宿直の跡地とその周辺には錦部司や大舎人綾とされた現在の「西陣織」の始祖とも呼べる織物関係の職人が集住し、酒屋や土蔵などが金融業を営む地であったとされている。今回の調査では、鎌倉時代から室町時代前期の遺構・遺物は確認できなかったが、室町時代中期から後期の遺構・遺物を多数検出し、その一端を窺い知ることができたことは大きな成果である。出土遺物には古瀬戸の水滴や輸入陶磁器などが含まれ、居住者の財力を示すものとして評価できる。また、当該時期の遺構として調査区東端で検出した南北方向の柵3・4、塀198・199は、平安宮の大宿直と内教坊の間に設けられたと推定される宮内道路の西側に沿う位置にあり、区画がこの時期まで踏襲されていた可能性が考えられる。これらの遺構が16世紀の初頭に埋没したのは、江戸時代後期まで遺構・遺物の空白期間となる。これは史料に記された応仁の乱で各地へ職工集団らが離散したとの記述³⁾を証左するとも言えよう。調査地は安土桃山時代の聚楽第の本丸推定地にもあたるが、その時期の遺構・遺物も確認できなかった。その要因については、後世に大規模な削平が行われた可能性などが考えられるが、今回の調査では明らかにできなかった。

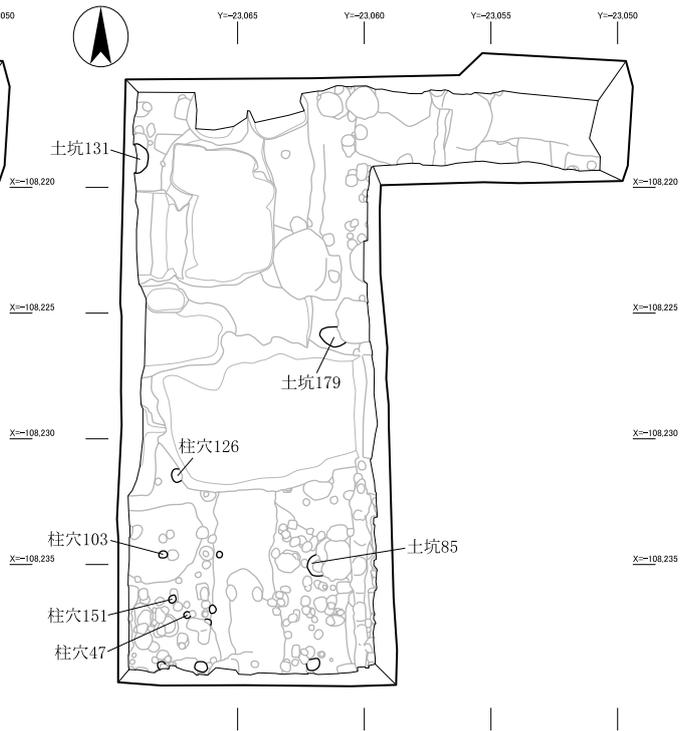
江戸時代後期以降の遺構としては、土取穴や井戸、甕を据えた土坑などを確認した。埴塙なども出土し、居住や生産活動が再び活発になったことが窺える。最後に、土取穴1から出土したヨーロッパ製軟質磁器について述べたい。鎖国下に置かれた当時の状況により、これを所持することが許されたのは相応の経済力や身分を持つ者であろう。これを持ち得た所以は、やはりこの「西陣」の富に由来するとも考えられる。

以上、時代順に今回の調査成果を記した。既往の調査では、比較的広い面積を調査する機会が乏しかったことや、後世の改変により遺構の損壊が激しく実態を把握することが困難であった。この

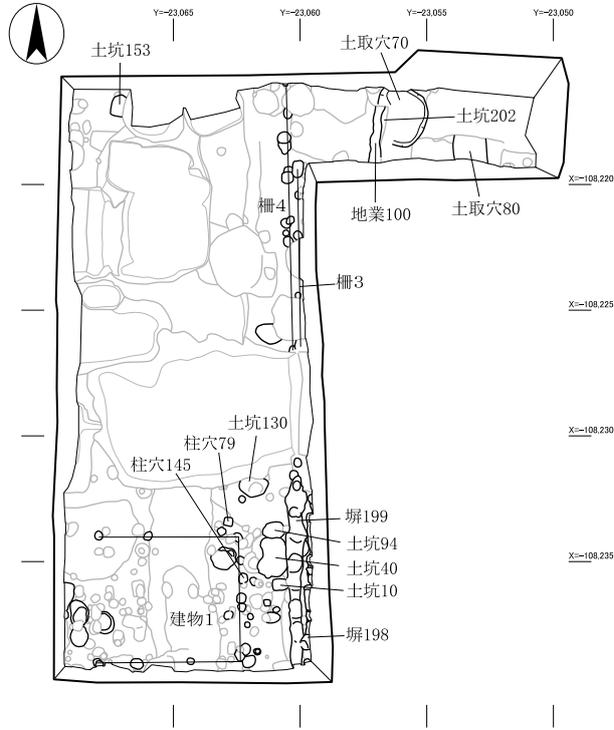
平安時代前期



平安時代中期から後期



室町時代中期から後期



江戸時代後期以降

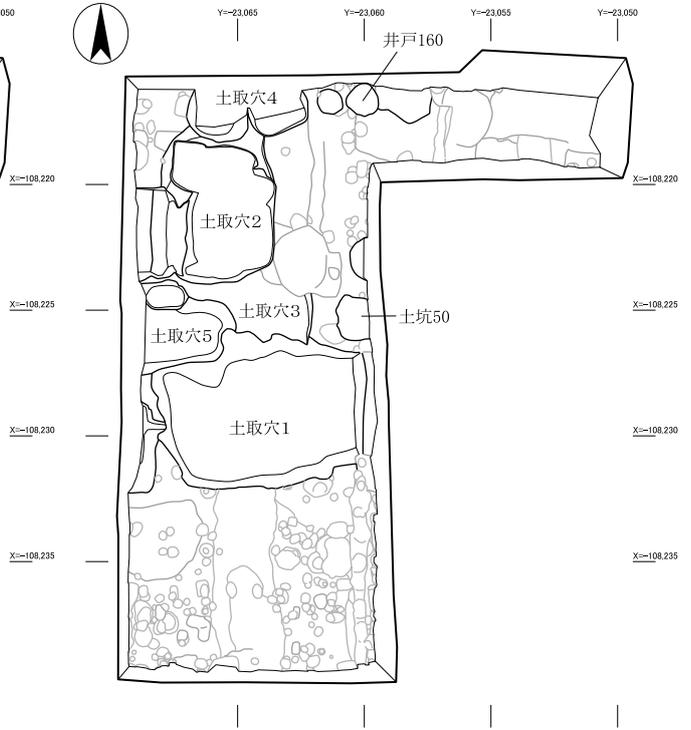


図16 遺構変遷図 (1 : 300)

ような状況のもと、今回の調査で得られた多くの情報は、向後の指針となる事象が多いことを述べて報告を終えたい。

註

- 1) 南 孝雄『平安宮造酒司跡・鳳瑞遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-2 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年
- 2) 高橋康夫「第四章第二節 西陣の成立」『京都中世都市史研究』 思文閣 1983年
- 3) 前掲註2に同じ

付章 放射性炭素年代測定結果（AMS測定）

株式会社 加速器分析研究所

1 化学処理工程

- 1) 試料を超純水の中に入れ、超音波で分散させた後、ふるいにかけて根や礫等の混入物を除去する。ふるいを通過した土を乾燥させ、この後の処理に用いる。
- 2) 酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。処理には1 mol/ℓ（1 M）の塩酸（HCl）を用い、表1に「HCl」と記載する。
- 3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- 4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- 6) グラファイトを内径1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

2 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

3 算出方法

- 1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- 2) ¹⁴C年代（Libby Age：yrBP、表1）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用し、 $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する（Stuiver and Polach 1977）。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- 3) pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい（¹⁴Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正されている（表1）。
- 4) 暦年較正年代（または単に較正年代）とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（ $1\sigma = 68.3\%$ ）あるいは2標準偏差（ $2\sigma = 95.4\%$ ）で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年

代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である（表2の「暦年較正用 (yrBP)」）。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20較正曲線（Reimer et al. 2020）を用い、OxCalv4.4較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正の結果を表2（ $1\sigma \cdot 2\sigma$ 暦年代範囲）に示す。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。今後、較正曲線やプログラムが更新された場合、「暦年較正用 (yrBP)」の年代値を用いて較正し直すことが可能である。

4 測定結果

表1 放射性炭素年代測定結果（ $\delta^{13}\text{C}$ 、 ^{14}C 年代（Libby Age）、pMC）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-240409	h20240723	京都府京都市上京区日暮通中立売下る須浜池町244番地他5筆 平安宮跡・聚楽第跡 地層確認断面 聚楽土下部土壌層	土壌	HCl	-24.10 ± 0.18	8,710 ± 30	33.81 ± 0.14

[IAA登録番号：#C681]

表2 放射性炭素年代測定結果（暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）

測定番号	試料名	暦年較正用(yrBP)	較正条件	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
IAAA-240409	h20240723	8,711 ± 32	OxCal v4.4 IntCal20	9692calBP – 9593calBP (55.4%) 9580calBP – 9556calBP (12.9%)	9884calBP – 9864calBP (1.9%) 9772calBP – 9546calBP (93.5%)

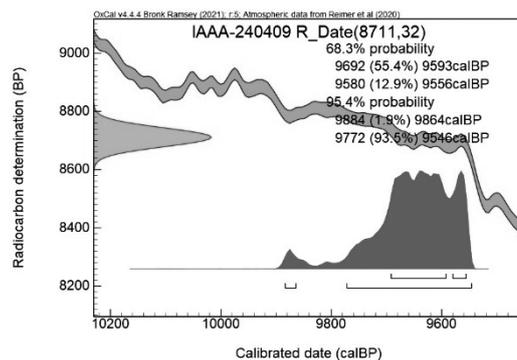


図1 暦年較正年代グラフ

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
- Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), *Radiocarbon* 62(4), 725-757
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

付表1 土器類観察表

※ 法量(括弧内は残存値)

遺物番号	器種	器形	出土遺構・層名	法量(cm)			残存率(%)	色調	胎土	備考
				口径	器高	底径				
1	土師器	椀A	埋納遺構45	12.5	3.5	—	45	7.5YR7/4にぶい橙	0.5mm大の石英、長石、赤色粒、黒雲母	上から6段目
2	土師器	椀A	埋納遺構45	12.8	3.1	—	100	7.5YR7/6橙	1mm以下の長石、赤色粒、黒雲母少量	上から4段目 口縁端部内外面油煙厚く付着
3	土師器	椀A	埋納遺構45	13.3	3.5	—	100	5YR6/6橙	微細な長石、石英、赤色粒、雲母少量	上から3段目
4	土師器	椀A	埋納遺構45	14.1	3.6	—	25	5YR6/6橙	1mm以下の石英、長石、赤色粒	上から1段目 口縁端部内面油煙付着
5	土師器	皿A	埋納遺構45	17.9	2.5	—	100	5YR6/6橙	1mm以下の長石、石英、微細な赤色粒、黒雲母	上から5段目 口縁端部内外面油煙付着
6	須恵器	杯B蓋	埋納遺構45	13.8	2.3	—	100	N7/ 灰白	1mm以下の石英、長石	上から2段目 回転方向=右
7	土師器	椀A	溝状遺構200	9.0	2.9	—	45	7.5YR6/4にぶい橙	0.5mm以下の石英、長石、チャート黒雲母、赤色粒	
8	土師器	椀A	溝状遺構200	11.4	(3.0)	—	20	5YR6/4にぶい橙	微細な長石、石英、白雲母、黒雲母	
9	土師器	椀A	溝状遺構200	11.7	3.6	—	25	5YR7/4にぶい橙	1mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒	
10	土師器	椀A	溝状遺構200	16.2	3.9	—	25	7.5YR7/4にぶい橙	1mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒	
11	土師器	椀A	溝状遺構200	16.2	3.5	—	40	5YR7/4にぶい橙	2mm以下の長石、石英、チャート、雲母、赤色粒	
12	土師器	椀A	溝状遺構200	13.0	3.6	—	50	5YR7/4にぶい橙	1mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒	
13	土師器	椀A	溝状遺構200	13.4	3.5	—	75	2.5Y7/4淡赤橙	0.5mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒	
14	土師器	椀A	溝状遺構200	13.6	(3.5)	—	25	5YR7/4にぶい橙	1mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒	
15	土師器	椀A	溝状遺構200	13.0	3.4	—	50	7.5YR7/4にぶい橙	2mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒	
16	土師器	椀A	溝状遺構200	13.0	3.4	—	25	7.5YR7/4にぶい橙	0.5mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒	
17	土師器	椀A	溝状遺構200	12.4	3.7	—	45	7.5YR7/6橙	1.5mm以下の長石、石英、赤・赤色粒、雲母	内面に線刻
18	土師器	杯A	溝状遺構200	15.1	(3.6)	—	35	5YR7/4にぶい橙	1mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒	
19	土師器	杯A	溝状遺構200	16.0	(3.6)	—	25	7.5YR7/6橙	1mm以下の長石、チャート、赤・黒色粒、雲母	
20	土師器	杯A	溝状遺構200	16.6	4.0	—	25	7.5YR6/6橙	1mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒、雲母	
21	土師器	杯A	溝状遺構200	17.8	(3.8)	—	25	5YR6/6橙	1.5mm以下の長石、石英、チャート、雲母、赤色粒	
22	土師器	杯A	溝状遺構200	17.8	4.4	—	45	10YR8/3浅黄橙	3.5mm以下の長石、赤・黒色粒、雲母	
23	土師器	杯A	溝状遺構200	18.6	4.1	—	25	5YR7/8橙	1.5mm以下の石英、雲母、赤色粒	
24	土師器	杯A	溝状遺構200	18.2	4.2	—	45	7.5YR6/6橙	1.5mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒	
25	土師器	杯A	溝状遺構200	18.8	4.5	—	25	5YR7/4にぶい橙	0.5mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒	
26	土師器	皿A	溝状遺構200	15.2	2.4	—	35	5YR6/6橙	1mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒、雲母	
27	土師器	皿A	溝状遺構200	15.6	2.4	—	35	5YR7/6橙	3mm以下の石英、赤・黒色粒、雲母	
28	土師器	皿A	溝状遺構200	15.6	2.6	—	90	5YR7/6橙	0.5mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒	
29	土師器	皿A	溝状遺構200	15.4	2.9	—	40	7.5YR7/6橙	1mm以下の石英、黒・赤色粒、雲母	
30	土師器	皿A	溝状遺構200	16.1	2.6	—	35	10YR8/3浅黄橙	0.5mm以下の石英、黒色粒、雲母	
31	土師器	皿A	溝状遺構200	16.5	3.0	—	25	7.5YR7/4にぶい橙	1mm以下の石英、雲母、赤色粒	

※ 法量(括弧内は残存値)

遺物 番号	器種	器形	出土遺構 ・層名	法量(cm)			残存率 (%)	色調	胎土	備考
				口径	器高	底径				
32	土師器	皿A	溝状遺構200	16.9	2.4	—	25	10YR7/3にぶい黄橙	0.5mm以下の石英、雲母、赤色粒	
33	土師器	皿A	溝状遺構200	19.6	3.2	—	60	5YR7/6橙	1mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒	
34	土師器	皿A	溝状遺構200	19.5	2.3	—	40	7.5YR7/4にぶい橙	1.5mm以下の長石、石英、チャート、雲母、赤色粒	
35	土師器	皿A	溝状遺構200	19.4	2.5	—	80	7.5YR8/4浅黄橙	1mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒	外面に墨書「二番」
36	土師器	皿A	溝状遺構200	19.8	2.5	—	12.5	10YR7/4にぶい黄橙	2.5mm以下の長石、黒・赤色粒、雲母	
37	土師器	皿A	溝状遺構200	20.8	(2.5)	—	16.7	5YR7/4にぶい橙	1mm以下の長石、石英、チャート、雲母、赤色粒	
38	土師器	杯B蓋	溝状遺構200	19.6	2.4	—	25	7.5YR8/4浅黄橙	2mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒	
39	土師器	杯B蓋	溝状遺構200	23.0	(3.3)	—	20	5YR6/6橙	1mm以下の長石、石英、赤・黒色粒、雲母	
40	土師器	杯B	溝状遺構200	12.8	4.5	—	12.5	5YR6/6橙	1mm以下の長石、石英、黒・赤色粒	
41	土師器	杯B	溝状遺構200	18.1	4.9	10.8	80	5YR5/8明赤褐	1mm以下の石英、長石少量	内面に線刻「井」
42	土師器	杯B	溝状遺構200	20.6	6.4	13.8	20	2.5YR6/4にぶい橙	1mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒	
43	土師器	杯B	溝状遺構200	24.8	9.0	13.0	90	7.5YR7/4にぶい橙	2mm以下の長石、石英、チャート、雲母、赤色粒	
44	土師器	杯B	溝状遺構200	26.4	8.9	11.6	44	5YR6/6橙	4mm以下の長石、石英、チャート、赤・黒色粒、雲母	
45	土師器	小椀	溝状遺構200	5.6	1.8	—	100	7.5YR6/4にぶい橙	1mm以下の長石、石英、赤色粒、雲母	
46	土師器	壺E	溝状遺構200	7.1	6.5	5.6	95	7.5YR7/6橙	1mm以下のチャート、石英、長石、黒雲母	
47	土師器	壺E	溝状遺構200	9.0	(5.2)	—	33	5YR7/6橙	3mm以下の長石、石英、黒・赤色粒、黒雲母	
48	土師器	壺E	溝状遺構200	10.4	(4.2)	—	25	5YR6/6橙	1.5mm以下の長石、石英、黒・赤色粒、黒雲母	
49	土師器	甕	溝状遺構200	15.4	(11.6)	—	50	10YR7/8にぶい黄橙	1mm以下の長石、石英、チャート	
50	土師器	甕	溝状遺構200	14.8	(12.0)	—	35	5YR7/4にぶい橙	2mm以下の長石、石英、チャート、黒色粒	
51	土師器	甕	溝状遺構200	18.3	(18.3)	—	25	7.5YR7/4にぶい橙	1mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒	
52	土師器	甕	溝状遺構200	20.8	(11.1)	—	10	2.5Y8/2灰白	2mm以下の長石、石英、チャート	
53	土師器	高杯	溝状遺構200	—	(12.5)	16.0	65	7.5YR7/4にぶい橙	1mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒	
54	黒色土器	杯	溝状遺構200	17.0	(4.8)	—	15	上半:N1.5/黒、下半:7.5YR6/4にぶい橙	1mm以下の長石、石英、微細な黒雲母多量	A類
55	須恵器	杯蓋	溝状遺構200	12.6	2.3	—	45	5PB5/1青灰	0.5mm前後の長石、石英多量	回転方向=右
56	須恵器	杯蓋	溝状遺構200	13.5	(1.2)	—	15	N6/ 灰	0.5mm前後の長石、石英含む	回転方向=右
57	須恵器	杯蓋	溝状遺構200	14.3	(1.8)	—	50	2.5GY7/1明オリーブ灰	精良 ほとんど砂粒含まず	回転方向=右
58	須恵器	杯蓋	溝状遺構200	18.1	(1.4)	—	20	N7/ 灰白	1mm以下の石英、長石	回転方向=右
59	須恵器	杯蓋	溝状遺構200	18.2	(1.5)	—	20	N6/ 灰	1mm以下の石英、長石少量	回転方向=左
60	須恵器	杯蓋	溝状遺構200	18.2	2.7	—	30	N6/ 灰	0.5mm大の石英、長石少量	回転方向=右 口縁端部内外面灰被り
61	須恵器	杯蓋	溝状遺構200	19.3	(1.1)	—	20	5PB6/1青灰	0.5mm以下の石英、長石少量	回転方向=右
62	須恵器	杯蓋	溝状遺構200	19.6	(1.7)	—	30	5PB5/1青灰	1mm以下の石英、長石少量	回転方向=右

※ 法量(括弧内は残存値)

遺物 番号	器種	器形	出土遺構 ・層名	法量(cm)			残存率 (%)	色調	胎土	備考
				口径	器高	底径				
63	須恵器	杯蓋	溝状遺構200	21.0	2.8	—	60	N6/ 灰	1mm以下の長石、石英、 2mm大の花崗岩片	回転方向=左 口縁端部 内外面胡麻状の灰被り
64	須恵器	杯A	溝状遺構200	12.5	4.0	—	70	5PB7/1明青灰	0.5mm前後の長石、石英 少量	回転方向=右
65	須恵器	杯A	溝状遺構200	12.9	3.5	—	40	N7/ 灰白	1mm以下の長石、石英、 チャート	回転方向=右
66	須恵器	杯A	溝状遺構200	13.0	3.5	—	30	N6/ 灰	0.5mm以下の石英、長石	回転方向=右
67	須恵器	杯A	溝状遺構200	13.1	3.5	—	25	N6/ 灰	微細な長石、石英、白雲 母	回転方向=左
68	須恵器	杯A	溝状遺構200	13.0	3.8	—	100	6Y6/1灰	微細な長石、石英	回転方向=右
69	須恵器	杯B	溝状遺構200	12.8	4.9	8.2	25	5PB5/1青灰	0.5mm大の石英、長石	回転方向=右
70	須恵器	杯B	溝状遺構200	12.7	4.5	8.0	40	5Y6/1灰	0.5mm以下の長石、石英 少量	回転方向=右
71	須恵器	杯B	溝状遺構200	13.5	4.0	8.4	30	N6/ 灰	0.5mm前後の長石、石英 少量	回転方向=右
72	須恵器	杯B	溝状遺構200	18.9	6.7	13.3	40	N5/ 灰	0.5mm前後の石英、長石 少量	回転方向=右
73	須恵器	皿	溝状遺構200	16.2	2.1	—	15	5GY6/1オリーブ灰	0.5mm前後の長石、石英	回転方向=右
74	須恵器	皿	溝状遺構200	18.8	(2.1)	16.4	20	5Y7/1灰白	1mm以下の長石、石英少 量	回転方向=右 重ね焼きの痕跡あり
75	須恵器	皿	溝状遺構200	21.0	2.1	—	15	5Y8/1灰白	微細な白雲母少量	回転方向=右
76	須恵器	瓶子	溝状遺構200	3.8	(3.4)	—	50	5GY6/1オリーブ灰	0.5mm大のチャート若干	回転方向=右
77	須恵器	壺G	溝状遺構200	7.7	18.3	4.2	100	5BG5/3青灰	2mm以下の石英、長石、 その他の砂粒多量	回転方向=右
78	須恵器	壺	溝状遺構200	6.3	(4.9)	—	90	5Y8/1灰白	0.5mm大の石英、長石	回転方向=右
79	須恵器	壺	溝状遺構200	6.5	(3.9)	—	20	5Y8/1灰白	0.5mm以下の長石、石英	回転方向=右 降灰釉
80	須恵器	平瓶	溝状遺構200	10.6	(7.6)	—	25	2.5Y6/2灰黄	0.5mm前後の長石、石英	回転方向=右 降灰釉
81	須恵器	鉢	溝状遺構200	16.4	(9.4)	—	15	7.5Y7/1灰白	0.5mm以下の長石、石英	回転方向=右
82	須恵器	鉢	溝状遺構200	19.7	(12.7)	—	10	5Y8/1灰白	2mm以下の石英・長石・ チャート多量	回転方向=右
83	須恵器	甕	溝状遺構200	28.9	(2.1)	—	10	7.5YR3/2黒褐	1mm以下の長石	猿投窯産 回転方向=右
84	陶質土器	耳壺	溝状遺構200	20.0	(6.5)	—	15	10GY2/1緑黒 断面:2.5YR4/6赤褐	1mm以下の長石、石英、 花崗岩片	輸入陶器か? 回転方向=左
85	緑釉陶器	椀	柱穴27	—	(2.5)	7.0	50	N6/ 灰 釉:10Y6/2オリーブ灰	0.5mm以下の長石	
86	土師器	皿A	柱穴126	9.4	1.4	—	20	10YR7/2にぶい黄 橙	1mm以下の長石、石英、 チャート、赤色粒	
87	土師器	皿N	柱穴103	14.5	(2.7)	—	10	2.5Y8/1灰白	1mm以下のチャート、砂岩	
88	土師器	皿A	柱穴47	10.7	(1.2)	—	10	10YR8/2灰白	1.5mm以下の石英	
89	土師器	皿N	柱穴47	—	(2.7)	—	小片	7.5YR7/4にぶい橙	1mm以下の長石、石英、 チャート、赤色粒	
90	土師器	皿N	土坑131	10.0	1.8	—	35	10YR6/3にぶい黄 橙	2mm以下の長石、石英、 赤・黒色粒	
91	土師器	皿N	土坑131	15.0	3.1	—	40	5YR7/6橙	3.5mm以下の長石、石英、 チャート、赤色粒	
92	土師器	皿N	土坑40	7.5	1.5	—	75	5YR7/4にぶい橙	2mm以下の石英、チャ ート、長石	
93	土師器	皿N	土坑40	8.7	1.5	—	95	5YR6/1褐灰	2mm以下の長石	内・外面被熱 粗雑なつくり

※ 法量(括弧内は残存値)

遺物 番号	器種	器形	出土遺構 ・層名	法量(cm)			残存率 (%)	色調	胎土	備考
				口径	器高	底径				
94	土師器	皿N	土坑40	8.6	1.7	—	38	10YR7/4にぶい橙	2mmまでの石英、長石	
95	土師器	皿N	土坑40	9.0	1.6	—	25	10YR7/4にぶい橙	0.5mm以下の長石、石英	
96	土師器	皿N	土坑40	9.0	1.8	—	30	10YR7/4にぶい橙	0.5mm以下の長石、石英	内・外面被熱 口縁端部スス付着
97	土師器	皿N	土坑40	10.8	2.2	—	20	7.5YR7/4にぶい橙	2mm以下の長石、石英	
98	土師器	皿Sh	土坑40	7.0	1.8	—	85	10YR8/3浅黄橙	0.5mm以下の長石、石英	
99	土師器	皿Sh	土坑40	7.2	1.6	—	35	10YR8/3浅黄橙	0.5mm以下の長石、石英	
100	土師器	皿Sh	土坑40	7.0	1.9	—	35	10YR8/3浅黄橙	1mm以下のチャート	
101	土師器	皿Sh	土坑40	7.2	1.9	—	30	10YR8/3浅黄橙	0.5mm以下の長石、石英	
102	土師器	皿Sh	土坑40	7.0	2.1	—	55	10YR8/3浅黄橙	0.5mm以下の長石、石英	
103	土師器	皿Sh	土坑40	7.0	2.1	—	55	10YR8/2灰白	0.5mm以下の長石、石英	
104	土師器	皿S	土坑40	11.0	(2.3)	—	25	10YR8/2灰白	0.5mm以下の長石、石英	
105	土師器	皿S	土坑40	11.6	2.4	—	25	10YR8/2灰白	0.5mm以下の長石、石英	
106	土師器	皿S	土坑40	12.0	2.4	—	25	10YR8/3浅黄橙	微細な長石、石英	
107	土師器	皿S	土坑40	12.0	2.5	—	25	10YR8/2灰白	0.5mm以下の長石、石英	
108	土師器	皿S	土坑40	12.0	2.1	—	35	10YR8/2灰白	0.5mm以下の長石、石英	
109	土師器	皿S	土坑40	12.2	(2.7)	—	25	10YR8/3浅黄橙	0.5mm以下の長石、石英	
110	土師器	皿S	土坑40	14.0	(2.3)	—	20	10YR8/1灰白	1mm以下の長石	
111	土師器	皿S	土坑40	15.0	2.8	—	20	5YR8/3淡橙	1mm以下の長石	
112	土師器	皿S	土坑40	15.4	2.5	—	15	7.5YR8/3にぶい褐	2mm以下の長石、チャート	
113	土師器	皿S	土坑40	15.6	2.8	—	15	10YR7/2にぶい黄橙	2mm以下の長石	
114	瓦質土器	鍋	土坑40	28.0	(3.8)	—	20	10YR7/1灰白	0.5mm以下の長石、石英	
115	瓦質土器	鍋	土坑40	26.0	(5.0)	—	20	10YR6/2灰黄褐	2mm以下の長石	
116	瓦質土器	羽釜	土坑40	30.0	(7.8)	—	20	N4/ 灰	2mm以下の長石、石英	
117	瓦質土器	鉢	土坑40	47.0	(6.5)	—	15	N3/ 暗灰	0.5mm以下の石英、石英	
118	瓦質土器	鉢	土坑40	32.0	(7.2)	—	10	N6/ 灰	0.5mm以下の石英、長石 少量	
119	瓦質土器	鉢	土坑40	21.2	(7.5)	—	15	N5/ 灰	0.5mm以下の長石、石英	外面摩滅剥離
120	焼締陶器	擂鉢	土坑40	—	(6.0)	—	小片	7.5YR4/1褐灰	2mm以下の石英	備前焼 播目7条一単位
121	焼締陶器	擂鉢	土坑40	28.6	12.3	14.0	30	5PB6/1青灰	6mm以下の石英	備前焼 外面煤付着 播目6条一単位
122	焼締陶器	擂鉢	土坑40	33.2	(10.9)	—	15	10R5/4赤褐	5mm以下の石英	信楽焼
123	施釉陶器	直縁大皿	土坑40	28.7	(6.1)	—	20	5Y6/3オリーブ黄	0.5~1.0mm前後の長石、 石英	古瀬戸 素地=2.5Y7/2灰黄
124	土師器	皿Sh	塀198	6.8	1.8	—	25	10YR8/2灰白	1mm以下の長石、石英	

※ 法量(括弧内は残存値)

遺物 番号	器種	器形	出土遺構 ・層名	法量(cm)			残存率 (%)	色調	胎土	備考
				口径	器高	底径				
125	土師器	皿Sb	塀198	8.8	1.7	—	25	7.5YR8/3浅黄橙	1mm以下の長石、石英	
126	土師器	皿Sb	塀198	10.4	(1.9)	—	15	7.5Y8/1灰白	1mm以下の長石、石英	
127	土師器	皿S	塀198	13.2	(2.4)	—	15	10YR7/3にぶい橙	1mm以下の長石、石英	
128	土師器	皿S	塀198	14.4	(2.3)	—	20	7.5YR7/4にぶい橙		
129	施釉陶器	合子	塀198	—	(3.6)	4.8	15	7.5Y7/2灰白 素地:5Y7/1灰白	0.5mm以下の長石、石英	古瀬戸
130	施釉陶器	水滴	塀198	2.0	2.5	3.0	100	5Y6/3オリーブ黄 素地:7.5Y7/1灰白	0.5mm大の長石、石英	古瀬戸、最大胴径4.5cm
131	輸入青磁	盤	塀198	27.1	(4.0)	—	10	2.5Y6/1オリーブ灰 磁胎:7.5Y8/1灰白	微細な黒色粒少量	龍泉窯系
132	土師器	皿S	塀199	12.0	1.8	—	15	10YR8/2灰白	2mm以下の長石、チャート	
133	土師器	皿S	塀199	14.4	(2.4)	—	15	7.5YR8/3浅黄橙	微細な長石、石英	
134	瓦質土器	風炉脚部	土取穴80	—	(6.6)	—	80	2.5Y8/1灰白	ほとんど砂粒含まず	
135	輸入青磁	盤	土取穴80	—	(5.5)	10.4	50	10GY6/1緑灰 磁胎:7.5Y7/1灰白	微細な黒色粒極少量	龍泉窯系
136	施釉陶器	折縁深皿	柱穴79	—	(3.9)	—	小片	5Y7/4浅黄 素地: 10YR7/2にぶい黄橙	0.5mm前後の長石、石英	古瀬戸
137	輸入青磁	壺	柱穴145	7.4	(4.1)	—	20	7.5Y5/2灰オリーブ 磁胎:5Y8/1灰白	微細な砂粒少量	龍泉窯系
138	輸入 青白磁	水注	土取穴70	—	5.3	5.4	15	5G7/1明緑灰 (よりも青い) 磁胎:2.5Y8/1灰白 (よりも白い)	精良 ほとんど砂粒含まず	最大胴径10.3cm
139	瓦質土器	羽釜	土坑10	28.8	21.4	—	80	5Y5/1灰	3mm以下の石英、チャート	鏝部径34.6cm
140	焼締陶器	播鉢	土坑202	—	(10.3)	14.0	40	10Y2/1黒	5mm以下の長石、石英	備前焼 播目7条一単位
141	焼締陶器	甕	土坑50	62.8	101.6	42.0	60	5YR6/4にぶい橙	1cm以下の長石、石英、 チャート、礫	備前焼 慶長頃
142	輸入 軟質磁器	皿	土取穴1	—	(1.3)	—	小片	青白色 (染付部コバルト色)	精良 砂粒含まず	ヨーロッパ製軟質磁器 ウィローパターン

付表2 瓦類観察表

※ 法量(括弧内は残存値)

遺物 番号	種類	文様	出土遺構 ・層名	法量(cm)			色調	胎土	備考
				縦	横	厚さ			
瓦1	軒丸瓦	重圏文	堀198	(3.7)	(7.7)	4.7	N3/ 暗灰	3mm以下の長石、石英、 チャート	難波宮所用瓦
瓦2	軒丸瓦	複弁八葉 蓮華文	表土	(2.7)	(13.5)	2.6	2.5Y8/1灰白	3mm以下の長石、石英、 チャート	栗栖野瓦窯産
瓦3	軒丸瓦	巴文	柱穴180	(3.7)	(7.3)	4.5	N4/ 灰	4mm以下の長石、チャート	尾張産か
瓦4	軒丸瓦	巴文	近現代盛土	(3.5)	(12.3)	4.5	N4/ 灰	2.5mm以下の長石、石英、 チャート	灰釉瓦
瓦5	軒丸瓦	不明	柱穴44	(4.0)	(4.0)	4.1	10YR5/1褐灰	2mm以下の長石、石英、 チャート、赤色粒	
瓦6	軒丸瓦	不明	堀199	(3.4)	(5.0)	2.1	N5/ 灰	1mm以下の長石、石英	
瓦7	軒平瓦	重郭文	近現代盛土	(6.5)	(10.5)	5.2	N6/ 灰	3mm以下の長石、石英、 チャート	難波宮所用瓦
瓦8	軒平瓦	均整唐草文	表土	(10.7)	(10.2)	6.1	N4/ 灰	2.5mm以下の長石、石英、 チャート	瓦当部厚3.8cm 平城宮6732C型式
瓦9	軒平瓦	均整唐草文	柱穴151	(14.5)	(15.0)	4.9	N5/ 灰	5mm以下の長石、石英、 チャート	大宮河上瓦窯跡・河上瓦窯跡産
瓦10	刻印瓦	—	土坑50	(3.7)	(6.0)	1.3	N3/ 暗灰	0.5mm以下の長石、石英、 チャート	㊦の刻印、雁振瓦か
瓦11	平瓦	—	土坑130	(5.3)	(6.2)	2.7	2.5Y7/2灰黄	精良 ほとんど砂粒含まず	灰釉瓦、尾張産

付表3 土製品観察表

※ 法量(括弧内は残存値)

遺物 番号	種 類	出土遺構 ・層名	法量(cm)			残存率 (%)	色 調	胎 土	備 考
			縦	横	厚さ				
土1	紅皿模倣品	機械掘削中	0.8	2.5	1.1	100	7.5YR8/2灰白(素地)	密	合わせ型成形
土2	土鈴	土取穴4	2.8	2.5	1.1	100	7.5YR7/6橙	密	手づくね成形
土3	独楽	井戸160	3.2	3.3	1.3	100	10YR7/2にぶい黄橙	0.5mm以下の長石、石英、赤色粒	型嵌成形 外面キラ粉付着
土4	灯火具模倣品	土取穴4	1.7	3.9	1.8	100	7.5YR8/4浅黄橙	密	型嵌技法
土5	土人形	土取穴4	4.6	2.3	2.0	—	10YR8/2灰白	密	沙門か、合わせ型成形 白・赤色顔料残存
土6	土人形	土取穴4	4.3	2.5	1.7	100	10YR8/3浅黄橙	密	布袋 合わせ型成形 白・赤色顔料残存
土7	土人形	土取穴4	(10.4)	(3.7)	2.8	70	10YR8/3浅黄橙	0.5mm以下の長石、赤色粒	唐子か、手づくね成形 わずかに白色顔料残存
土8	泥面子	土取穴4	3.2	3.1	0.9	90	7.5YR7/4にぶい橙	密	「辰」
土9	泥面子	機械掘削中	3.1	3.1	1.0	100	7.5YR7/4にぶい橙	密	「巳」
土10	泥面子	土取穴4	3.2	3.0	0.9	100	7.5YR7/4にぶい橙	密	「戊」
土11	泥面子	土取穴4	2.9	3.0	0.9	90	7.5YR7/6橙	密	「亥」
土12	泥面子	土取穴4	2.9	3.0	0.9	100	7.5YR6/6橙	密	サル
土13	泥面子	機械掘削中	3.0	3.1	0.8	100	7.5YR7/3にぶい橙	密	サル
土14	泥面子	土取穴4	3.3	3.2	0.9	100	7.5YR8/4浅黄橙	密	ニワトリ
土15	泥面子	土取穴4	2.8	2.9	0.7	100	7.5YR8/3浅黄橙	微砂	鳶
土16	泥面子	土取穴4	3.0	(3.0)	1.0	100	7.5YR7/2明褐灰色	密	祇園守
土17	泥面子	土取穴4	3.0	3.1	0.8	100	7.5YR7/4にぶい橙	密	祇園守
土18	泥面子	土取穴4	3.1	3.1	1.0	100	7.5YR8/4浅黄橙	密	祇園守
土19	泥面子	土取穴4	3.1	3.1	0.7	100	7.5YR7/8黄橙	密	祇園守
土20	泥面子	土取穴4	3.0	2.9	0.6	100	10YR7/3にぶい黄橙	密	轡または丸に十字
土21	泥面子	土取穴4	3.1	3.0	0.8	100	7.5YR8/3浅黄橙	微砂	轡または丸に十字
土22	泥面子	土取穴4	(3.1)	(2.9)	(1.2)	90	7.5YR8/3浅黄橙	微砂	檜扇
土23	泥面子	土取穴4	3.1	3.1	1.1	80	7.5YR8/4浅黄橙	密	五三の桐
土24	泥面子	土取穴4	3.1	3.1	0.9	100	7.5YR6/6橙	微砂	上下対い鶴
土25	泥面子	土取穴4	3.0	2.9	0.9	100	7.5YR8/3浅黄橙	密	亀甲
土26	泥面子	土取穴4	(3.0)	(3.0)	0.8	90	7.5YR7/4にぶい橙	密	「川」
土27	泥面子	土取穴4	3.1	3.1	0.9	100	7.5YR7/6橙	密	「桐」
土28	泥面子	土取穴4	3.0	2.9	0.8	100	7.5YR6/6橙	密	「ユ」
土29	泥面子	遺構検出中	3.2	3.1	0.9	90	7.5YR7/3にぶい橙	密	「り」

※ 法量(括弧内は残存値)

遺物 番号	種 類	出土遺構 ・層名	法量(cm)			残存率 (%)	色 調	胎 土	備 考
			縦	横	厚さ				
土30	泥面子	土取穴4	(2.9)	3.2	0.9	90	7.5YR7/4にぶい橙	密	駒形の枠内に「飛」
土31	泥面子	土取穴4	3.1	3.1	0.8	100	7.5YR8/6浅黄橙	密	駒形の枠内に「車」
土32	泥面子	土取穴4	(2.9)	3.1	0.8	100	7.5YR8/4浅黄橙	密	ウサギの餅つき
土33	泥面子	土取穴4	3.3	3.2	0.9	100	7.5YR7/6橙	密	ウサギの餅つき
土34	泥面子	土取穴4	3.0	3.0	0.8	100	7.5YR8/4浅黄橙	微砂	千鳥
土35	泥面子	土取穴4	3.4	(2.3)	0.9	60	7.5YR7/6橙	密	「蔵」
土36	泥面子	土取穴4	3.5	(2.8)	0.8	80	7.5YR7/6橙	微砂	不明
土37	泥面子	土取穴4	3.5	3.5	0.9	90	7.5YR7/3にぶい橙	密	「辰」
土38	泥面子	土取穴4	3.7	(3.5)	1.0	90	7.5YR7/4にぶい橙	密	丸に輪違い崩し
土39	泥面子	機械掘削中	4.3	4.3	1.1	90	7.5YR7/4にぶい橙	密	「酉」
土40	組紐用錘	近代攪乱	2.6	4.4	2.7	100	5YR6/4にぶい橙	0.5mm以下の長石、石英	
土41	組紐用錘	近代攪乱	(2.3)	4.3	2.4	90	7.5YR7/4にぶい橙	2mm以下の長石、石英、 チャート、赤色粒	両端軽微な叩打痕
土42	組紐用錘	近代攪乱	(3.7)	(4.1)	3.5	80	5YR6/4にぶい橙	1.5mm以下の長石、石英、 チャート	両端顕著な叩打痕
土43	組紐用錘	近代攪乱	(3.7)	(4.0)	2.4	80	7.5YR6/4にぶい橙	1mm以下の長石、石英、 チャート、赤色粒	両端顕著な叩打痕
土44	牛形土製品	土取穴4	(7.0)	(14.5)	0.9	10	N3/ 暗灰	0.5mm以下の長石、石英、 黒色粒	瓦質焼成
土45	製塩土器	溝状遺構200	(4.9)	(3.7)	0.6	—	7.5YR7/6橙	1mm以下の長石、石英、 チャート	口縁部遺存
土46	製塩土器	溝状遺構200	(5.3)	(5.2)	0.7	—	10YR6/3にぶい黄橙	2mm以下の長石、石英、 チャート多量	
土47	製塩土器	溝状遺構200	(4.7)	(4.3)	0.7	—	7.5YR5/4にぶい褐	2mm以下の長石、石英、 チャート多量	
土48	製塩土器	溝状遺構200	(6.1)	(6.4)	0.7	—	10YR7/2にぶい黄橙	1mm以下の砂岩、泥岩多 量	
土49	製塩土器	溝状遺構200	(6.3)	(5.4)	0.8	—	10YR8/3浅黄橙	1mm以下の砂岩、泥岩多 量	
土50	製塩土器	溝状遺構200	(12.8)	(11.3)	0.7	—	10YR8/3浅黄橙	5mm以下のチャート、黒色 粒	口縁端部遺存
土51	埴埴	土取穴2	(4.8)	(4.2)	2.9	—	5YR4/4にぶい赤褐	8mm以下のチャート、石 英、花崗岩	多孔質 内外面にガラス質 の溶融物附着
土52	埴埴	土取穴2	(2.4)	(4.7)	(2.6)	—	7.5YR4/3褐	8mm以下の長石、石英	多孔質 内外面にガラス質 の溶融物附着
土53	埴埴	土取穴2	(5.2)	(6.1)	2.8	—	7.5YR3/3暗褐	5mm以下の石英、長石	多孔質 内外面にガラス質 の溶融物附着
土54	埴埴	土取穴2	(9.4)	(8.2)	2.8	—	5YR4/3にぶい赤褐	10mm以下の長石、石英、 花崗岩	多孔質 内外面にガラス質 の溶融物附着
土55	埴埴	土取穴4	(13.0)	(8.5)	3.2	—	5Y3/2オリーブ黒	8mm以下の長石、石英	多孔質 内外面にガラス質 の溶融物附着

付表4 錢貨観察表

遺物番号	錢種	出土遺構・層名	法量(cm)			重量(g)	材質	国	初鑄年	備考
			外径	方孔径	厚さ					
金1	開元通寶	堀199	2.4	0.6	0.1	0.94	銅合金	唐	621	
金2	乾元重寶	堀199	2.4	0.6	0.1	1.69	銅合金	唐	758	背文=背下俯月
金3	元豐通寶	堀199	2.4	0.6	0.1	2.40	銅合金	北宋	1078	篆書体
金4	元祐通寶	土坑50	2.4	0.5	0.1	2.90	銅合金	北宋	1086	行書体
金5	永樂通寶	土取穴70	2.5	0.5	0.15	3.39	銅合金	明	1408	
金6	皇朝錢カ	柱穴96	2.1	0.5	0.1	2.30	銅合金	日本		
金7	寛永通寶	井戸160	2.4	0.6	0.1	3.68	銅合金	日本	1728	新寛永 享保期難波銭
金8	寛永通寶	土取穴1	2.4	0.6	0.1	3.40	銅合金	日本	1636	古寛永

付表5 金属製品観察表

※ 法量(括弧内は残存値)

遺物番号	種類	出土遺構・層名	法量(cm)			重量(g)	材質	備考
			長さ	幅	厚さ			
金9	簪	土取穴4	12.8	0.4	0.1	—	銅合金	二股簪
金10	簪	土取穴4	13.0	0.4	0.1	—	銅合金	二股簪
金11	筭	堀198上層	(16.3)	胴1.2 雉股0.9	胴0.2 筭1.5	—	銅合金	装剣金具

付表6 石製品観察表

※ 法量(括弧内は残存値)

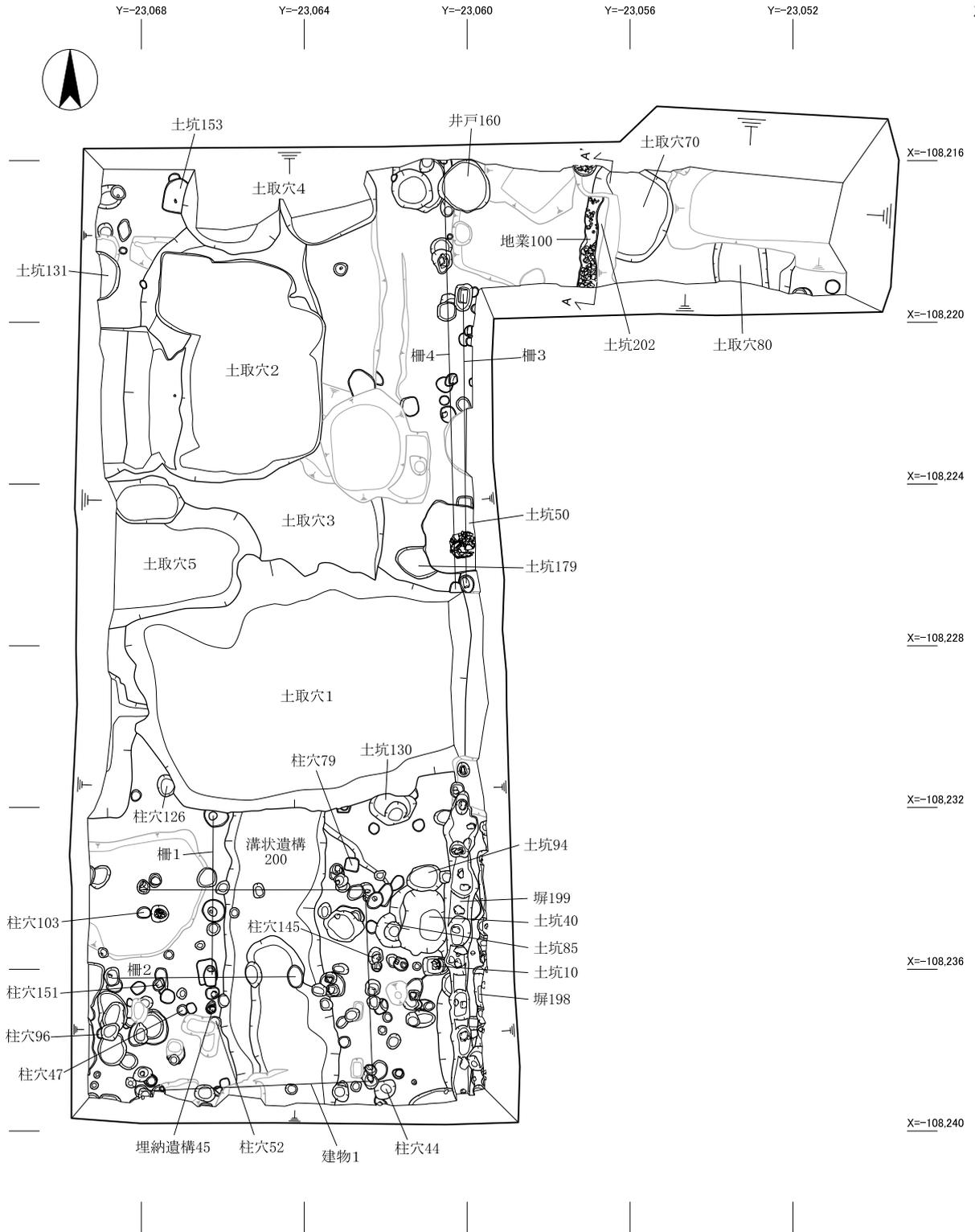
遺物番号	種類	出土遺構・層名	法量(cm)			残存率(%)	重量(kg)	色調	素材	備考
			縦	横	厚さ					
石1	石鍋転用品	土坑153	4.7	6.0	1.2	—	—	2.5GY7/1灰白	滑石	
石2	石鍋転用品	土坑94	4.8	7.4	1.2	—	—	2.5GY7/1灰白	滑石	五弁花状の円孔複数あり
石3	線刻石	機械掘削中	10.0	10.8	2.3	—	—	7.5GY7/1明緑灰	緑色片岩	詳細不明の陰刻あり
石4	墓碑	表採	(36.2)	21.5	12.5	80	18.5	10GY3/1暗緑灰	閃緑岩	慶長三年銘

付表7 動物遺存体観察表

※ 法量(括弧内は残存値)

遺物 番号	種類	小分類	出土遺構 ・層名	法量(cm)			備考
				縦	横	最大厚	
貝1	貝類	セタンジミ	土取穴4	(1.3)	(1.5)	0.2	左殻
貝2	貝類	イタヤガイ科	土取穴4	(5.8)	(6.2)	0.2	左殻
貝3	貝類	アカガイ	土取穴1	(6.8)	(7.9)	0.3	右殻
骨1	魚類	マダイ	井戸160	(2.4)	(5.5)	1.3	左前頭骨 カブト割による解体痕
骨2	魚類	マダイ	井戸160	(2.3)	(3.8)	1.3	右前頭骨 カブト割による解体痕
骨3	鳥類	ニワトリ	井戸160	(5.9)	(0.9)	0.8	
骨4	鳥類	キジ科(ニワトリ?)	井戸160	(6.8)	(1.4)	1.2	
骨5	哺乳類	ニホンジカ	土取穴4	(8.2)	(3.3)	2.8	左側肩甲骨

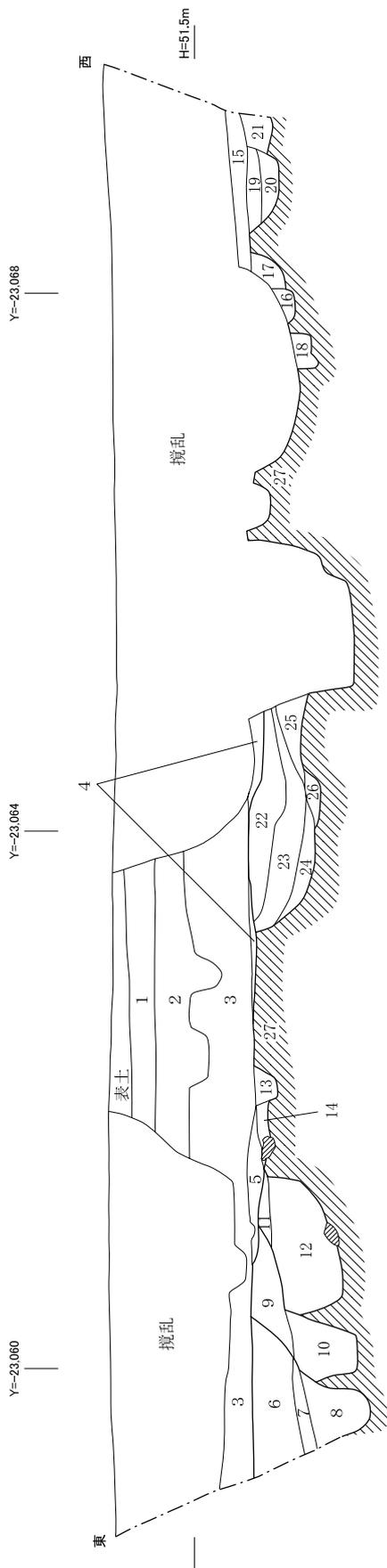
圖 版



0 5m
※A-A' は図版10に対応する。

調査区平面図 (1 : 150)

西部南壁



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色 粗砂～細砂混じりシルト(φ3cm前後の礫・瓦片含む)
- 2 10YR4/2灰黄褐色 極粗砂～細砂混じりシルト(φ3～10cmの砂礫を多量に含む 縮まりが悪い)
- 3 10YR3/1黒褐色 中礫～細礫混じり、極細砂～シルト
- 4 10YR3/2黒褐色 極粗砂混じりシルト(土壌化層)
- 5 10YR2/2黒褐色 極粗砂混じり細砂～シルト(炭化物若干含む)
- 6 2.5Y4/2暗灰黄色 小礫～粗砂混じりの極細砂～シルト
- 7 10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂混じりシルト(炭化物多く含む 団粒状のブロック混じる)
- 8 10YR3/2黒褐色 極粗砂混じり極細砂～シルト(炭化物若干含む)
- 9 10YR3/3暗褐色 極細砂混じりシルト(極粗砂～φ2cm大の礫少量含む 炭化物・凝土若干含む)
- 10 10YR3/2黒褐色 極細砂混じりシルト(φ5cm前後の基盤層ブロックが団粒状に入る)
- 11 10YR4/2灰黄褐色 極粗砂混じりシルト(極粗砂若干含む)
- 12 10YR3/2黒褐色 極細砂混じりシルト(下位にφ15cm前後の礫が数個あり)
- 13 10YR2/2黒褐色 極細砂混じりシルト(縮まりが悪い、炭化物が若干含む)
- 14 10YR3/3暗褐色 極細砂混じりシルト(縮まりが悪い、炭化物が若干含む)

【扉198埋土】

【扉199埋土】

- 15 10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂混じりシルト(基盤層)に
- 16 10YR4/4褐色 極粗砂混じり細砂～シルトをブロック状に含む
- 17 10YR3/3暗褐色 極細砂混じりシルト(φ1cm前後の礫若干含む)
- 18 10YR4/2灰黄褐色 極細砂混じりシルト(φ2～3cm大の礫少量含む)
- 19 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 極細砂混じりシルト
- 20 10YR3/2黒褐色 極細砂混じりシルト(炭化物・土師器片含む)
- 21 10YR4/2灰黄褐色 極細砂混じりシルト(木炭・土師器片含む)
- 22 10YR2/2黒褐色 極細砂混じりシルト(土師器片若干含む)
- 23 10YR2/3黒褐色 極細砂混じりシルト(φ5cm前後の礫含む) 凝土・炭化物を含む φ5cm大の礫含む
- 24 10YR3/3暗褐色 極細砂混じりシルト
- 25 10YR3/2黒褐色 極細砂混じりシルト
- 26 10YR3/3暗褐色 極細砂混じりシルトに10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂混じりシルトをブロック状に若干含む(溝厚の崩落土)
- 27 2.5Y5/4黄褐色 極細砂混じりシルト【基盤層】

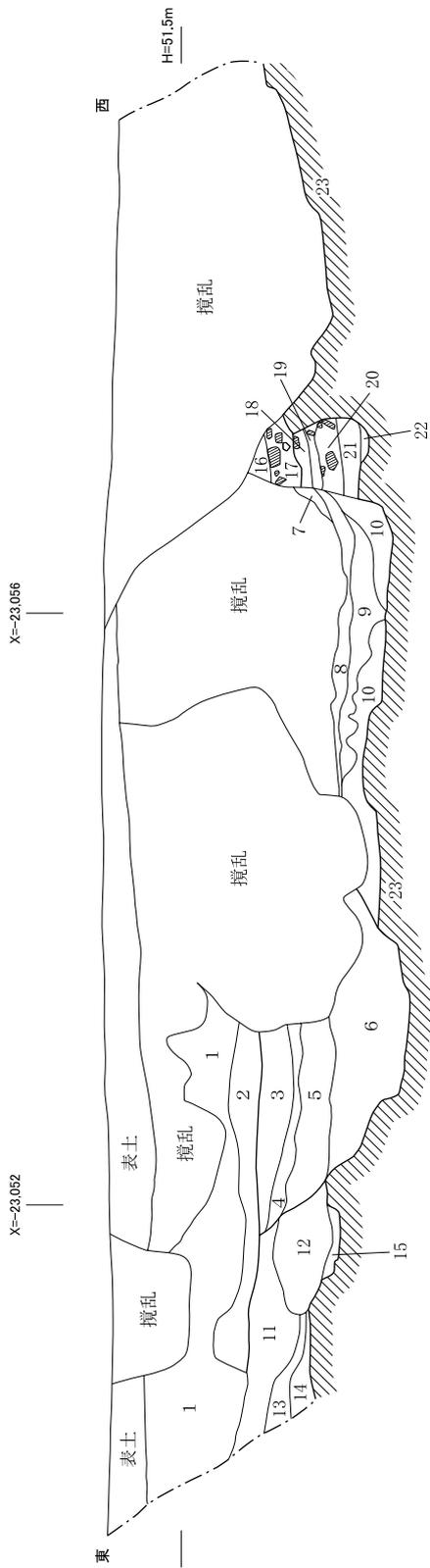
【溝200埋土】



調査区西部南壁断面図 (1:50)

調査区東部南壁断面図 (1 : 50)

東部南壁



- 1 10YR3/1黒褐色 中礫～細礫混じり極細砂～シルト
- 2 2.5Y4/2暗灰色 中礫～細礫混じり細砂～シルト
- 3 2.5Y4/2暗灰色 中礫混じり細砂シルト
- 4 2.5Y3/2黒褐色 細礫混じりシルト(基盤層ブロック含む)
- 5 2.5Y3/1黒褐色 極細砂混じりシルト(粘土性あり)
- 6 2.5Y3/2黒褐色 極細砂混じりシルト(団粒状構造あり)
- 7 10YR4/4褐色 シルト混じり粘土(固く締まる)
- 8 10YR4/2灰黄褐色 シルト混じり粘土
- 9 2.5Y6/3にぶい黄色 シルト混じり粘土(団粒状構造あり)
- 10 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 シルト混じり極細砂～シルト(炭化物・焼土多く含む)
- 11 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 中礫～細礫混じり細砂～シルト
- 12 2.5Y4/3オリーブ褐色 中礫～細礫混じり極粗砂～シルト
- 13 2.5Y4/4オリーブ 砂礫混じり細砂～シルト
- 14 2.5Y4/2暗灰色 粗砂混じり細砂～シルト
- 15 2.5Y4/2暗灰色 極細砂混じりシルト(φ 1cm前後の礫含む)

【土取穴80埋土】

- 16 2.5Y4/1黄灰色 粗砂～極細砂混じりシルト(φ 5cm大の礫含む)
- 17 2.5Y4/2暗灰色 粗砂～極細砂混じりシルト(φ 5～10cm大の礫多量を含む)
- 18 2.5Y4/3オリーブ褐色 粗砂混じり極細砂～シルト
- 19 2.5Y4/4オリーブ褐色 極細砂混じりシルト～粘土
- 20 2.5Y3/1黒褐色 極細砂混じりシルト(φ 20cm前後の礫含む)
- 21 2.5Y4/1黄灰色 極細砂混じりシルト
- 22 2.5Y3/2黒褐色 極細砂混じりシルト(φ 1cm大の礫少量含む)
- 23 2.5Y5/4黄褐色 極細砂混じりシルト【基盤層】

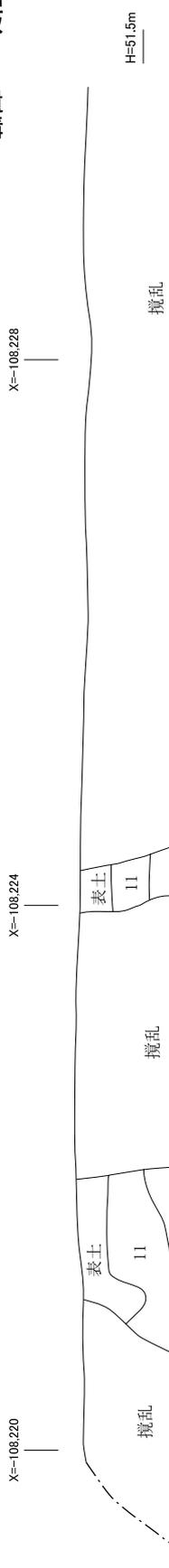
【地業100埋土】

【土坑20埋土】



図版3 遺構

東壁

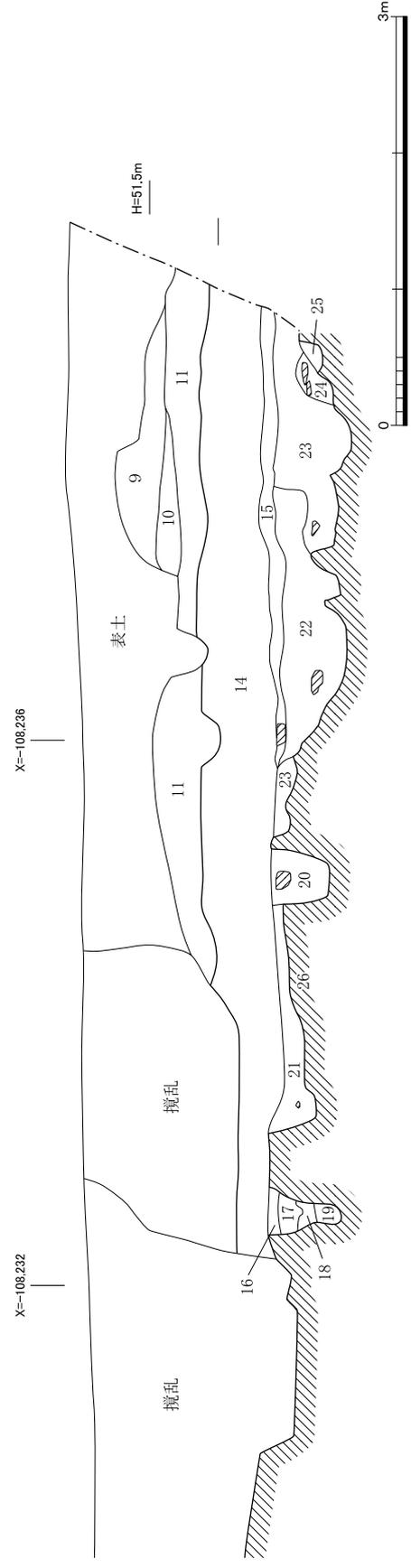


- 1 10YR3/2黒褐色 中砂混じり細砂～極細砂
- 2 10YR4/2灰黄褐色 中砂混じり細砂～極細砂 (φ 5cm大の礫含む)
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色 極粗砂～粗砂混じり細砂(三和土による貼付整形)
- 4 2.5YR4/2暗灰黄褐色 中砂混じり細砂～極細砂
- 5 2.5YR4/3オリーブ褐色 粗砂混じり細砂～細砂～極細砂 (φ 5cm大の礫含む)
- 6 10YR3/3暗褐色粗砂
- 7 2.5Y6/3にぶい黄色 粘土混じりシルト 締めが悪い
- 8 10YR4/2灰黄褐色 粗砂混じり極細砂～シルト
- 9 10YR4/3にぶい黄褐色 粗極細 粗砂混じり極細砂～シルト (φ 1～3cm大の礫多く含む)
- 10 10YR4/2灰黄褐色 粗砂混じり極細砂～シルト
- 11 10YR3/1黒褐色 中礫～細礫混じり極細砂～シルト
- 12 2.5Y4/2暗灰黄色 小礫～粗砂混じり極細砂～シルト
- 13 2.5Y4/2暗灰黄色 極細砂混じりシルト (炭・土師器小片含む)
- 14 2.5Y4/2暗灰黄色 小礫～粗砂混じり極細砂～シルト
- 15 10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂混じりシルト (炭化物多く含む 団粒状のアロク混じる)

【土坑50埋土】

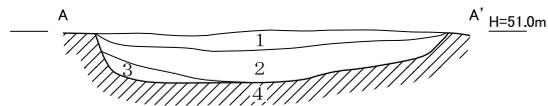
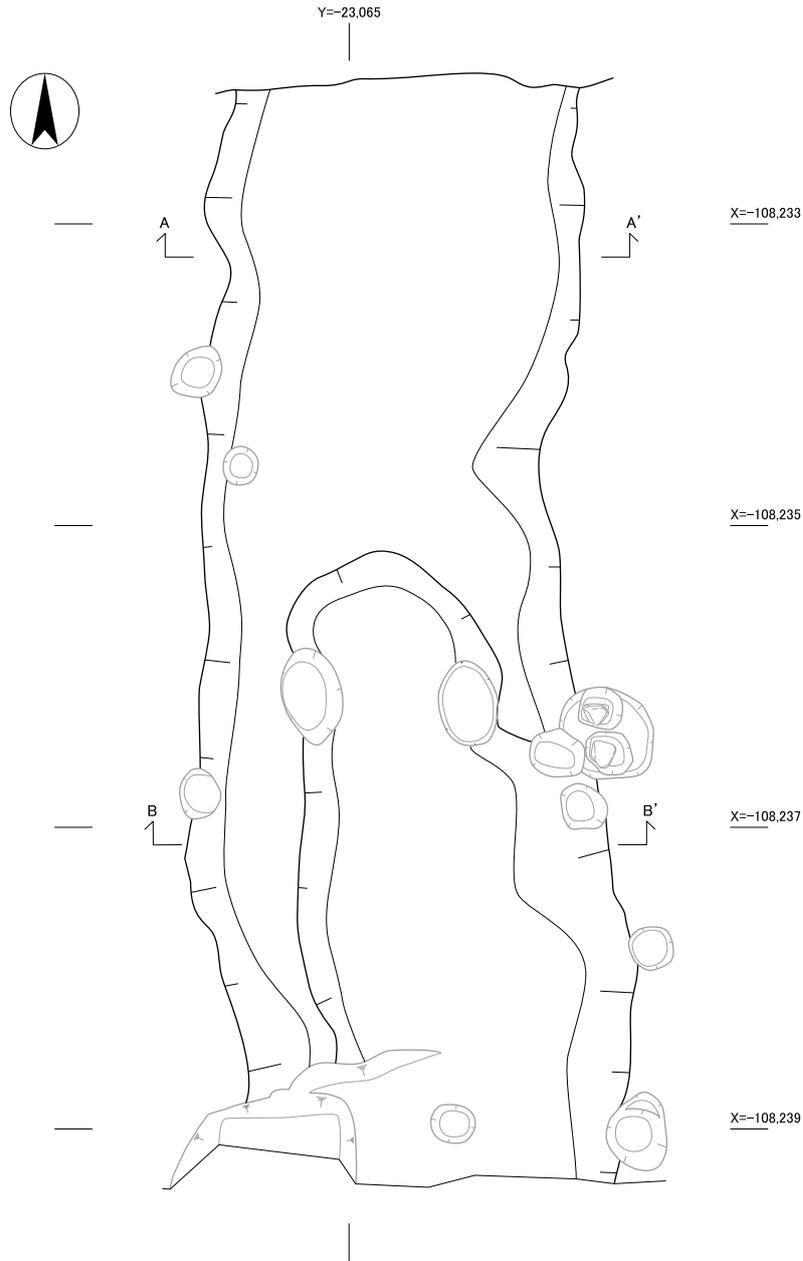
- 16 10YR4/2灰黄褐色 極細砂混じりシルト (φ 3cm大の礫含む)
- 17 10YR3/2黒褐色 極細砂混じりシルト(基盤層ブロック多量含む)
- 18 10YR3/3暗褐色 極粗砂～粗砂混じりシルト(締めが悪い)
- 19 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト混じり極細砂(締めが悪い)
- 20 7.5YR3/3暗褐色 極細砂混じりシルト (φ 5～10cm大の基盤層ブロック含む)
- 21 7.5YR4/3褐色 極細砂混じりシルト (φ 3～10cm大の礫・基盤層ブロック・炭化物・土師器小片若干含む)
- 22 10YR4/2灰黄褐色 粗砂混じり細砂～シルト(炭化物・土師器片若干含む 基盤層ブロック部分的に含む)
- 23 10YR3/2黒褐色 極粗砂混じり極細砂～シルト(炭化物若干含む)
- 24 10YR4/2灰黄褐色 極細砂混じりシルトに10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂混じりシルト(基盤層)をブロック状に含む
- 25 10YR4/4褐色 極細砂混じり(土師器小片若干含む)
- 26 2.5Y5/4黄褐色 極細砂混じりシルト【基盤層】

【扉198埋土】

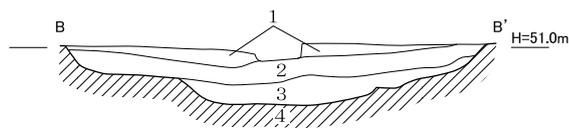


【扉198埋土】

調査区東壁断面図 (1 : 50)



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂混じりシルト(φ 2cm前後の礫少量含む)
- 2 10YR4/3~4/4にぶい黄褐色 極細砂混じりシルト
- 3 10YR4/2灰黄褐色 極細砂混じりシルト(φ 5cm前後の地山ブロック・崩落土含む)
- 4 10YR4/4褐色ブロック+10YR4/4褐色 極細砂混じりシルト【基盤層】

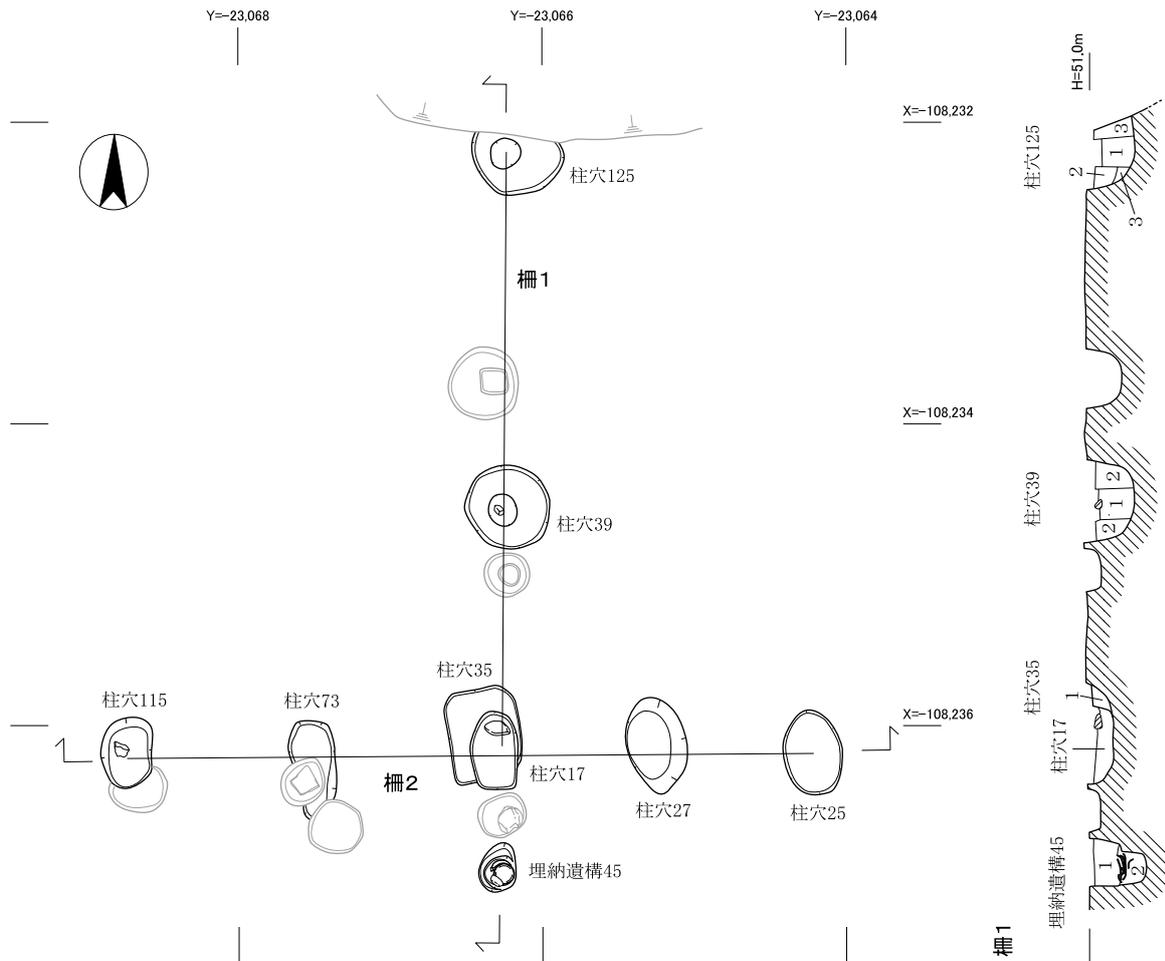


- 1 10YR3/3暗褐色 極細砂混じりシルト(極粗砂~粗砂多く含む)
- 2 10YR3/2黒褐色 極細砂混じりシルト
- 3 10YR2/3黒褐色 極細砂混じりシルト(φ 5cm大の礫含む)
- 4 10YR4/4褐色ブロック+10YR4/4褐色 極細砂混じりシルト【基盤層】



溝状遺構200実測図 (1 : 50)

図版6
遺構



柵2



埋納遺構45

- 1 10YR2/3黒褐色 極細砂混じりシルト
木炭細片少量含む
- 2 10YR4/2灰黄褐色 極細砂混じりシルト
木炭細片少量含む(粘性あり)

【柵1】

柱穴35

- 1 10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂混じりシルト
(φ3cm大の基盤層ブロック少量含む)

柱穴39

- 1 10YR3/3暗褐色 極細砂混じりシルト
- 2 10YR4/2灰黄褐色 極細砂混じりシルト+
10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂混じりシルト
ブロック多量に含む

柱穴125

- 1 10YR5/2灰黄褐色 極細砂混じりシルト
- 2 10YR4/3にぶい灰褐色 極細砂混じりシルト
(基盤層ブロック含む)
- 3 10YR4/4褐色 極細砂混じりシルト
(基盤層ブロック少量含む)

【柵2】

柱穴115

- 1 10YR4/2灰黄褐色 極細砂混じりシルト
(土師器細片若干含む)

柱穴73

- 1 10YR3/3~4/3暗褐色 極細砂混じりシルト

柱穴17

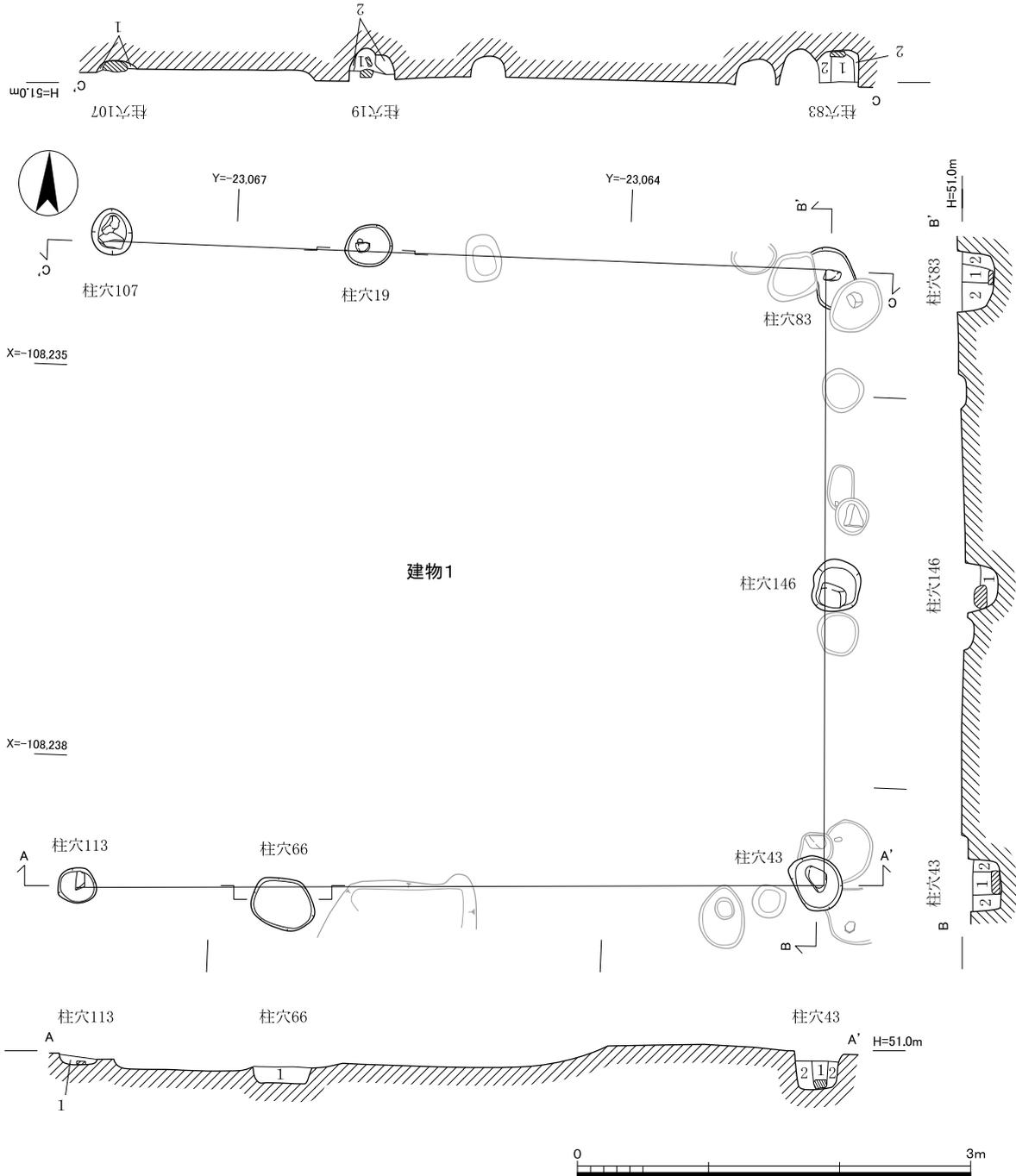
- 1 10YR4/2灰黄褐色 極細砂混じりシルト
(土師器・炭化物少量含む)

柱穴27

- 1 10YR3/3暗褐色 極細砂混じりシルト
(土師器片・炭細片混じる)

柱穴25

- 1 10YR3/2黒褐色 極細砂混じりシルト
(土師器片・炭細片混じり)



柱穴113

1 10YR4/2灰黄褐色 極細砂混じりシルト(炭・土師器片含む)

柱穴66

1 10YR3/3暗褐色 極細砂混じりシルト
(10YR4/4褐色シルトまだらに含む、炭・土師器片含む)

柱穴43

1 10YR3/3暗褐色 細砂 極細砂混じりシルト含む
2 10YR4/3暗褐色 極細砂混じりシルト

柱穴146

1 10YR4/2灰黄褐色 極細砂混じりシルト(炭・土師器片含む)

柱穴83

1 10YR3/1黒褐色 極細砂混じりシルト(土師器細片含む)
2 10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂混じりシルト(基盤層ブロック含む)に 10YR4/2灰黄褐色 極細砂混じりシルト

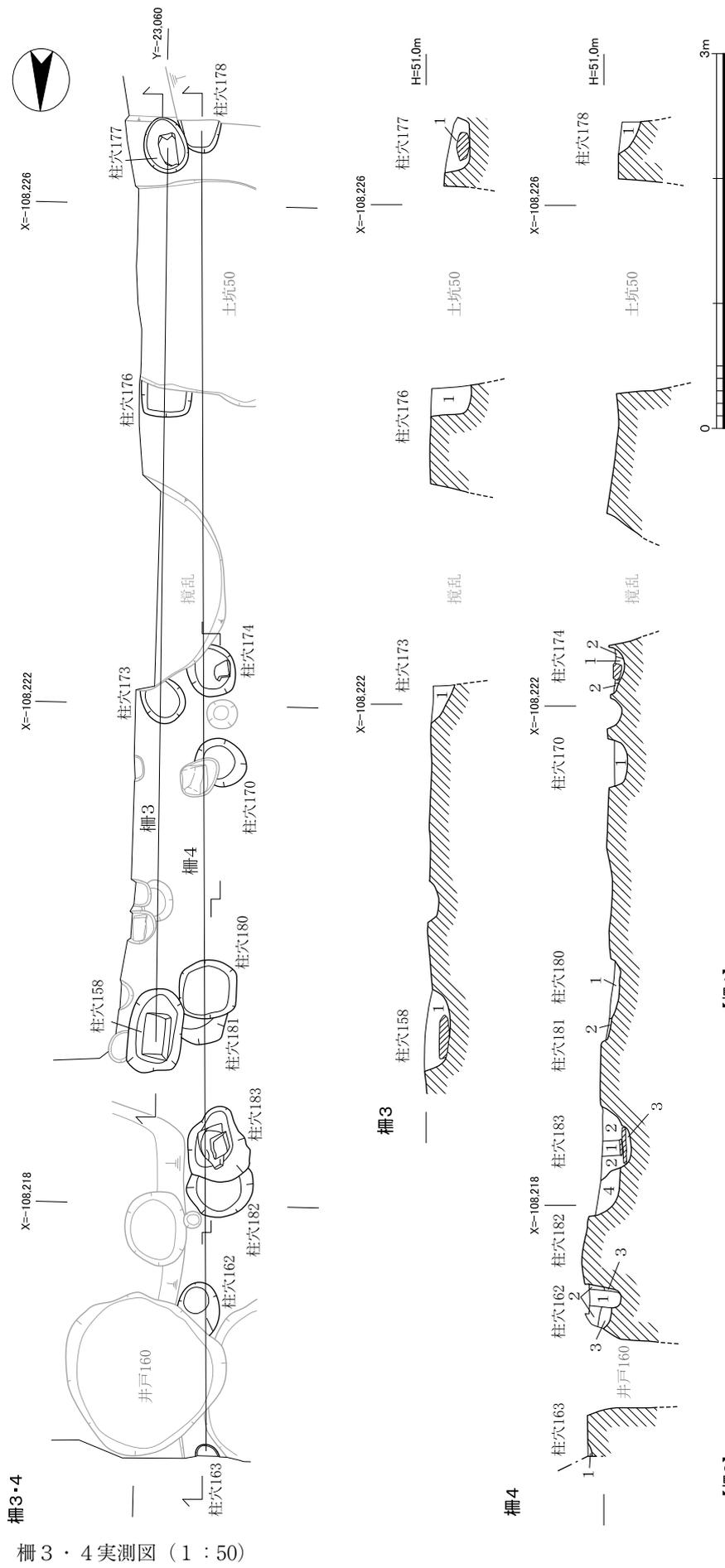
柱穴19

1 10YR3/2黒褐色 極細砂混じりシルト(炭・土師器片含む)
2 10YR4/4褐色 極細砂混じりシルト(φ1~2cm程度の基盤層ブロック含む)

柱穴107

1 10YR4/2灰黄褐色 極細砂混じりシルト
(10YR4/4褐色シルトまだらに含む、炭・土師器片含む)

建物1実測図(1:50)



柵3・4

柵3・4実測図 (1:50)

【柵3】

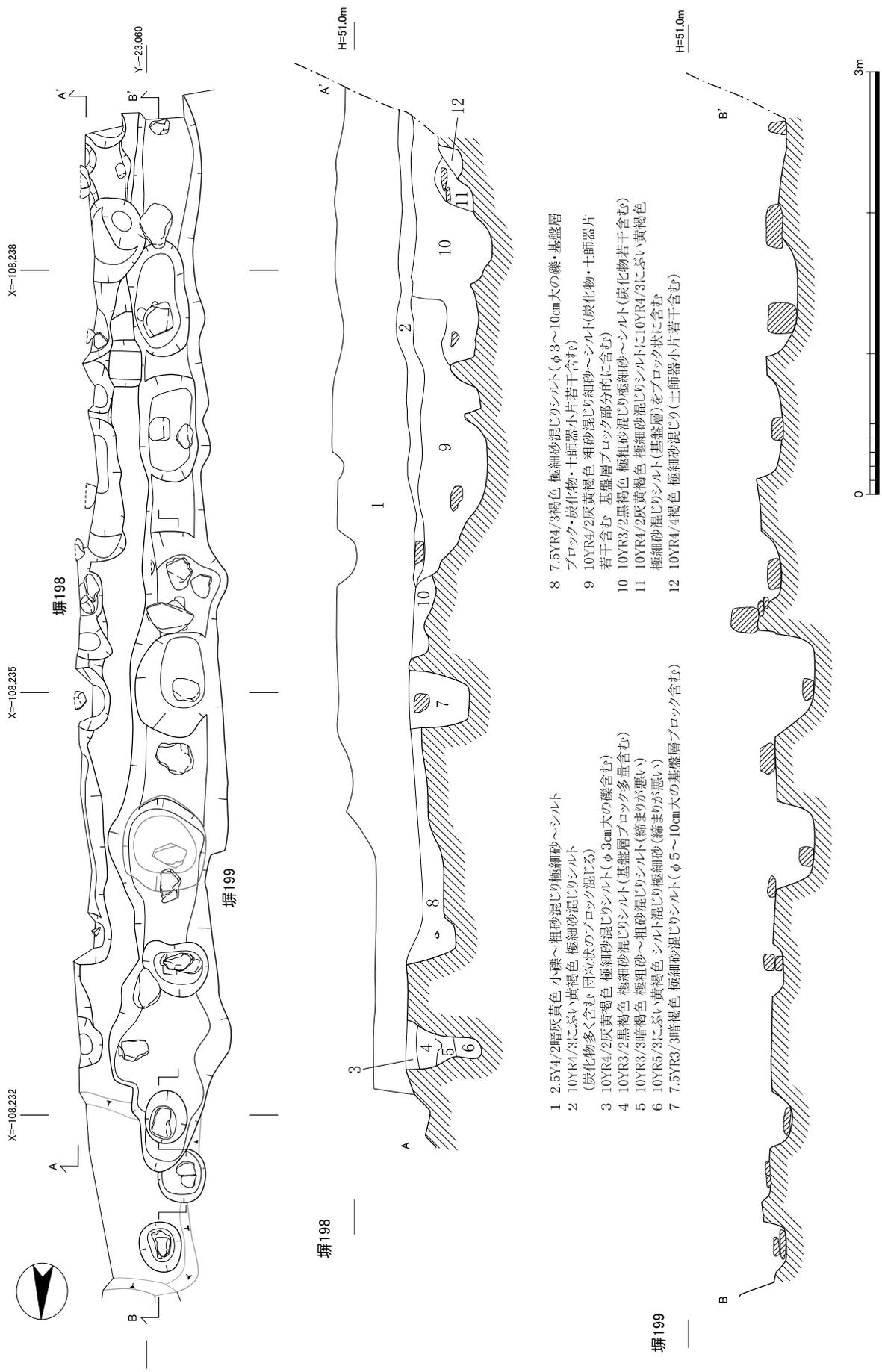
- 柱穴158**
 1 10YR3/3暗褐色 極細砂混じりシルト(10YR4/4褐色粘土ブロック
 まだらに含む)
柱穴173
 1 10YR3/3暗褐色 極細砂混じりシルト(10YR4/4褐色粘土ブロック
 まだらに含む)
柱穴176
 1 10YR4/2灰黄褐色 シルト(10YR4/4褐色シルトまだらに含む)
柱穴177
 1 10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂混じりシルト

【柵4】

- 柱穴163**
 1 10YR3/3暗褐色 砂泥(10YR4/4褐色粘土ブロックまだらに含む)
柱穴162
 1 10YR4/4褐色 極細砂混じりシルト(粘性あり)
 2 2.5Y4/3オリーブ褐色 極細砂混じりシルト
 3 2.5Y4/2暗灰黄色 極細砂混じりシルト(粘性あり)
柱穴182・183
 1 2.5Y4/2暗灰黄色 極細砂混じりシルト(φ3cm前後の基盤層ブロック多く含む)
 2 2.5YR4/3オリーブ褐色 極粗砂混じりシルト(φ1cm前後の基盤層ブロック含む)
 3 2.5YR3/3暗オリーブ褐色 極細砂混じりシルト
 4 2.5YR4/4オリーブ褐色 極細砂混じりシルト

柱穴181・180

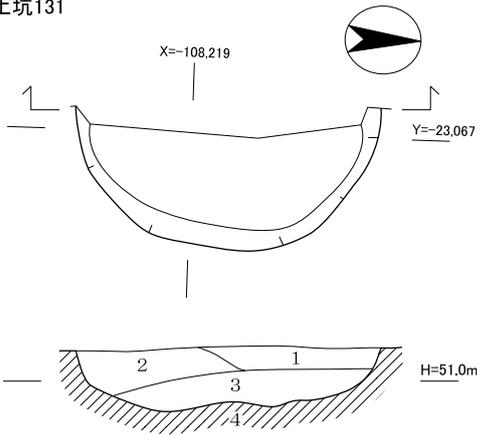
- 1 2.5Y4/3オリーブ褐色 極細砂混じりシルト
 2 2.5Y5/4黄褐色 極細砂混じりシルト
柱穴170
 1 2.5Y4/3オリーブ褐色 極細砂混じりシルト(基盤層ブロック含む)
柱穴174
 1 2.5Y4/4暗灰黄色 極細砂混じりシルト
 2 2.5Y4/3オリーブ褐色 極細砂混じりシルト
柱穴178
 1 10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂混じりシルト



堀 198・199 実測図 (1 : 40)

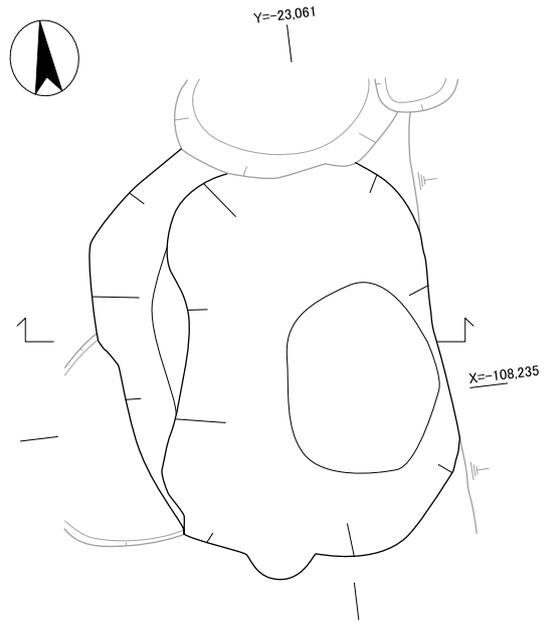
- 1 2.5Y4/2暗灰黄色 小礫～粗砂混じり極細砂～シルト
- 2 10YR4/3にぶい、黄褐色 極細砂混じりシルト (炭化物多く含む 団粒状のブロック混じる)
- 3 10YR4/2灰黄褐色 極細砂混じりシルト (φ 3cm大の礫含む)
- 4 10YR3/3暗褐色 極細砂混じり粗砂 (縮まりが悪い)
- 5 10YR5/3にぶい、黄褐色 シルト混じり極細砂 (縮まりが悪い)
- 6 7.5YR3/3暗褐色 極細砂混じりシルト (φ 5～10cm大の基盤層ブロック含む)
- 7 7.5YR4/3褐色 極細砂混じりシルト (φ 3～10cm大の礫・基盤層ブロック・炭化物・土師器小片若干含む)
- 8 10YR4/2灰黄褐色 粗砂混じり細砂～シルト (炭化物・土師器片若干含む 基盤層ブロック部分的に含む)
- 9 10YR3/2黒褐色 極粗砂混じり極細砂～シルト (炭化物若干含む)
- 10 10YR4/2灰黄褐色 極細砂混じりシルトに10YR4/3にぶい、黄褐色 極細砂混じりシルト (基盤層) をブロック状に含む
- 11 10YR4/4褐色 極細砂混じり (土師器小片若干含む)
- 12 10YR4/4褐色 極細砂混じり (土師器小片若干含む)

土坑131

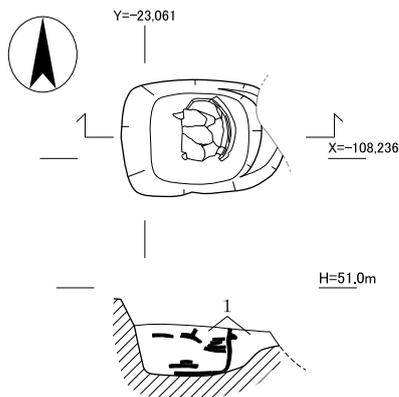


- 1 10YR3/1黒褐色 極細砂混じりシルト(φ3cm大の礫含む)
- 2 10YR3/2黒褐色 極細砂混じりシルト(炭若干含む)
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂混じりシルト(炭・土師器 細片若干含む)
- 4 10YR4/4褐色ブロック
+10YR4/4褐色 極細砂混じりシルト【基盤層】

土坑40



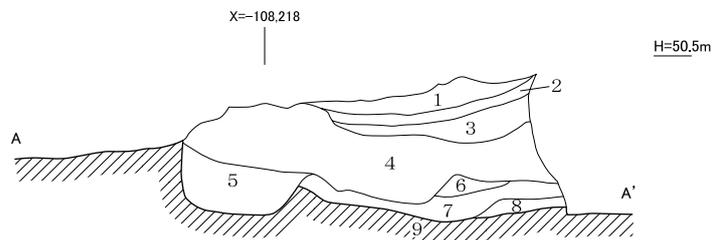
土坑10



- 1 10YR3/3暗褐色 極細砂混じりシルト

- 1 10YR4/4褐色 極細砂混じりシルト(粘性あり 炭化物・φ3cm前後の礫含む)
- 2 10YR2/2黒褐色 極細砂混じりシルト(炭化物・焼土・極粗砂～φ5cm大の礫含む)
- 3 10YR4/1褐灰色 シルト混じり粘土(締まりが悪い 炭化物・3～5cm前後の礫・瓦含む)
- 4 10YR4/2灰黄褐色 粘土混じりシルト(締まりが悪い φ3～5cm大の礫・φ10cm大の礫含む 焼けた石が多い)
- 5 10YR4/4褐色 粘土～シルト(聚楽土)【基盤層】

土坑202

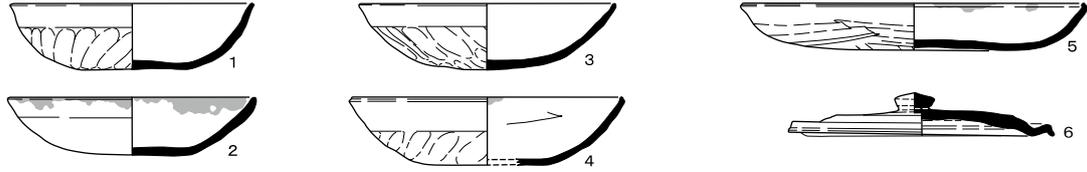


※ A-A'は図版1と対応する

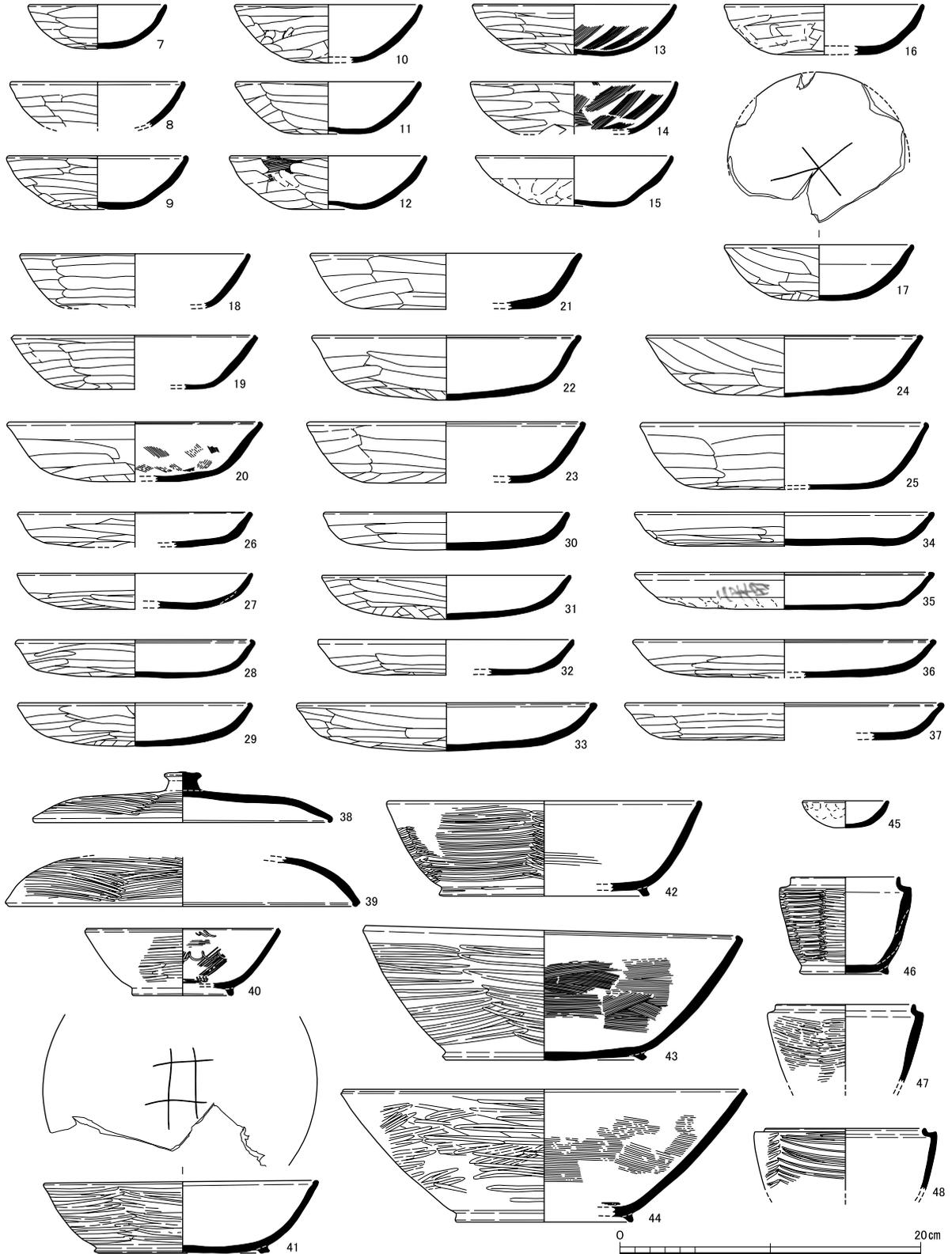
- 1 2.5Y4/4オリーブ褐色 小礫混じり粗砂中砂混じり細砂(φ3cm大の礫含む)
- 2 2.5Y5/2暗灰黄色 細砂～極細砂(葉埋状互層堆積)
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色 極粗砂～粗砂混じり細砂(φ3cm大の礫含む)
- 4 10YR4/1褐灰色 極細砂～シルト(φ3cm前後の礫多数含む)
- 5 10YR3/2黒褐色 極粗砂混じり 極細砂～シルト(φ5～10cm大の礫含む)
- 6 10YR4/2灰黄褐色 極細砂混じりシルト(φ5cm大の基盤層ブロック含む)
- 7 2.5Y4/3オリーブ褐色 極細砂混じりシルト(炭化物若干含む 殆ど基盤層の崩落土)
- 8 2.5Y3/2黒褐色 極細砂～シルト(炭・灰多量に含む)
- 9 10YR4/4褐色ブロック+10YR4/4褐色 極細砂混じりシルト【基盤層】



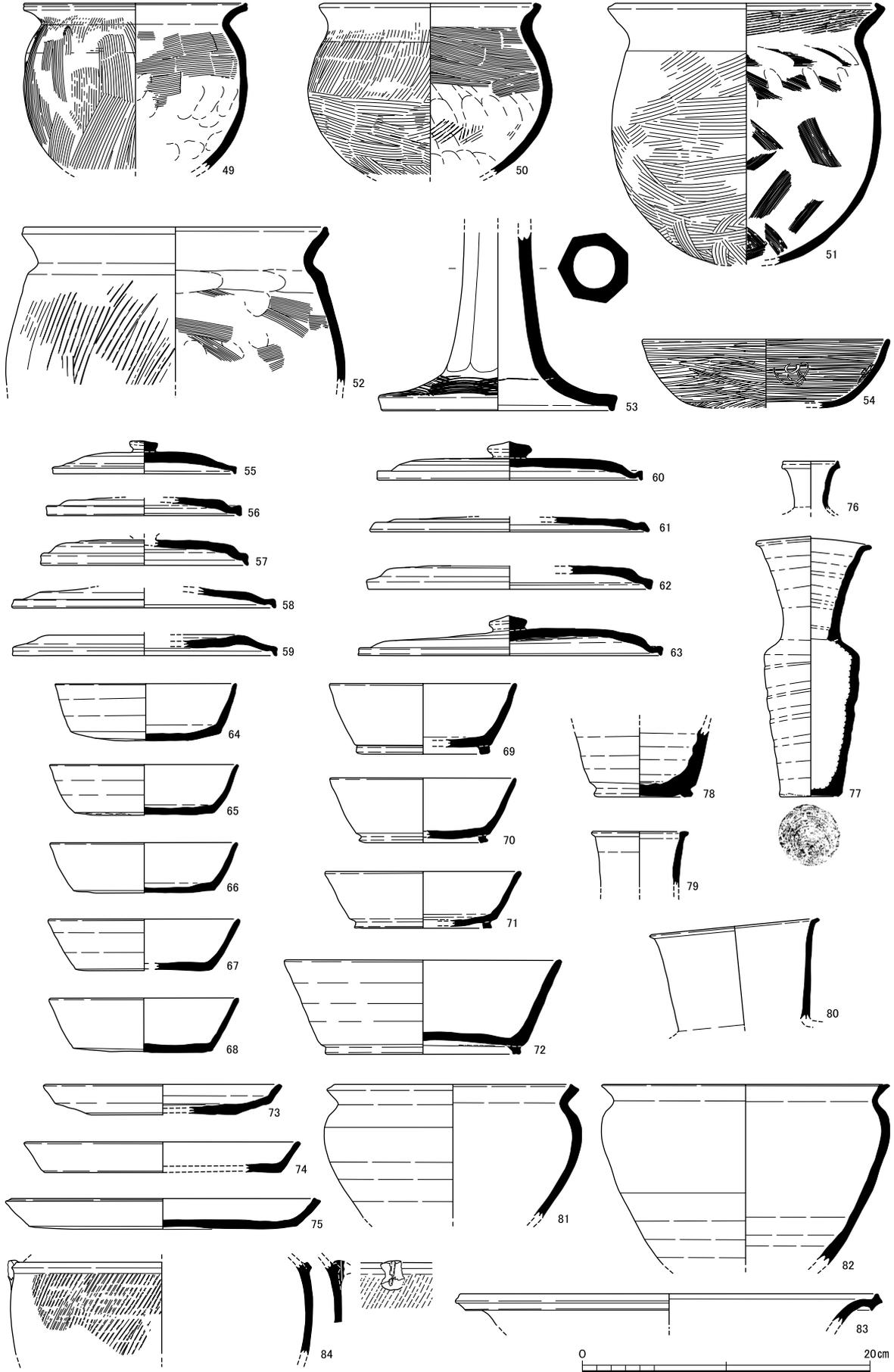
埋納遺構45



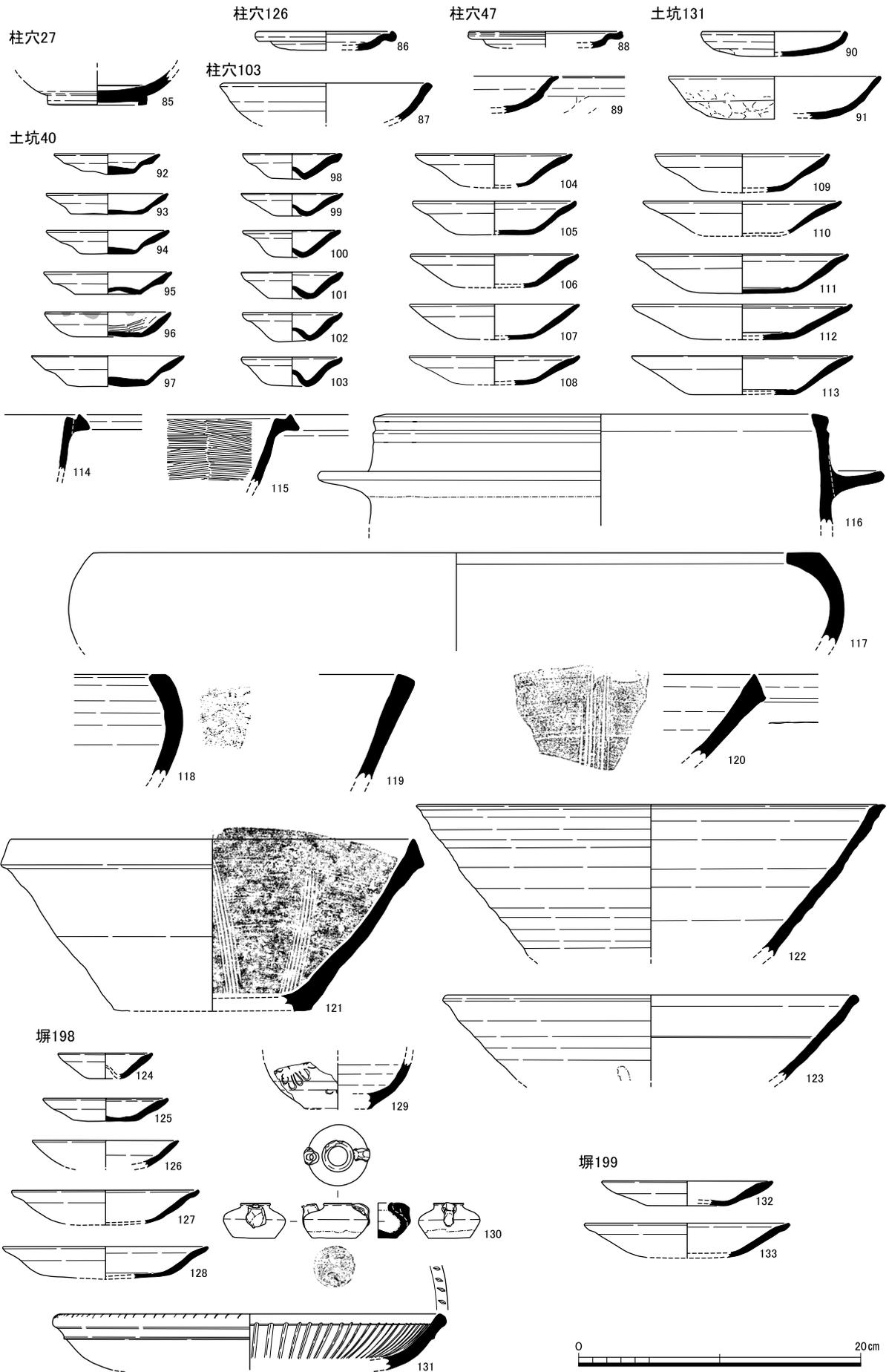
溝状遺構200



土器実測図1 (1 : 4)

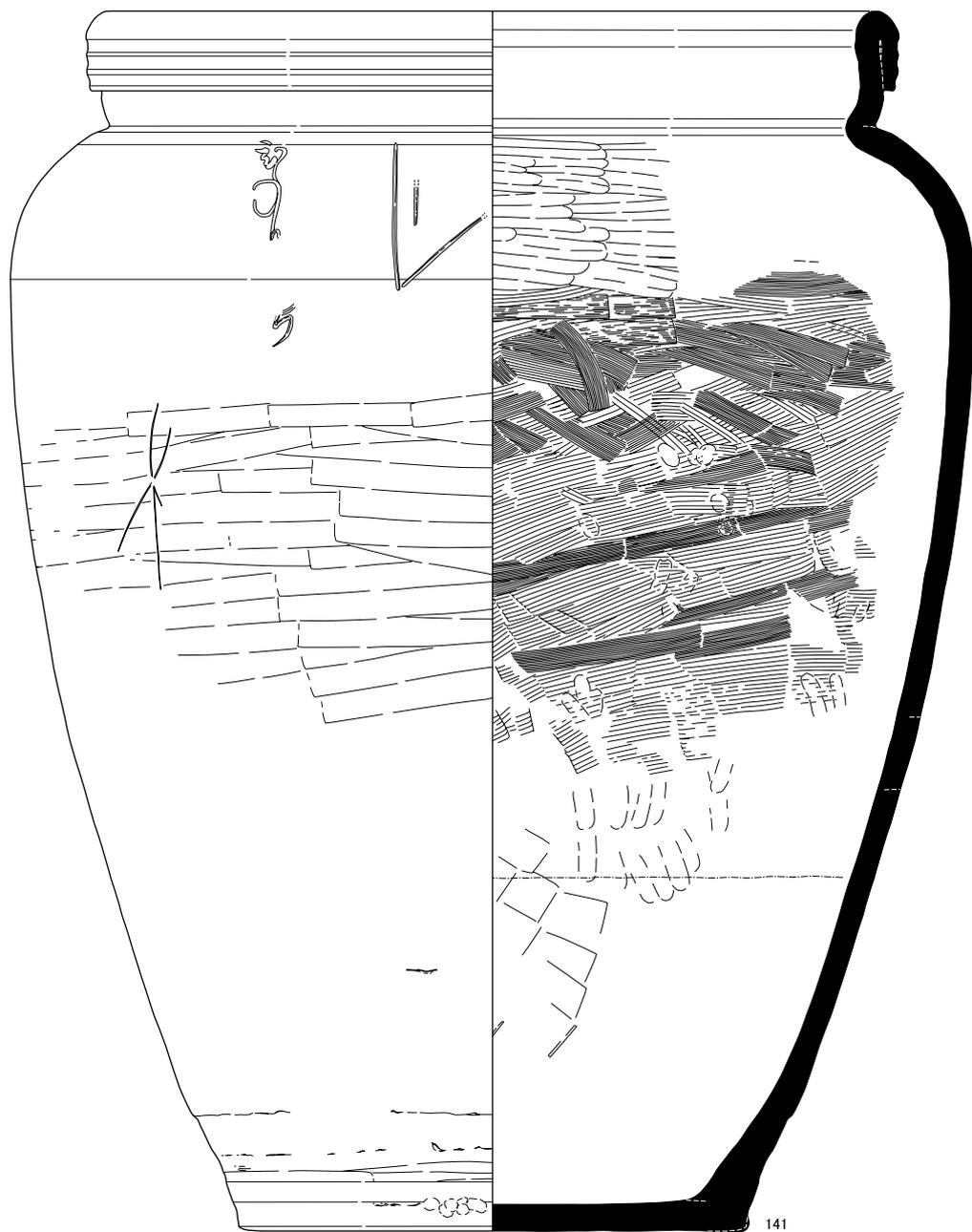
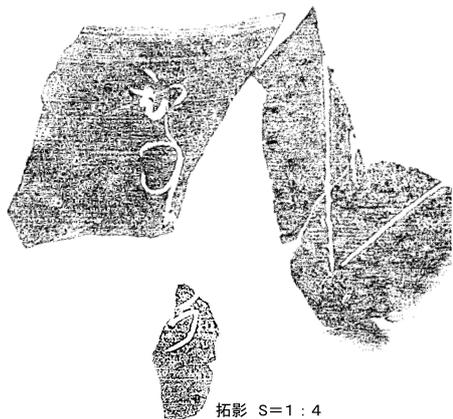


土器実測図2 (1 : 4)



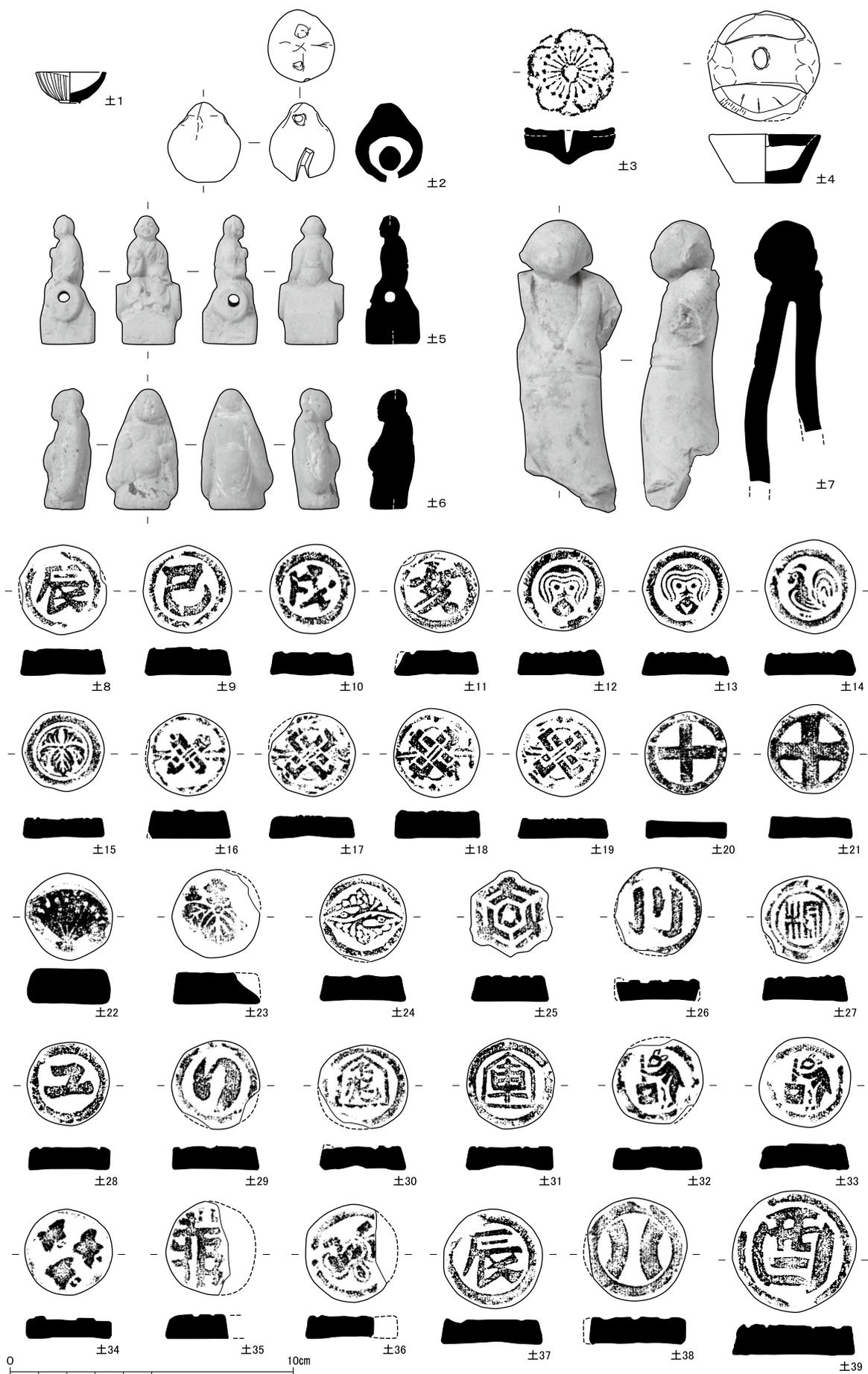
土器実測図3 (1:4)

土坑50



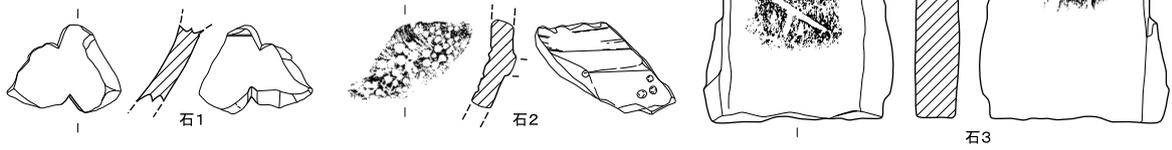
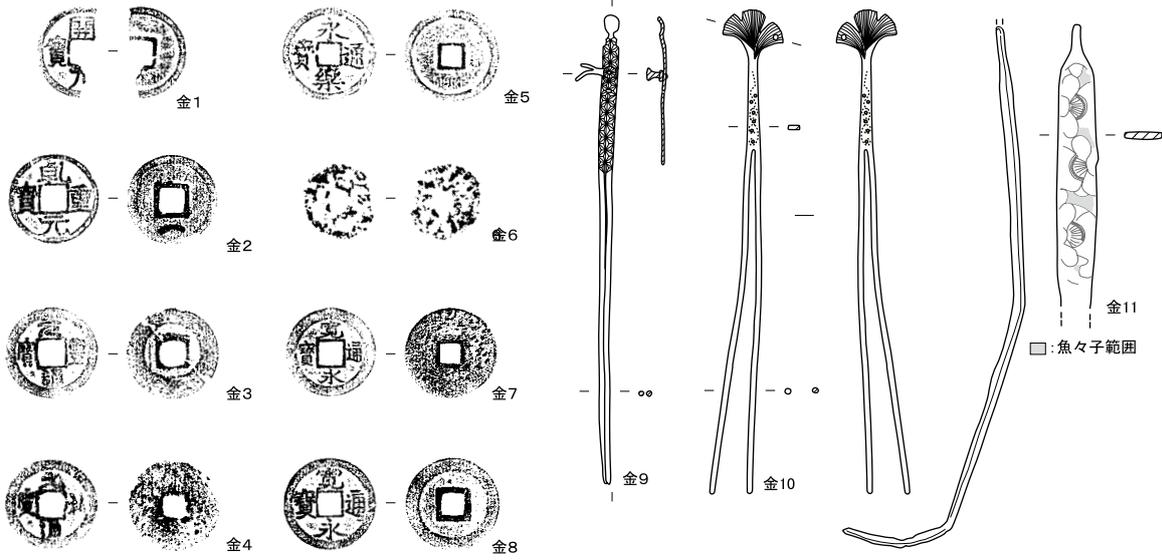
0 30cm

土器実測図5 (1:6)

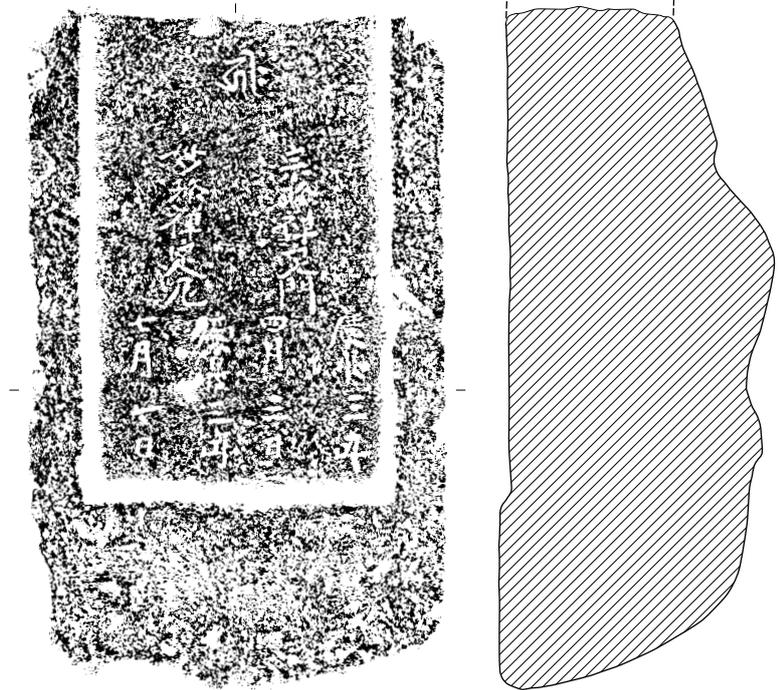


土製品拓影及び実測図1 (1:2)

図版 16
遺物




 宗□禪定門 慶長三年 四月三日
 妙□禪定尼 慶長三年 七月一日
 (珍カ)



金属製品拓影及び実測図 (1 : 2)、石製品拓影及び実測図 (1 : 4)



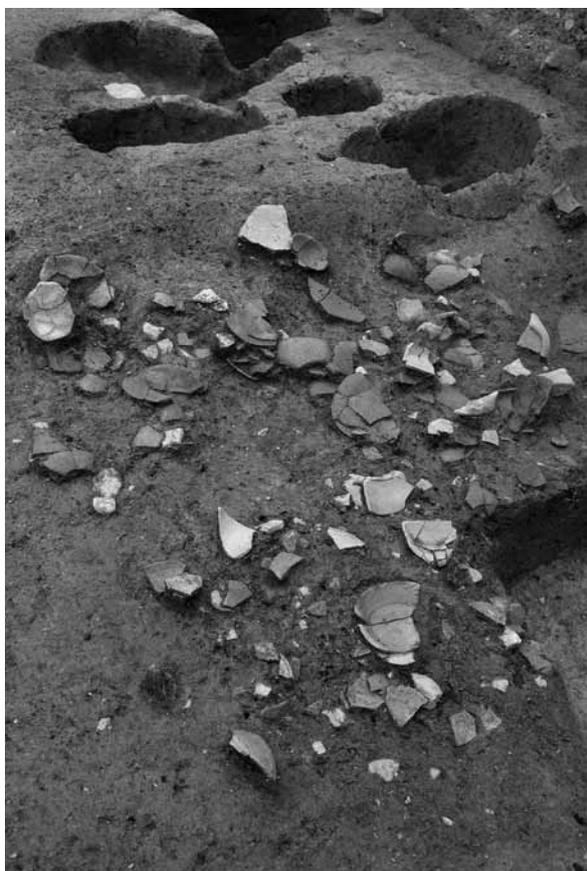
1 調査区全景（北東から）



2 調査区南半全景（北西から）



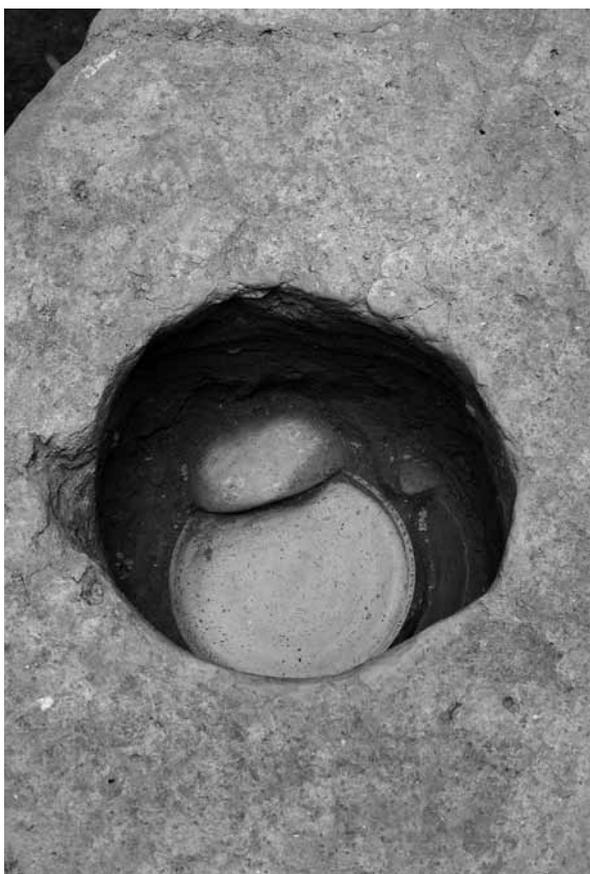
1 溝状遺構 200 完掘状況 (北東から)



2 溝状遺構 200 上層遺物出土状況 (北西から)



3 溝状遺構 200 下層遺物出土状況 (北から)



1 埋納遺構45検出状況（東から）



2 埋納遺構45遺物出土状況（東から）



3 柵1・2（北から）



1 堀198〔左〕・堀199〔右〕（北西から）



2 堀198・199（南から）



3 地業100（北から）



1 土坑10遺物出土状況（西から）



2 土坑40半截状況（南から）



3 土坑50甕出土状況（西から）



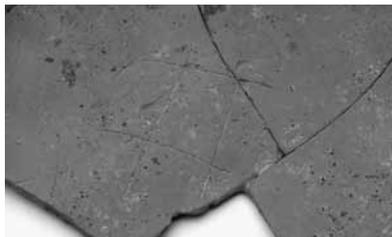
4 土坑50甕据付状況（西から）



5 土坑50甕除去後（西から）

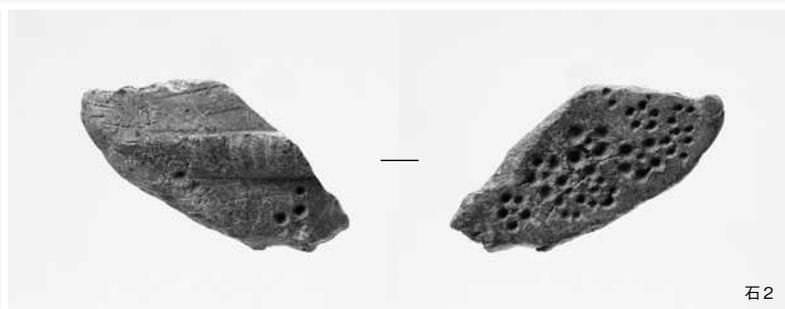
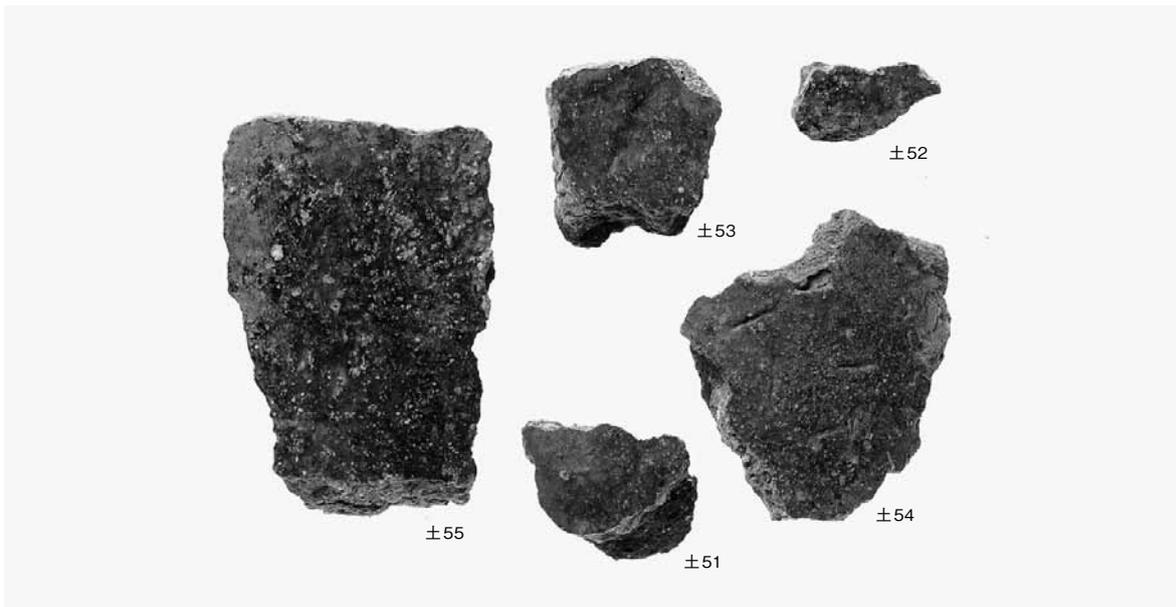
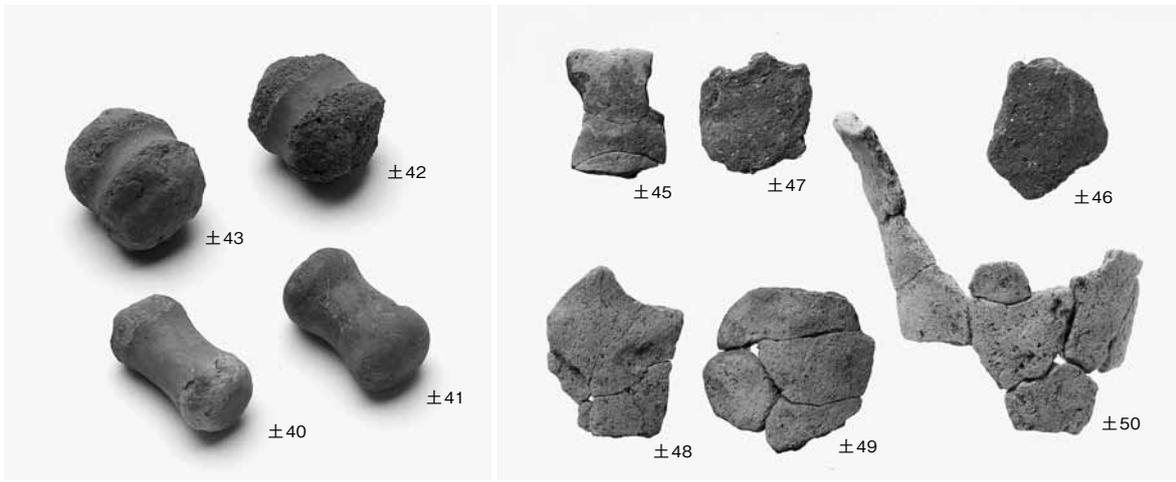


6 土坑50底面石検出状況（西から）

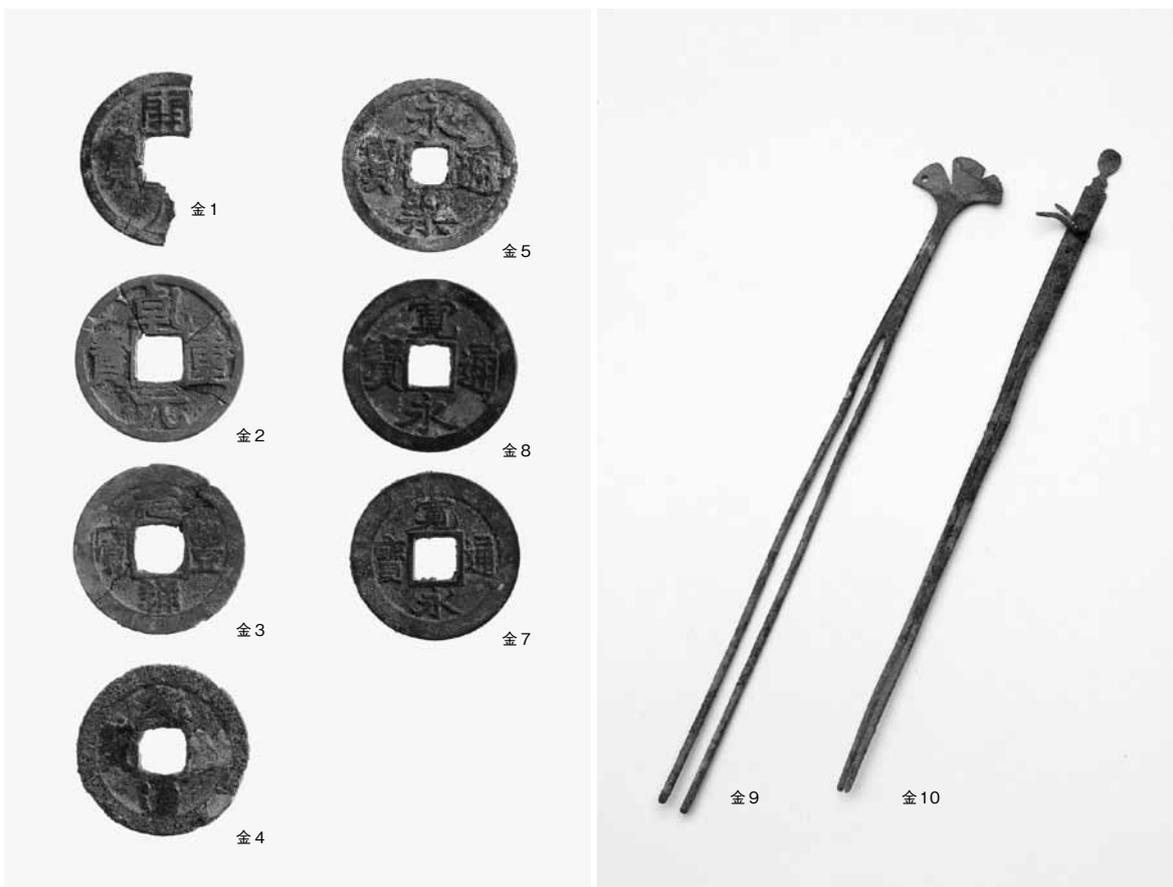




土器類2、瓦類



土製品、石製品 1



石製品2、金属製品、動物遺存体

報告書抄録

ふりがな	へいあんきゅうおおとのいあと・じゅらくだいあと							
書名	平安宮大宿直跡・聚楽第跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2024-5							
編著者名	三好孝一・早見由槻・谷野誠也・岡田麻衣子							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2025年4月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきゅうあと 平安宮跡 じゅらくだいあと 聚楽第跡	きょうとしかみぎょうく 京都市上京区 ひぐらしどおりなかだちうり 日暮通中立売 さがるすはまいけちよう 下る須浜池町 244番 他5筆	26100	2 234	35度 01分 28秒	135度 44分 50秒	2024年7月 8日～2024 年9月6日	280㎡	集合住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安宮跡 聚楽第跡	宮殿跡 平城跡	平安時代前期	溝状遺構、埋納遺構、柵	土師器、須恵器、製塩土器、灰釉陶器、瓦、凝灰岩碎片		大宿直跡に於いて初めて面的な発掘調査を実施し、大宿直の東限築地の内溝の可能性のある溝状遺構を検出した。 平安宮域では検出例のほとんどない、平安時代後期と室町時代後期の遺構・遺物を検出した。		
		平安時代中期～後期	柵、柱穴、土坑	土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、瓦				
		室町時代中期～後期	掘立柱建物、溝、堀、地業、柱穴、土坑、土取穴	土師器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、銭貨、金属製品				
		江戸時代後期	土坑、井戸、土取穴	磁器、輸入陶磁器、土製品、銭貨、金属製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2024-5

平安宮大宿直跡・聚楽第跡

発行日 2025年4月30日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273番
〒602-8358 TEL 075-467-5151